我樂多誌

昭和十一年一月第十号

七

特別
イ4
1919
470

176735

我樂多話

昭和四十年十月下旬起筆

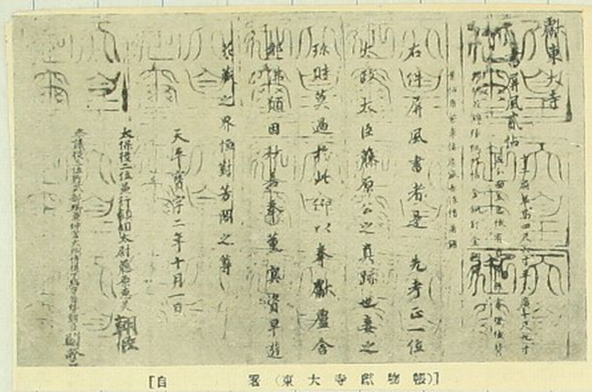
○書物展望社より書行を勧められ隨筆がやつと脱稿した。夏の末から筆を起し一時は毎日課として三十枚位書いたが、ことしの暑さと文墨の疲とで隨筆早稿四五枚出来ては、常々疲れるので、ときどき休の出掛つて居つあとは、あるかう、稿と公彰しかりかた元の通りの出しとして、身を通のうちをもつくることが止むを得ずうちの冬期は暖房をするから、掛燈漫筆と名を命じ、内容は五部に分ち、掛炉漫筆首部の一百一き

十和田湖 乗入 三時半 今 91×63糎

38- 9256

鉢植にされた事は、書家の慶が才三、紀が
が弟四、身を[illegible]紀が終りにある。百数のまゝ消
壺中に[illegible]が自分印刷してこゝに頂いて渡るのである。
序文まい、絵葉を庭と呼ぶと云ふ故向むきに
芸、自風紀の南目と名家祝印のある[illegible]と巻
頭に物の芸、巻鉢の表紙の表紙の
為する事に成る。

○先は十数株の白樺と弟の庭園に植えそえた
北海文鉢の磯部の鷺郎の草鉢数[illegible]自分の
都合で高山植物の鉢植を持来り贈られるので
撮先れた小花の盆栽が並ぶやうになった。磯部
は俗語で高山植物が好きと見へて、貴られ[illegible]


[(紙物)(東大寺)(東)(写)自]

ものも時一種の風格がある。大宝
形の白の花のある大文字と云ふ植物
や寒さにも強のちくしのちくしれのるい机
上又粉を風格がある。代はるく
宜いと云ふ。ヒメシャクナゲ
山三鉢程ある。すの延びるのが
平鉢の黄色してあるのが、野放
あるので、花とあるとも遠かれおもし
うい。昔数の二三種ある。えんは日
蔭に植へて繁殖を図りつ
ある。

○十月上旬季節は盆の多忙の時で、百果の実

のる時もあり、百果の輪湊する時もある。九月は例年
極まって関西数ケ所にて松茸を焼くなり。中秋
ともし葡萄や柿が来る。郷里にては梨子や栗を
かくる。昔し或る文人は十月は小刀を磨く時なりと云
ふなれば、貧人の食厨も一時果物を満たし、いくらか刀
がらく切めて別産祝ひ者さんず、いつもうくうく
秋は腸胃の健剛を思はしめる。九月節はむしろ
果物のみならず、魚の逸めるも好時節にして、鄉里より
寄せたる九月を云ふ。秋は鱸食の多かりの時にて酒も割合
よく売る。
○近頃の品の蒐集をフツツリ止めたれば、えうもも往

々人が持帰りたるものがあるの。九月は獲物にて茸を
山が舟山の蒐集を刻して進ずる。連環鈕の銅章も
刻も枕も玩賞の値あることなれども
書畫の逸品を
九月は、古伊摩利の
外国を賜へ、
何も小さなるもの
が格好がよく寿俗
心おもしろい。九月
祝賀の時人から送
られし無地の栗の香
合は甚だ小品にして

心がけるものも特である。北條朝鮮の観光に出かけた日人が土産として風鈴を買うて来へた。これは廣島地方の花ちる國寺奉德寺の神鐘を模したものである。東西の新羅期時代の名鐘とされるものである。模倣の風鈴も沢山出るとも笠印し置くべき足らざるべし。

ろ歩るきん丸じんの骨董品に獲れた二品の一つは品の燭台もと言さ二十餘年前の古董品人の青銅製の彫り板のものである。今一つは外面の木彫で人面獸身像で二重の基礎に一本の彫りぬきで外面彫味のものである。又北條産出もある鉛筆ケヅリに古い時代の外面の帆前船を擬したものが一寸あるー〜〜出来たものうて笠中の物である。

の横井也有の句
その絵を云く
酒は六中愛とする
ものなり茶は涼
過ぎるこの方
句あいさしつの
茶子の番をも
りし用のときは
一度と使ひ捨
し、退くときは
袖のうちにかくる
こゝに神龍の徳

きあるべしと思ふべし

○今の煙草の火皿は一摘の刻み煙草をつめて火を點じて吸ふことが廢つれば、保し全然廢つれども、家庭のいまだ此の吸方が殘嗚を繋ぐある。保し今日のやうにシガレットが盛んに行はれたら、煙草の味を全く知らない人も多く、現在近頃の煙草は「徳用」の喫煙漫談と云ふ題で相当面白く煙草のことも出してある人が、煙草を吸ふ味を解しらいからとんと教へたくんなと云ふてある。次第に何か習慣セシガレットが流行るの世の中で、煙草をもっぱらく吸ふとおもしろくもあらうが、実に手ぬる等のかく煙草を用ひたらものが、喫煙の沿革しれた路

を考へること、最低等煙草の行はれ時代は殊さらおうく自分のついの如きは、婦人がこんを用ひることもあつたが、とうく生意気のやうな見へ、不謹慎のやうに見へた。今日シガレット階級地位が下卑で有るやうに見へた。今日シガレットが盛んになつた時でさへ、煙草は婦人子供に新しい氏風がありても、殊に婦人子供で無かつた。紙巻の煙草を人が吸ふことは不似合であるかの感があることもあるが、煙草の婦人まで新和しの如き煙具で、煙草を吸ふ婦人相応の優味があるが、上品味がある婦人の煙草は婦人相応の形に優美でもあるけれども、其の形式の故でもあるが、○敷島煙草のシガレットを男子の吸ふことが、甚だしく見へる。シガレット、おんなが

煙を用ひるは、別して益々婦人の優美性を害するの感
があるが、これは云ふ迄男子が斯く思ふばかりでなく、婦人は
女保守性から斯く感じてゐると見ても、今尚ほ烟草を
用ひもするにちがひない。
烟草の喫烟の原始は蓋し南米である。世界の各国の原始烟具を
通覧すれば、ラッパのごとき短こい、今日のシガーホルダーと
似寄りのものが多いが、日本の烟管は中間の烟
道の最も長いものだ。最初日本へ烟草の外国から輸
入された時は、人の之れを珍重し、客を待つには烟盆と煙管
と烟草の皆揃とを客座へ出したものだ。[illegible]羅宇の一尺
四寸も有る烟管を携帯せしめもする
る国も我のみならず、二尺も有るやうな烟管もあるを。原

複原製

始の烟管の形ちは、まんが鉄ぐれ短かくうつたけのもの
ある家は今日でも婦人の長烟管を用いてゐる。日本
の喫烟家のこんな巻煙草さへあつて、一時ナメ巨と唱へ
る金属製ハベの短かい烟管の行はれたこともあるが、あ
んなものは西洋風化に拠て生じたものであらう
うが、烟道が短く、管が太い為めか喫烟の風味もよく
るものと評せられる。
烟管でんとんを吸に段味があるかとふと、一言でも言
きる、口を距て僅かに二寸位の所に烟が達するから感じ
が強すぎるが、そんな一度火を點すると一本を喫し
終る迄は[illegible]人を伝つて[illegible]

けれども、一氣に吸ふ形ちもあれども、云ひ換へれば、不注意
でもあり、亦非衛生的でもある。畑巻きの上等の煙草を
盛る四所があつても、そこに一掬の煙草を盛る。其の皿の
大小あることを云へば、駄島一本を六七分した丈一掬を盛る
に過ぎない。即ち一本を一氣に吸ふのであるから、五六回を分
けて吸ふのであつても、適度に喫することが出来る。中間の
羅宇の畑造が畑を詰め、節一、ヤニを避け強烈の氣
を後和するから、煙草が穏かに云へば
他人の作つた巻畑巻と、點火して無雑作に吸ふのとも
自から適宜に一刻みを掬する所に一種の味がある。其
の度を計つて或は連續的に或は間歇的
に随意に吸ふことが出来る。既定の分量に限制を設けは

ることがない。吸口は概ね銀ちゃうで心臓でも其の形も口を
適ふやうにしてあるのも、吸口を口に命名したのは一
種の趣味があつて、或る神経性の人の性を吸口を噛み
潰すやうなこともあるから、之を吸口を噛み
口の親しみのある。之は畑造と謂ふヤニは掃除を
要するけれども、其のヤニは七一種の味がありと云へば、
わざとゴツクリしたのを喜ぶ人も吸ふこともある。其間の
消息は畑巻き親人にとつてのみ理解が出来る。
煙草は吐月峰もカンカンと叩くのも一種の氣のよ
ひである。田巻畑巻は或る意味に於て紙の如きものを
活用するかけうんちかけ言葉的のようなものを意味する。西
洋では自身巻畑巻を拵へることがレットと心得ること

が、自から巻く所を味がある。日本の煙草で吸ふのも越いまんまの煙草を吸ふ場合などは、一気に一本の煙草を喫し尽る。悠然とした心持がする。

やはり休息の一服の煙草を吸ふのも、農夫などが田圃の中で吸ふのも、ひとりの人の休憩の姿である。

都会人の心持がする。

若し夫の煙草を骨董的に考へると、外国のパイプ道楽があると、日本の煙管を金銀細工の風刻をしたり象眼をしたり、結構を極めた趣を楽しむ所に趣味がある。

村のなどは、竹の長さ、竹の長さを次つぎに繋つてゐる。二種的趣味を深く考へられない。

いつか京都の道具屋で煙管を買つて来た。こんは石帯の後ろの右に穿つた所へ下げたもので、こんを用ゐるのは五位以上に限り、三位以上は金煙管、四五位は銀煙管である。自分の得たのは銀煙管で、代とそろへのないが、古制は開閉し得る代ひあつたと

云ふ、

○戦争ほど銭のかゝることは無い。ナポレオン戦時一日の費用が三十四萬二千弗かゝつたと云ふんである、日露戦争の一日の費用は三百八十三萬二千弗であつた、世界戦争とならば一日に二千三百萬弗、日本の金と直すと約七千萬圓、ことにヨーロッパ戦争は五ヶ年間の戦争で平均一日に[illegible]

○銅脈先生と云へば狂詩で名高い人物が、銅脈と云ふ戦名が何んの意味か解らぬ。然るに或る好事家の研究によんの廣金の事と分つた。日現在内地銅脈と呼ぶ廣金は二朱金が行はれたと共に

の人が云ふことである。内地のみならず他も廣金の通称として仕ふれた例がいくつもある、大阪の淨瑠璃心中近松徳二の花菖蒲浮木亀山の内に與助が金子の事を云ふ又芝上銅脈と尊称の質屋さんとの日わりや大いなるかやる、芝の大盗人めが」とある、銅脈も廣金の隠語であり、或の学者と廣節をもやくと云ふ例もある。斯る戦名と異しなのの伝詩人廣内人と云ふ意味であらう、銅脈自身の注釈者越狂詩選の序に

狂文狂詩如繋銭、不切不離似通宝、金数駄駄難分、誰疑銅脈不銅脈
心が銅で外皮が金銭である所から銅脈の字が生まれ

北の山の銅版先生の聖護院宮の住居を夫れ太平館主人品中頼母と云ふの人なりなる。

○梅宿手写本の頼山陽が三枚程西葉藤宮し北斗菊本金石記い中井敬所、大概文彦の死後行方へ行きしやなさりしが狩谷家と帰る由、北切りぬきの時の梅宿の手紙と配する辰亥日根中のもの也

〔六〇〕金石記　（寫）二冊　　狩谷三市氏藏

梅齋手寫本。上下合して森立之の小口書あり、立之舊藏の印記の他、上卷の見返しに「此冊石鼓下第卅四五兩頁賴山陽子成壯時」在東都所賃書者」の立之手識あり、其の二葉のみ一見手蹟を異にす。上卷墨附六十九葉、下卷百一葉。唐土の金石文を集錄せしもの。（この書嘗て說文會の展覽の折、市島春城氏上下分藏なるを發見注意せられ、其の節、中井・大槻（如電）兩氏、後に生存せし方に讓るべしと談笑せし由なれど、狩谷家の遠戚今泉雄作氏の斡旋によりて、大正十四年、敬所翁女婿新家孝正氏、狩谷家に贈る。）

喫茶店のはしり

可否茶館

明治二十一年東京黒門町に

同年四月十五日の郵便報知新聞に次の記事が出てゐる。

× ×

途中にて一寸立寄り休息し、又知人談話の席に用ゆる等、輕便にして卑しからぬ西洋の珈琲店の樣なる場所あらば、身元ある人々には無上のタヨリなるべく、此の類の場所なきは誠に物足りぬ心地すと常に嘆ずる所なりしに、此度、下谷黒門町二番地警察隣に新設せる可否茶館と云へるは、此の關點を補ふべきものなり、一切の樣子都べて西洋の珈琲店に倣らひ、來客は茶を喫し珈琲を啜りながら氣安く休息し談話するを得べく、室内には諸新聞諸戲具を備へ、更衣室文房等の部屋々々さへ別に拵らへあり、頗る體裁宜しと云ふ。

× × ×

何でも外國から歸つた人の思付きで始めたものらしく、今日の喫茶店とは大分變つた純眞なお上品なものであつたらしい。それにしても、珈琲と云ふ文字が既に存在してゐるのに、態と可否茶館だなんて、始めての試みだから物はためしと人民投票をやるつもりでもなかつたらうが、當時の空氣を顯はした名前であるのが面白いではないか。

青裳文庫

○支那で印の鈕を凡ることあい行なとゝ名の工匠であるか
皆無歟であるから、日本まい而ちんふい、私ちゝい古い
洞無名の工人の作と考くしたら全体寿山石ちゝで
ハ博り出さんると、先づ福物、運ん玉、福物を鈕
を作ると云ふから、鈕の作家の福物人であるゝ相
違とさい。職工も浮山みて、八供、ゝ鈕の彫刻を数
ハり、終生此業に従ふと云ふが、補源日年の印秋
説話下掛ると、名工の名が聊か挙げて ちゝ、即ち
康熙以後まい張鶴千、楊玉璇、清子和、謝寅
ちどかあり、其後の肉尚均、徐漢、馬文、璽司
桂海、和尚ちどが出で、現在ひい林文寶、林錢陶
ちどの名が少えて居るが、皆六十を越く比迄中

京都十備會主催

千家茶器

十職家製作品展覽會

十一月一日より七日まで
五階ギャラリーにて

秋趣漸く深きおりから此度京洛十備會主催の下に千家十職最近の逸作を蒐め頭書の通り茶器展覽會を開催仕ります、各雅御承知の如く、千家十職の作品は茶道の創始と共に一家を興し、連綿十三代に及べる樂吉左衛門氏を初め、天正年間千家に屬してより十代を傳ふる中川淨益氏、小堀遠州の門より出て今十四代と稱する黒田正玄氏、古田織部の釜師として知られたる大西淨清の系統たる十五代大西清右衛門氏、初祖保全以來十六代を名のる永樂善五郎氏その他いづれも千家の茶道に始終し歴代の研鑽彫琢の結果斯道の神髄を窮めたる諸匠の神品とも申すべき力作品のみで御座います。

何卒御枉駕ゆるゝ御清鑑のほど願上げ奉ります

十一月一日～三日　御招待……午前十時より午後四時まで　抹茶の席を設けてお待ち申上ます

同　四日～五日　六日～七日……一般公開

白木屋美術部

昭和十年十月

御來臨の節に恐れ入りますが本案内狀御持參願上ます

ご相談の上、来られたいと云はんとする。

京都で茶器の十職の家が十備会を組織して居ることを初めて知った。此の十職の中に陶器の業者に名を列記することとなったのである。

楽焼　家元　　楽吉左衛門
表具師　　奥村吉兵衛
錺師　　中川浄益
指物師　　駒沢利斎
釜師　　大西清右衛門
一閑細工師　　光悦一閑
塗師　　中村宗哲
茶入袋師　　土田友湖

標原製

茶柄杓師　　黒田正玄
炭師　　永楽善五郎

以上の十家の陶列会である筈、一説の上更に記すことあるべし。

○余が随筆文墨餘孩を中国に伝播せしむる長文出刊の旅行「日本紀行」第一期木四輯を登載せり。緑雪余と交りあるかを詳を公示する也。春城氏の随筆のどんなでも生気のあるのは酒と書物の関係ある文化と喝破したるに成いそうかと思ふ。

○鰹の串を売るの口上族が同輩に制すると共に売るのみ日本俗味に左の如きがある。

日本一の鰻の串

―は水戸が産地―

鰻屋の職人の言葉通りだとすると、鰻の串の本場は常陸の水戸が第一だ。職人達は、蒲焼にすべく、割いた鰻を串に刺す時俎の上で其尖端の正しいか、裂けてるかを試みる。其時若し尖端が二分裂し、三分裂してゐるやうだと、鰻の肉が其裂け目へ食ひ込んでうまい調子に串刺が出來ぬから、故に落第した串は遠慮なくオミットされてしまふ。此點に於て、水戸の鰻の串は日本一の評判をとつてをる。

水戸藩の財政は、他の諸藩に較べて、非常に窮迫した。三百石以上の武士は、鰻の蒲焼を食べるが、それ以下になると、蒲焼どころでない、皆鰻の串刺りを内職にする。例の櫻田烈士の大半は皆鰻の串刺りをしたものだ つまり武術の呼吸で、侍魂で刺るから、一本と雖もいい加減な串はないのである。其處で、役料（特別手當）を貰つて、鰻の串刺りを奨めやう〳〵と力める水藩に朋黨錮を割る底の對立の長く續いたと半面には、常祿以外の役に就き、役料にありつかうと云ふ希望があつたからでもある。此話は内藤耻叟翁のかいたものにもある。要するに水戸の黨派爭ひは鰻の串を刺るか、鰻の蒲焼を食べるかの爭ひにも見える此慣習が今日の水戸に殘つてゐて、依然鰻の串の産地になつた。之に就いて、次のやうなロマンスがある。

曾て江木千之が、茨城縣知事になつた時、水戸の市中を見るが、一本の煙突すらなく、工場らしい工場がない。其處で工業奨勵を絶叫し、工場建設を力説したが、一人として之に應ずる者がない。已むをえず、鄕國の長州から、ある知人を水戸に呼び寄せ、之にある製造工業をやらせてみた。同時に職工募集の廣告をしてみたが、此應募者一人もない。江木知事も、工場主も非常に失望し、ひそかに此事情を内偵してみると、室内の内職……鰻の串は刺るが、戸外の内職は好まぬと云ふ事が分つた要するに面子の問題だ。如何に貧窮でも、體面を重んじ、見識を有してゐる水戸人には、工場の如き處へ、公々然鞄當箱提げて、内職に通ふだけの勇氣がないのである。左樣な次第で、折角工場を拵へた長州人も、仕方なく〳〵工場を閉鎖して、鄕國の途上、偶々列車内で知己になつた水戸出身の某教育家に、しみ〳〵此話をしたさうだ。

（琴）

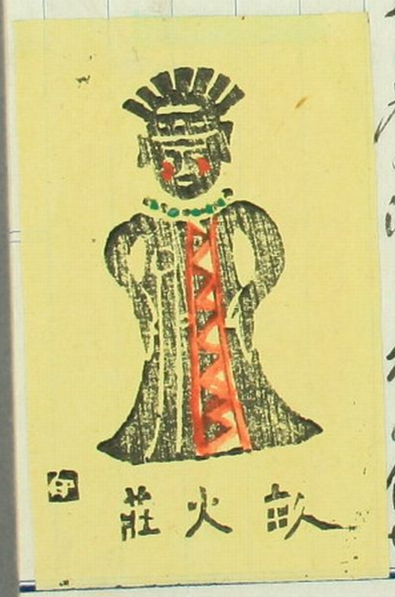
複写製本

遺代の後りを見くして長き他の報記を此る材料とするから保
存し置く様注意したい長き、先が為め一紙に数枚を入保
存されて居るらしく見る、福地いかく用利の人びとの
報道する後のうれ寄る朱とかくて居る、他の海珠に
机案ならいのもよくもやのれうと思ふる、各報報の様
「我都掃部」とあるが、報報の中の等と択す
べきことの否らさるこもあるも、注意を徒しとみる此
二帖の桐箱と約めん徳富蘇峰が書をしれみ。
る、大略右のみ。

昭和十五年十月廿日記

○多秋侍と乗しブラ〜安きに丸ビルに別り社
楊上日骨董店を探ると銅鏡の置物を個と
清記、ちるいろ物へるいかい、特に似て低面がめるる

おもしろ出来たるて、ぬと気がつ入へにるを立国を拠
つれる他さい奈良県の埴輪三個を得れ、中も天平
時代女人の像一基新発見がちく、春の鈴大小二個土
製品あるが男形い流石に古雅ひあるる埴輪の
馬い模造品にぬるる。馬の満身着土まい
よく字一と居る、北数の模倣の奈良る居ふ
あるるし、品盤中北等の屠め溝も家子的地
を表せるもの。



大正十三年の十二月七日『明治文化發祥記念會』なるものが、早稲田の大隈會館に於て開催され、なほ明治文化の批判講演會が催されたが、その際石黒忠悳子が『西洋醫術の渡來』なる題下に演述されたうちに上野公園に關することがある。それは、

（冠略）そこで獨逸から教師を雇聘し、獨逸へ留學生を遣すことに決定した。一方には獨逸公使に對して教師雇聘のこと、學生留學のことを申し込み文書の交換をした。此時に獨逸公使フォンブラント君、書記官ケンフルマン君には一と方ならぬ世話となつた。又一方には醫學校と病院建設のことを企劃した。先づ第一に學校病院の敷地を選び、上野全山をこの敷地として受取つて四方へ大學東校敷地といふ標杭を建てた。今の竹の臺へ學校を、今の美術協會の地一帶へ病院を、今の鐵道ステーションの所へ病院附診療所を建築する圖も出來た。その時大隈侯へ東京大都前途の計劃を問ふたら、大隈侯は上野廣小路へ中央ステーションを設ける計劃を話された。そこで相談して其處へ諸國の藥品を運搬して來て、其處から更に診療所へ運んで治療用に供する計劃をした。大隈侯は此時即も明治三年に既に中央ステーションの事など考へ居られた先見には今更感服するのである。また もう一つこゝに是非申したいのは、蘭醫ボードインが歸國の途次上京した時に、我輩は得意で此上野へ同伴し、大醫學校と大病院の配置圖を出して示したところ、何とも云はずに居られたが、直に時の大政大臣三條公に手紙を送り、此大都に公園とすべき土地はこの外にない。これを學校や病院にするは大間違ひだ。學校や病院にする地は他にいくらもあるが、大公園地は外にはないといふことを縷々述べられた。その爲めに上野は取り上げられて、その代りに渡されたのが今の本郷の大學の地である、上野が今公園として存するのはまつたく此ボードインの功績である。

と云ふのであるが、明治初年の出鱈目時代の眞相を曝露してゐると同時に、ボードインの卓見には敬服せざるを得ない。それにしても同公園六十年の記念式に際し、こゝに想到すると轉た今昔の感に耐へぬものがある。

榛原製

のことをし小野梓君没後五十周年まつり[illegible]山房[illegible]於れ
日の日君の[illegible]を印刷[illegible]
[illegible]梓君の[illegible]山[illegible]一年の若くんとする[illegible]
[illegible]永の[illegible]を[illegible]若くして[illegible]今[illegible]の西村[illegible]
次の[illegible]成さ[illegible]の前二者に較べれば幾許か[illegible]
[illegible]未だ光[illegible]小型[illegible]の日誌を[illegible]
[illegible]きよく[illegible]ひこ[illegible]山田の吉いれ[illegible]
同じ日誌を[illegible]
かつて日誌を[illegible]
かつて。山田の相[illegible]
[illegible]を大隈伯と[illegible]
[illegible]

のである。永田の書いた吹き「留魂録」は何かの
野家に無つた。随て永田の文を材料とすることが出来
ないので、北日流の昔話を文和文で書き、他の五人の漢
文で書かれた陳述を以て書かれ、小田原侍記スル
大切のことを行つたのであるのんどころ行つたのであるから長い間謎
となつてゐたのを、或る人から自分が二百円で買取つて
近頃京山の坂本の邸宅で割腹した京山が
で北の法全寺を本堂の金集の如くかくして出版することと
なつた。先づ角北の日流の存立が西村の陳述書と五大
なる授主をもつた。尚て山野辺の尽々の追悼分るとい縁
故者が追懐談をもつたのであるので北芽も球
料となつてゐる。自分の話もいくつか加へつてあるが侍中

複原製

の源んれ是るがあるのであるが、今朝三四の事を筆記
と西村く送つた、或いは加へ黄ばるかもしれない
が、大体の送す可きである。（十一月一日記）

○十三年前の本月二日坂口五郎（三郎）死去（取家）
を東京で今し午前九時ごろ自完に法要を営む。余
も其の日、偶事出す、目黒雅叙園に集会を営む
余席上詩を作れと迫懐談を為す、先つ作詩の五
絶一首を余の為めに心より鶴亀石の歌とを
副る賛業石碑花六合心の情を揭げ、北の長
命の詩に成る経緯を話す、感慨無量、花六石碑賛業并三合
一を加へるべき大久保湘南堂已に故人となる。余い

とり金し恢に感じて感慨無きを能はず、五峯は侍中余を
金石に比して壽す、余豈五峯の十三回忌に遇ふ
ことを期せんや、五峯が金石を以つて余を壽し給ふこと
慨を為す（一作感）、（二作余）五峯に謝する所以なり。人や、余未だ
人と交はりし当時を語りて曰く、友人と云ふこの或十或百
あるが如くなれども、真の友人と許すべきの僅か
二三を数ふるに過ぎず、余十三年前五峯
友を失ひ、近く亦侍中を失ひ、余の身も甚だ
寂寥なり、長日生の得失遂に如何ぞ、一杯の酒
を五峯の霊に献じ、亦も忘れ杯を傾け陶然
として夢と忘る、北日龍叙国を今俗として続紀校
露の窓を照らすこの五十組の多きを及ぶ、北家の

短撰の大なるべし、近く増築し以て高楼を見る
に相称へ、七十餘、雲様を望むが如く、冬景華
麗と称す、都下に於ける絵彩を
らぬ、俗家に於ても最も、任豈の大膳なる人を啓する
足る、斯る短撰の大なる料理屋は前代に倚を絶つ、本
都下の一名物也

十一月四日記

○熱海の四季の工夫さん北清国の小龍
のぬきものを抱いて寝ることが嬉しくこんを乞ひ、ワイフ
とこうもある、支那でも北海を称して人と云て尤るくかもあ
り集落でハ現今用てある、日本でハ日向の伊豆原
抵つてあると初めて知へとかく身分ハ高ふ購つたことか
ろハ。何人ありしか、工口テックのこのとかから、いろ〳〵の傳説

かちる、支那での張文潜と云ふ人が竹夫人の傷とたのやうに
書いてある
元符年中漢の高祖帝嘗て甘泉宮に避く上皇
宮中、侍臣を以て謂て曰く、兵法の等を愛せざる人あるか
善良、有節にして穏かなる者を得て親しまん
ことを思ふ、こゝに於て竹夫人をもめ得て夫人
となるなり
こんなことを漢の時既にあつたとは、北世宮さへ古来
詩人の好題目として種々の詩がある、自分の左の詩を
最も佳とする
竹夫人
元 謝宗可

順次玲瓏粉黛羞、寄征何処抱衾裯、
雲雨三更夢自休、霜六月秋、素節無
陳風刺、虚心那鮮老温柔、専房不怕
蛾眉妒、只恐西風動別愁
同衾の真のなるも粉黛を羞ぢ、敢て
侍寝の衣衾を抱あるく、雲雨三更の夢もなく
却て六月の外霜の涼あり、虚心なるが故に温柔を
す、房を専らとすれども敢て蛾眉の嫉妬を受け
ずと、少のうまき夫人(高麗)なる。北斉の竹妃、青
妃、竹夫人、竹丘、抱衾(高麗)、裯(ねやの名)がある。
ある人が書を送つて相馬御風に北斉を送つた。先
づ新しい竹夫人を贈る」と云ふ左のやうな

感想を書いてみる

一方このことのようなる私の涙くさいをかーさ
がついとみ上げて来れのひちる西に笑へぬナンセ
スとゐふべきであらう

ゐれ、書き出した人の何人の為めのことを問はんと說
明し困人だとる書いて長り、嘲笑とも說き流す所
又芸術かある。如き事とも云く皮肉な嘲ることもした
ことを自分い一笑ーした。

○家老の御書い「柏崎ハ豪」と言ふ一書がある、えんを
言ふが柏崎の来れ時・柏崎の人豪口を出地の俗人
と称ーれるい八豪ハ美の西ひ出えんとあるこんち
極めて珍本で、多くの俗書を著したる人も全く知ら

橋本製本

ないとゐふことである。御風の遊筆「遊蹤うらし」のやな
えんと解とゐるべき。玲本が出てゐる、えい系図へ山と
相違ーしたことは、今から二百三十年前京都一条
通清水の西、八丁平の住人佐々衛といふ書物から
書行きえんしたるが支考が系図ものこと迷人比新井の
土地の俗人と称ゐ今つとに白を集めれこそ編の事為
ハ系図ものの人九蛸(百由寺)ば日ー人が序を書い
たとある。其の年月ハ正徳四年未秋八月中旬と
つてゐる。地方の断板ものとなるものを多くハ偽ものの
自然玲本とゐるこれ有る。城絡書房者著し北斗を
ゐてもとゐ対方を知ちくしば自分のハ版本比が
御風のハ日人の書ト宮さやれ、ゐれと云ふ。

○代助の人力車を雇ふと云ふ人の集に食人窟有り
とうふがある。此人の木下
幸文や梅暗谷
似た貧生活をやつと
人ひ、貧窟吟が集
中に多くあるが丸
人を動かす程作は貧
吟ひある

深泊の旅ろすも
家にあるを襖ひと人の
踊をまこひける妹を

陳原製

置きて来れば
今日今日と待つる妹に人を斬り飢をしの
と出ぶぞかなつる
涙まんれ悩める足をひこずれば大路かく
いわんひとりかも
木下幸文が貧窟百首に倣ひ
あく行くと高食の歌作るやは
吾妹ゐい米つきとりと種の庭にいりつる日を
おんれ移りて
ものーさと歌まむこと、梅の暗谷にくく
似なりけり
死と寄み一重の食ひきかづきをひら分れ

妹とわかるる
机をまるし買ひもん殘る佛神像外を
送く
青ひさしの神田の市の軒つゞき見てゆくなれも
それのしきこゑのを
手洗へハ我指さきんよる鯉の口ハそろへとやる
ものもあり

○日本の料理に就ていろいろ考へて見ると習慣と云ふものがあるが、改めたいことがさまざまある。日本料理には終り汁のものが多いやうだ。先づ八寸前菜を出す、膳には汁、口取がつく、平がつく、これも汁である。酒の肴物を見ると吸物が出る。飯が済むと

古墳

壁畫の撮影に今夏…來奉天醫大の黒田源次博士(美術考古)東方文化學院の竹島卓一工學士、座右寶刊行會の猪藤菊太郎、寫眞技師坂本萬七、原色寫眞彩色の小林武昭氏等の大がかりな撮影隊を派遣してゐたが、約一千枚の寫眞撮影に成功して、五日には坂本寫眞技師、六日…歸京した、此寫眞は厖大な原色版畫帳として出版し、滿洲太古の文化風俗の一端を廣く世に紹介する貴重な文獻とする筈である

遼の

陵墓は熱河赤峰からトラックや牛車で數日行程の蒙哈爾省境に接する興安嶺の中、ワーリーマンハー(瓦の岡の意)といふところで、匪賊さへも寄りつかぬ人煙絶無の秘境ここに遼の聖宗、興宗、道宗三帝の陵墓があり、中陵、西陵は崩壊または浸水してゐるので東陵の内部を撮影した、高さ廿尺に余る中央の玄室を中心に數個の部屋が羨道(廊下)で繋がりこの廊下の壁には皇帝の寵臣と覺しき者が樂器を奏でたりしてゐる等身大の肖像畫數十が寫實的筆致で千年前の契丹民族の風俗を展開し、玄室の壁には淡彩を施した

墨繪

の四季山水が燻んだ寂の中にも北宋か西域の匂ひさへ漂はせながら美しく

…上旬迄で仕事ができなかつたといふ
九月十二日には既に雪を見て、間もなく同所を引揚げ、次いで十月初旬安東省輯安縣に移動した

輯安

縣の高勾麗古墳は新義州から八十里上流の滿浦鎭の對岸で、千五百年前高勾麗時代の都で一萬余の古墳群がある、今春安東省司學官伊藤伊八氏がこゝに舞踊塚、角抵塚(相撲の壁畫)を發見してその道にセンセーションを起したが、今度の撮影中、文字塚、環紋塚等も新たに發見し、こゝでも約四五百枚の寫眞を撮りこれが發表されゝば學界の注目は樂浪から輯安に向ふとさへいはれてゐる【寫眞上は興安嶺山中の古墳の壁畫撮影、右から齋藤監督、坂本寫眞技師、竹島工學士、下は壁畫の春の山水の一部】

最高價買入

恩給
帝國恩給協會へ!
長期五年無保證三年 利月八厘
親切相談
青山南町一丁目

御宴會は…

妹とわかぬる

机を書くく冥いもん後ろ側神像何を

思く

書ひざ〳〵神田の市の軒つたひ見てあるくだけも

忙めしきこころのを

手洗へば我指さきに鯉の口いそろへどやる

ものもう

○日本の料理を就ていろ〳〵考へた中で習慣上ろ

ちいみのが改めたいことがさまくあるが日本料理

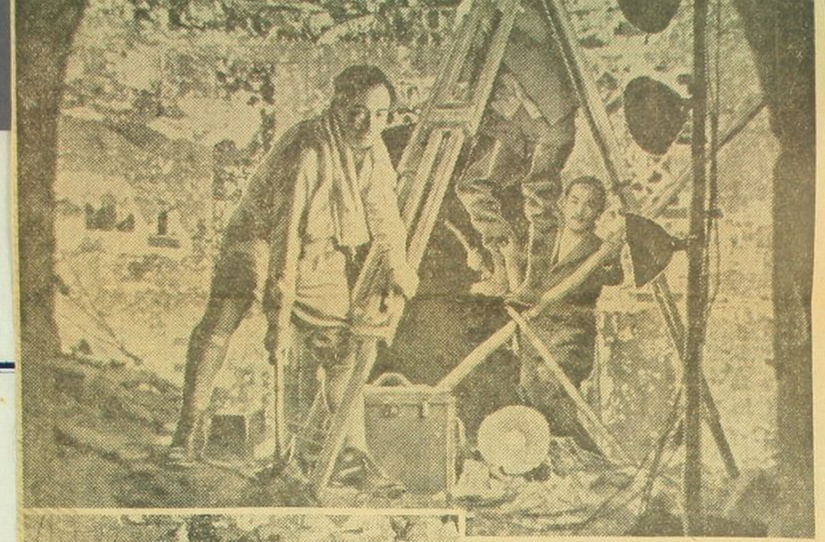
はいあり汁のこころがえいやうだ。先づ第一番を

出す、膳ごと汁椀かつく、平がつくらんも汁

で

古墳の中に咲く
千年前の文化
滿洲古藝術苦心の撮影

鄭孝胥氏を會長とする日滿文化協會では滿洲國太古の古墳壁畫藝術を永く保存するために、故關野貞博士、濱田耕作博士、池内宏博士等の指圖の下に、興安嶺の山中に二千年前の遼文化を今に遺す皇帝陵墓の壁畫撮影、並に鴨綠江畔に千五百年前の高句麗文化を偲ばせる安東省輯安縣の



古墳　壁畫の撮影に今夏以來奉天醫大の黒田源次博士（美術考古）東方文化學院の竹島卓一工學士、座右寶刊行會の獨逸菊太郎、寫眞技師坂本萬七、原色寫眞彩色の小林武昭氏等の大がかりな撮影隊を派遣してゐたが、約二千枚の寫眞撮影に成功して、五日には坂本寫眞技師、六日には獨逸監督鎮々と歸京した、此寫眞は尨大な原色版畫帳として出版し、滿洲太古の文化風俗の一端を廣く世に紹介する貴重な文獻とする筈である

遼の　陵墓は熱河赤峰からトラックや牛車で數日行程の察哈爾省境に接する興安嶺の中、ワーリーマハー（瓦の岡の意）といふところで、距離さへも寄りつかぬ人煙絶無の邊境こゝに遼の聖宇、興宗、道宗三帝の陵墓があり、中陵、西陵は崩壊または浸水してゐるので東陵の内部を撮影した、高さ廿尺に余る中央の玄室を中心に數個の部屋が羨道（墓下）で繋がりこの廊下の壁には皇帝の儀臣と覺しき者が樂器を奏でたりしてゐる等身大の宵像畫數十が寫實的筆致で千年前の契丹民族の風俗を展開し、玄室の壁には淡彩を施した

墨繪　の四季山水が嫌んだ狩の中にも北宋か西域の匂ひさへ漂はせながら美しく

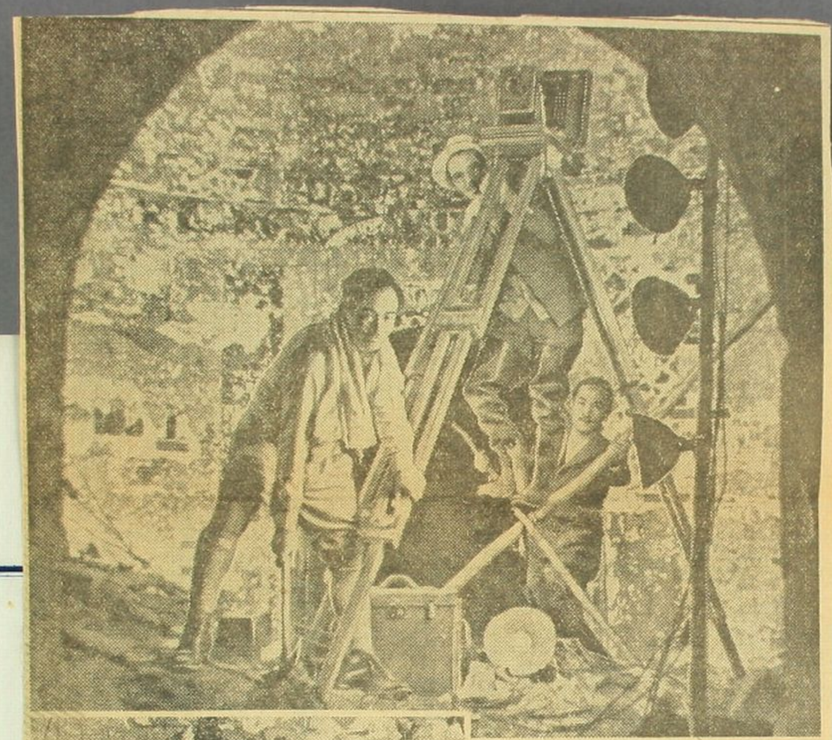
撮かれ、春の山水などには水鄙の泳ぐ水邊に桃や蒲公英らしい花が擬擬と咲き亂れてゐる

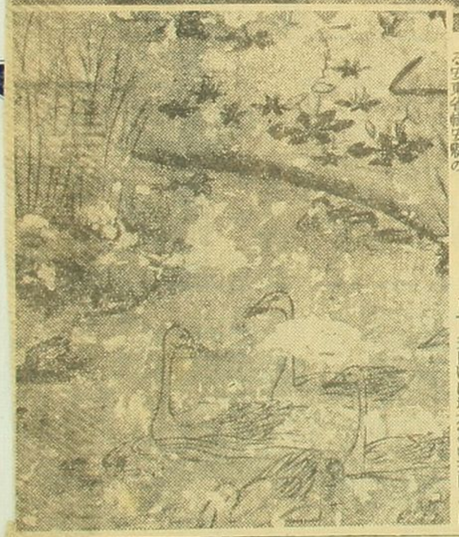
何しろ地下三十尺の暗闇のお墓の中の仕事なので、六日六十ワットの發電機二台も揃ゑつけて撮影するといふ苦心で、八、九月頃外は最氏三十度の炎熱なのにこの古墳の中は二度の寒さで冷藏庫の中の仕事のやうで三十分以上は續けて仕事ができなかつたといふ

九月十二日には既に雪を見て、間もなく同所を引揚ひ、次いで十月初旬安東省輯安縣に移動した

輯安　縣の高勾麗古墳は新義州から八十里上流の滿浦鎮の對岸で、千五百年前高勾麗時代の都で一萬余の古墳群がある、今春安東省司學官伊藤伊八氏がこゝに舞踊塚、角抵塚（相撲の壁畫）を發見してその道にセンセーションを起したが、今度の撮影中、文字塚、環紋塚等も新たに發見し、こゝでも約四五百枚の寫眞を撮りこれらが發表されゝば學界の注目は緊浪から輯安に向ふとさへいはれてゐる【寫眞上は興安嶺山中の古墳の壁畫撮影、右から齋藤監督、坂本寫眞技師、竹島工學士、下は壁畫の春の山水の一部】

御宴會は生





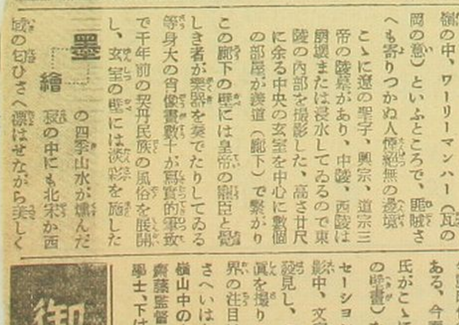
古墳の中に咲く千年前の文化

滿洲古藝術苦心の撮影

古墳　壁畫の撮影に今夏以來奉天醫大の黒田源次博士（美術考古）東方文化學院の竹島卓一工學士、歴石實利行會の齋藤菊太郎、寫眞技師坂本萬七、原色寫眞彩色の小林武明氏等の大がかりな撮影隊を派遣してゐたが、約二千枚の寫眞撮影に成功して、五日には坂本寫眞技師、六日には齋藤氏等一行が東京に歸着した、此寫眞は尨大な原色版畫帳として出版し、滿洲太古の文化風俗の一端を廣く世に紹介する貴重な文獻とする筈である

遼の墓　墓は黄河赤峰から日行程の察哈爾省境に接する奥安嶺の中、ワーリーマンハー（瓦の岡の意）といふところで、距離さへも寄りつかぬ人煙絶無の邊境にこゝに遼の聖宗、興宗、道宗三帝の陵墓があり、中陵、西陵は崩壊または浸水してゐるので東陵の内部を撮影した、高さ廿尺に余る中央の玄室を中心に數個の部屋が羨道（墓下）で繋がりこの墓下の壁には皇帝の獵苑と憂しき者が琴瑟を奏でたりしてゐる等身大の肖像畫數十が寫實的筆致で千年前の契丹民族の風俗を展開し、玄室の壁には淡彩を施した

墨繪　の四季山水が嫌んだ瓶の中にも北宋か西域の匂ひさへ漂はせながら美しく



蔡孝胥氏を會長とする日滿文化協會では滿洲國太古の古墳壁畫藝術を永く保存するために、故關野貞博士、濱田耕作博士、池内宏博士等の指圖の下に、奥安嶺の山中に二千年前の遼文化を今に遺す皇帝陵墓の壁畫撮影、並に鴨綠江畔に千五百年前の高句麗文化を偲ばせる安東省輯安縣の

撮かれ、春の山水に流れ泳ぐ水邊に繞れる樓閣と咲き亂れ何しろ地下三尺の中の仕事なのでカメラマンはフラッシュの發電機撮影するといふ月頃外は暑氏にこの古墳の帝陵庫の中の分以上は觀けつたといふ九月十二日にはもなく同所を初旬安東省輯

輯安　の滿浦鎮の高句麗時代の都ある、今春安氏がこゝに舞の壁畫）を發セーションを影中、文字塚發見し、こゝ眞を撮りこれ界の注目は齋藤監督、坂本萬七、下は壁

御

白湯を呑む。さて飯後に赤豆を欲む。随分汁澤山であるから、汁は二種位に止めておかるる。又大饗宴あるべき料理なれども二の膳三の膳まで出すが、そんなにいろいろの肴を拵らすが、実は本膳が主であるべきと、副膳に変化を拵らし一通きて却つて本膳の方を粗略にする。麻麦なんかもある。麦を用ゐるべき料理自慢の人が客の心を横ぬきにして出して珍物の自慢を誇るなどは褒めた話でない。尚は食事に就てあるが婦人なども特に小形の茶碗などを用ひるのは優しい味をつける趣味である。小兒などは食べもしないが血氣の婦人に勧めたい不審のものである。実は婦人の

櫻原製

ものは大抵人前などを遠慮するが、小説にはつて迷惑である。

饗宴の際の陶器に就て一つ二つ云ふと、硝子は上つ方、殊に貴族の食事に就かず、相の運び口は矢張遠慮する場合に成るべく、客を塞いだりすることは心得ちがひ、亭主役が時を見計らひ樽物をして飲食中の人として急に酒を取めたりすることの不体裁、給仕人の矢鱈に酒を強くする。面人の好きな酒をつぐ。なるべく酒が清くて冷かな酒や茶を持ち出すは酒茶が冷へ手間もかゝれて不快なり。料理の説明するもいやなものである。われ知り顔

れ物をあるも片日暇いとまし、書畫骨董をあ
拭清らし、紙屑をはらはらと吐出を伝さ
しらい、杯洗の不潔なるを嫌ひ、男衆の人は鬼
もまると杯を紙に拭ひ捨てハンケチで拭
くことのあるを、もとく何人の心ゆや、物を含み口を噤み
まもり、ひらひらとまもり物を言ふことのあり、皆失態と思ふ
し、宴会の後つまも退席せず悪図く夫婦まで七三人
困らせ、拒えんも食物を時人を訪問
まることの人れあり、書一食を腐らせる慣習なる人
まもまを失はせ
高をとり
訪問先で食新角食るの用
初めを断のるを孔をい
ちまもの也料理酒のまとを時刻刻るを主一なる

を待ちるも気筆の利かあるを酒代けを先の出し
て作のんが馬鹿を露のさらお茶をれこし渡るもの
を、都まくて礼八度礼の
座の礼法をはまま嘗りのあ動もまんば人の
笑を陰するまはしも徒る人を迷惑をかくること
とを得べくこと也
○碎鼎庵人の句を
句也
名月や草木れ老る人の影　梅宝
えのやぬしひしば手も膝の上　は
すあ見も星こ沸き抑うあ　樗良
元朝の元ちのあるちん富士の山　宗鑑

珍しさのかなしさうんや花はの月　玄蕃

冬の雨うち出けらまれも穴のしこ　与徳

金ちりて花あるそれ花のうの山　白雄

命ちるぶ春あるぶ心まと花のうの山　日

秋い先ご目ゑ立つ菊の蕾こうあ　玄来

更くる夜や山炭もて山蕾を砕く音　蕉夫

むつとして戻れの二庭の柳こうあ　日

冬木立月骨髄に入る夜こうあ　凡董

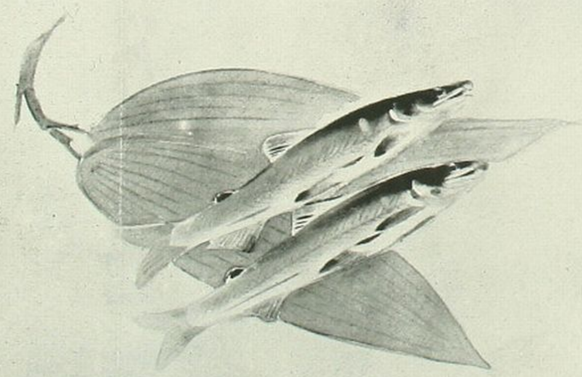
世のあやあまりもうどか人の庭　大江丸

昔男海鼠のやうにおはしけむ　日上

木枯の果ハあるけり海の音　立来

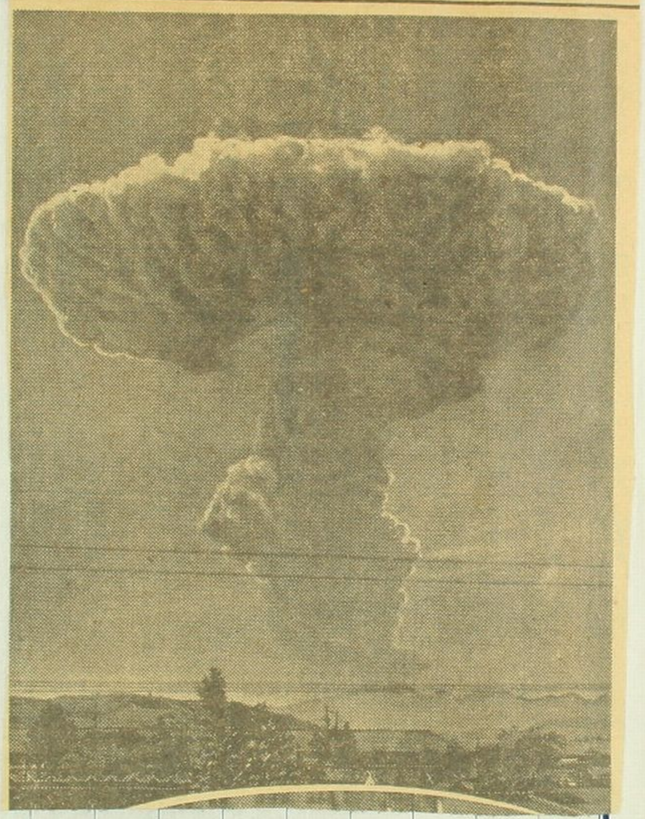
ゆくら行く人ゆけ行くや勝角力　凡董

○伊勢のふ木とあるぶ山人の句碑を建人とし小木竹数百今の墓起るも拝墓を伝記してきれ。各拝墓を先の長浜迄ま借しまを長つて建築長ぶ人とする任書ビ小木浦岸寺一の景勝地城山公園ご建設ゆ工事墓と言ふことしハ山人拝ビ三十三年ところ。



白米は後方に後退の小木教育会長堀原徹氏前年白谷
八幡宮の参拝を去いてやつれることがあるが、醤油屋とうふ
米屋さんなど、今が特に商売繁盛で寧ろ拝参を
待ちて来た

○昨七日午後四時頃浜都に白粉のぬき一反が降り、続と
同じく相南に降る屋根を白くし通行人の
帽子や婦人の毛髪に降りかゝつて、可なり人を困める
程で、自動車などが雪で困つたと云ふ
なんか約二時程続いた。今濱間山が砲列でしれの
ぶるぶると震い合つたが、今朝の新聞紙を見ると果
して昨夕あの比、去る廿四日夜中降灰があつた
が、べらぼうにそんなもの。この降灰の模
様は



昭和十年十一月八日　（第三種郵便物認可）

此の記事は鉛子
あるものと思ふ人
あるとの記事を
台へ報じたも
の
此の降灰のあ
つた際の一天
が曇つて雪花
模様であつた。降
り降灰が間
暇を置いて街上の人は赤き
やうなケチで鼻を掩ふ
あつたと
此の記事は鉛子
あるものと思ふ人
あるとの記事を
台へ報じたも
の
此の降灰のあ
つた際の一天
が曇つて雪花
模様であつた。降
り降灰が間
暇を置いて街上の人は赤き
やうなケチで鼻を掩ふ
あつたと

『ごめん迷惑平謝仕り候』

淺間山、詫び狀もよこさずに帝都へとんだ贈り物

益々憎らしい顔つき

淺間山觀測所の觀測によれば午後零時八分五秒、先づ第一回の大噴煙があつたと思ふや物凄い鳴動がこれに續き、黑煙は天を覆うてすさまじい光景を呈し同四時半ごろまで鳴動と噴煙が打續いた、碓氷峠から輕井澤、群馬縣境一帶には夥しい煙と共に一寸大位の火山彈を降らせた今回の淺間の大爆發はすでに先月から異常を認め同觀測所で警戒してをり去る五日だけでも六十六回の微動があつた

こんどの大爆發はこゝ數年來なかつたもので、淺間山麓の小瀬一帶の人達は爆發につゞく鳴動に「ソレ、淺間がハネた！」とビツクリして一人殘らず戶外に飛び出した、殊に輕井澤方面では一時は驚愕と疑惑をはじめた者もあつた、淺間の中腹の峠の茶屋の主人内堀定市さんは爆發物すごい當時の光景を次のやうに語つた

こんどの淺間のはねた奴は、私が知つてゐるうちでは一番大きな奴だつた、いままでの奴はドカンときたゞけで終つたが、けふ七日の奴は何しろ三、四時間といふ間ぶツつゞけに鳴りながら噴煙するので山の中腹の私達は生きた心地はありませんでした、空一面たちのぼつた噴煙のなかに火山彈が空中にぶつかつてそれが稻妻のやうに火を發して大きな火焰が一大火柱となつてゐる光景はいまでは見ものだつたと話せますが當時はこの世の地獄だと思ひました

中央氣象台發表 七日午後零時七分淺間山が爆發しそのための噴煙は折から北西二メートルの風に送られて午後二時ごろ東京の北西の空が混濁しはじめ、同三時ごろから降灰し、三時半ごろ降灰が最高に達した、去る五月十一日にも早朝東京地方に灰を降らしたが、今回のは近ごろ珍らしいもので、爆發は近ごろたび〳〵あつたがその中でもかなり大きなものであらう

爆發とわかつて漸く安堵した

◇

三時ごろから約卅分間が最もひどかつたが、夜になつてもなか〳〵をさまらず、銀座あたりは思ひなしか濃霧に包まれたやうにネオンの灯もぼつかりぼかされ、明るい繁華街が裏街みたいにうす暗かつた

◇

淺間山—東京間は直線でザツと卅五里だからあの降灰は西北風に乘つて爆發後三時間ばかりで東京にやつてきたのだから、省掛—上野間の急行列車は約三時間半だから降灰が急行列車と同時に出發したとしても一足早く帝都にお見舞ひしたわけだ

◇

淺間山麓下落合二の九〇九アポロ鑛工所經營主任山藤斗氏はこの火山灰を寄せ集めて七グラムとり、こ

ハンドバツグは銀座クワバラ

グラム付著した『帝都へ鑛が降つた』と直ちに本社へ知らして來た、右につき東大教授坪井誠太郎博士は語る

いはゆる「火山灰」と稱するものは實は火口内の溶岩の飛沫が急激に冷却して固まつたものが主である、大抵の場合は玻璃物質と斜長石結晶との破片から成立つてゐる、そしてその玻璃物質の中には極々微細な磁鐵鑛が含まれてゐることがあり、そのためにやゝ強いマグネットにならば吸付けられる

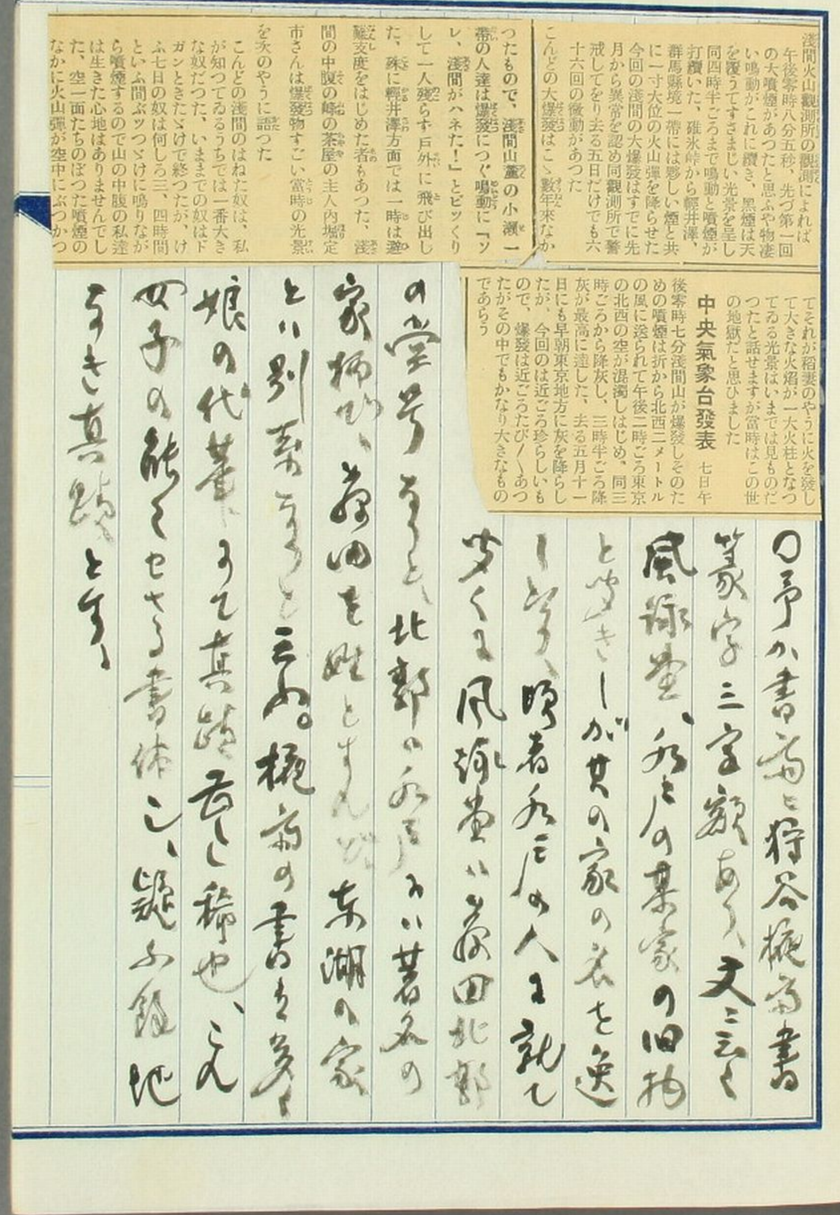
◇

七日午後四時半ごろ、芝區三島町一一佳田かつさん方女中山下あいさん(二)が折柄の降灰に驚き慌てゝ二階に駈け上り、南側の窓の突出しに干してあつた蒲團を取り込まうとしたところ、十六貫の體重のため腐蝕してゐた留釘が折れ高さ一丈余の二階から墜落、たゝきて頭部を強打生命危篤

【舊掛にて、澤田特派員發】七日正午すぎ怒り出した淺間山は、近來稀に見る大噴煙となつて薄の田

民を驚かしたが、鳴動四時間、夕刻に至つて漸く鳴りをしづめて靜かな平穏の淺間に返り、夜は澄み渡つた晩秋の空に何事もなかつたかのやうに自然をなびかせてゐる

淺間山麓にある新大陸開拓團



○水戸烈公農民の艱苦を思ひやり、食膳に農民の小像
を置き、喫飯の先に先づ一箸の飯を農民の前にあげ
笠の内に挿み入れ、時に諫言を書し、子弟をして之に倣
はしめられたるは有名の話しなれど、大隈侯も嘗て水戸へ行か
れし時、此像を得て、折に觸れ其の由来を説かれし
ことあり、余も嘗て陶製の此の農人形を有せし
が、いつしか失ひて今は架中にあらず、只偶々茨城
縣の産物陳列所に見しに、其中に此の人形
あるを見出しぬ、金属製なりき、烈公の遺物に倣ひたるも
のなれど嬉しみて架中に置て、烈公の御歌に云く
朝なゝ飯くふことに忘れじな
めくまぬ民に恵まるゝ身は

○建部遯吾博士より先人の遺稿花軒存稿を寄せ
られし。博士の亡曾祖父は先般世に出されたる花軒の名は
利永、字貞夫、初め源藤三郎と云ひ、建部氏を嗣ぐ
に及んで快翁と称しけり。余此人を知らず、手か紙を寄越
こされし時、建部令花を識る、乃ち快翁の長子たる人
此人二十五才にて死したること此書に依りて知るを得たり
遯吾は其子孫なり、兄の戦死して家を継ぎたるあり
て、遯と號し、其家を嗣くに至れり、建部の横濱の
屋の家筋なり、快翁と云ふ人和漢の学を修め、書
詩も文も和歌も皆な相當にて、画も書きたるかの如し、又
音楽にも通じ多能趣味の人なりしと思ひしが、建部の詩
稿輯二博士と親族なることも此書に依りて知るを得たり

○高木真蔭（蕃右衛門）日本橋本町四丁目住）と云人に而識りけれども時々四人を印刷して送りたる「風来寺うて」と題する歌集を出版する佛法僧の雲鳥の形を少かんとも三の寺と云りもの此数十首を詠む、此人の歌技巧を弄することなく素直軽妙なること思あるべし乞から淡美なること

く達者なる口を衛て出るかに天晴なる歌のあるなり

右の歌首を掲げす

天に入る人地す山の石あの千立る波もあくまで登れば

風変寺この山の花と云ひぬ佛法僧の形りに咲くれば

僧出ていまぐ四時の瑠璃光閣に既に灯のうく

形けさに春たる秋も忘れて山と新へる

沙弥絵くて庭に出で立ち招を

梅に山を眺めて何も思へず

山の僧夕とちりて撞く鐘の

響く方ちも須き出る雲

奥の院

坂の巨石の上に立つ我の胸

此からべは山の氣に入る

山寺の静けさに抱て寝む書の

夢の心に忘れて寝る

風来峡

白き岩巨石みて歩ける川床を

ゆくも清く鶏走る力人の

[illegible]の岩石うして海[illegible]のうらやゝ黒の数の淺まる

[illegible]待遠くかくその初屋に云く

我歌のわれみつつうつの静ちんかよきもめしまる

悔かくもうしに　真名

○[illegible]上皇[illegible]東京上皇[illegible]掛ける四次天皇上皇公園行幸六十年祭の程さの信しをうつあるの内東京府美術館の上皇懐古展覧会を往訪し御幸一説に[illegible]の天皇の[illegible]公園の行幸があるに実に国家重大の[illegible]紀念のうが或人と語ること[illegible]行せられたからである、宮内省[illegible]の祝典も、陸海省の閲兵、[illegible]の開設、日露戦争海陸[illegible]祝捷

も、[illegible]の開[illegible]の公園が[illegible]今[illegible]

すれのも共都[illegible]行幸[illegible]十

数[illegible]及んでゐるが今[illegible]埼玉[illegible]何[illegible]

[illegible]とをつれ[illegible]天皇の国家の進展と重大

の関係[illegible]行幸の大油絵[illegible]北[illegible]

上皇の歌碑と同じ[illegible]大震災の実景と

[illegible]及んでゐるが大[illegible]展覧[illegible]の[illegible]

海[illegible]上皇[illegible]三

橋の美[illegible]進[illegible]

[illegible]敬味[illegible]

[illegible]の国[illegible]

[illegible]の[illegible]三人[illegible]

立体人形を置き蓄音機遠かに奏の絵柱をやつてゐる又一時取拂はれた星引北斗七星塗り直した元あるべきあるべき主のゆゑなれば、弾痕が幾十となく印してあるのは、戦を思ひ、ゆめとゐる。北戰爭の跡をとどめの大河俗が物ゆゑなりしかば大なる無著の注意を惹いた。スペンサーとまあ人分風船乘をやつた同や、不思議泉天城丸の沿道両側で巻唐の有つた異色や絨毯がまど戰後なるべきうるうの故郷の東台の風色もとも南時を回顧する感慨もあつた。冬所から生名しれる文書類の切論数多くあつた。光を一を見る深き発しきも、唯は一點意を留めたのは北白川宮が参議大隈宛の書狀が一通あつたことゝ、とんち東京山の戦作

維持の別し法礼をあらはれ自筆のものあつた、えい大隈家であるべきであるのに、いつ散しれるのハとゐ宮ゆくなくなつた。天海僧正、巻眼大師を開する往々の事が出てゐれ中に住吉具茂の陰蓋、天海の墨跡家康と天海為産の悔うるあつたが一々記する

が出来ないからまくと長新日記と遺つてこゝを

紙想の一編を陳べて見る。

（十一月九日）

和田英夫の追悼会を鶴店神田川亭で催すこと

ましたのハ、和田が綴ずきい地店と名深があり、不起の

病の発んに見前死をこゝに鶴会があるそこく陪ん

でいたが最後であつたやうな縁因があるので特に北

家を今情ました。和田は茶欲と曼子の二字を用いた

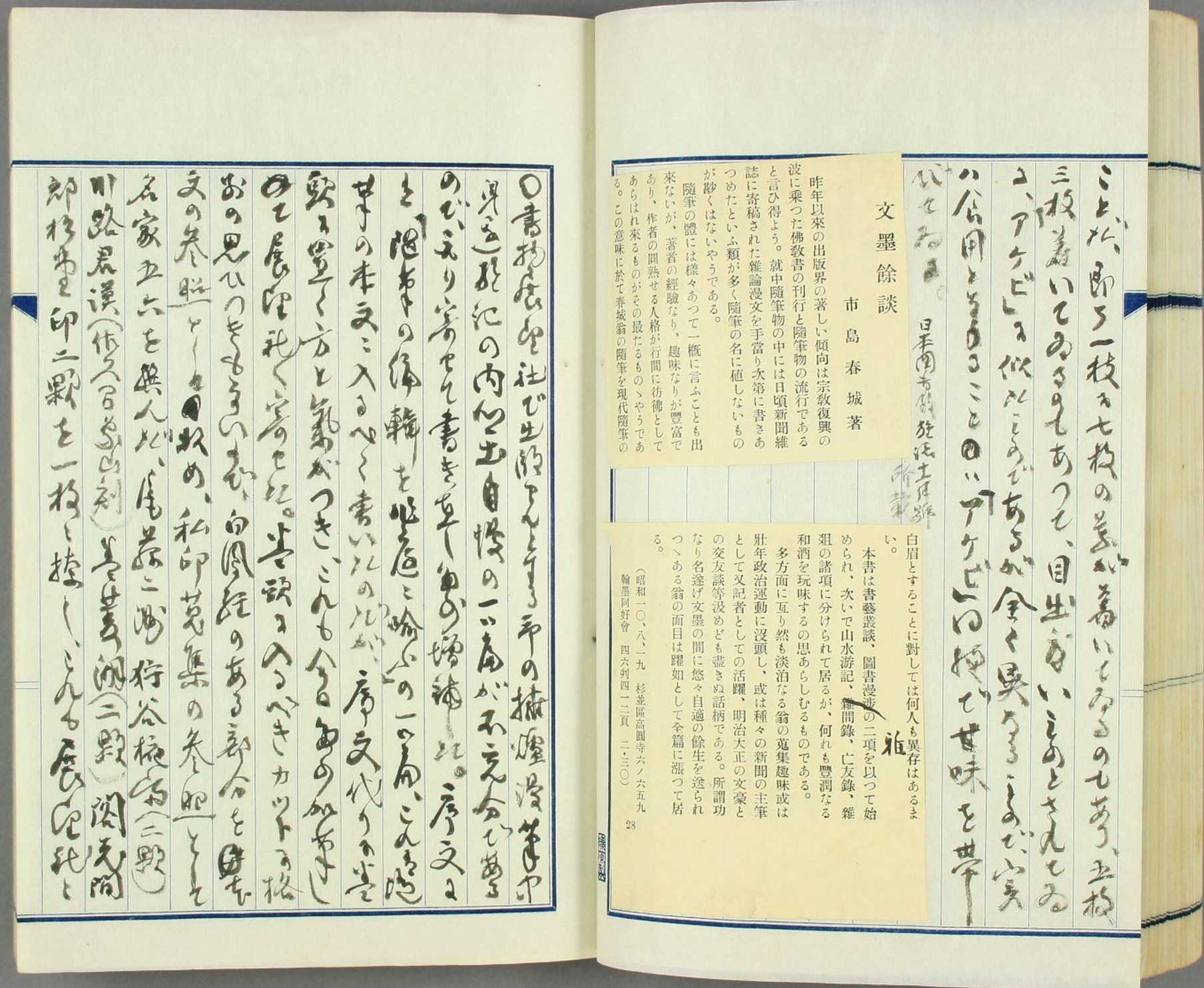
曼い萬を通してまかくで曼子と書いたのならば成い鏡と
通ずるのかも知れぬ。曼い曼多羅の曼で佛具のある
字だ。萬を卍と書いたことも多かつた。其の人は此の佛教の
味があつて長字庵を愛した。とんな面倒な題跋でも無
難に済んだ。古庵を對する鑑識があつた。赤坂の会
庵をやり、庵主を題跋を作ることも長いてゐたのこんな
就て思い出すのは、いつぢや目黒の羅漢寺に同志の
仲今四人が集まつて会を開いたことがある。
自分は若い者が多かつて賓客扱ひされが、和田の思ひつきで、
字庵用紙と心庵一巻を推ぶく、當日出席者と一行
つゝ心庵を字させたらんの今場相應の趣味あるすさ
びであつた。その字庵を表具屋と表装を頼んで出来

上がつた時、麓の鞍倫侯の協会英二十名計りが大磯の
侯の別荘で觀劇に招ばれた。其時和田の思ひつきで、
羅漢寺へ行けば字庵を美と献することとなつた。自
分は羅漢寺へ行くと、字庵の傍の壁が自分と
書かせる為一行の中でもつた。自分は美の別荘で
側一行を集めて美と献した。此字庵の終りは和田の
跋が長く字庵生とした銘の名も別記とんであつた。こ
んな全く和田の字庵趣味から成つたもので、羅漢寺と合し
た如庵会物であつた。銘は自記の通心庵から美と表し
たが、上の方龍園で和田が佛教趣味の相違をなすこと
が起つた。美は家今後一室を設けて銘の
庵会仲間をと求めんとの銘は表題を表して徒らに時

を移すのを遠かるべく思ひて和田の相談をかけ（以下略）
密を求めもせずいかなる出来まい。自分の俳諧
墨筆を押して影家を書くから、若い浅書も銘々の
似顔を書き給へ、多く似顔の銘か義歌を書け
ばよいが事実を墓くことが出来やうと、和田もそれよ
らんと、自分が上級と立て中央の雅集と投書に比下る
身の徳川侯を釋尊の見立て中央の書し其の前
左右の二十人ばかりの羅漢を心つけが業を疾風の如
く死人ばかりよく見る羅漢の風貌は出る常者の
甲乙丙丁ここの三つくり似たるのは一目めと唱
来し、銘々表人と思ふ肖像に異名しばから思ちうも
一時流の比（中略）異名の代りに視印を捺しばらもも

（注）心注と対照して遠方の画幅に悔ひ及ると私の心然
に表人だことがあるる赤毛毒蛾の逆子を想ひ起す、えが南の手の逆
の逆子を想ひ起す、えが南の手の逆（俳諧の要略）
る。

○むべと云ふ蔓草は籬（まがき）に載へるまき苗の
ようで、其の葉茂いは籬を飾るまがあるが義
合の別荘を拉す程は、京く柵を心つけむべを蔓し
て日除けを借りんある、田舎りかよい者めが大きな
紅色の実を使人が、今が其の盛りもある荘の留守
居が此程持ち来れ、のを見ると、なかなか美しもあ
るのが、籠を入れんを床の間の飾りとしも無いがつてある
此の蔓草の特徴の葉が七五三まで着いもある



文墨餘談

市島春城著

昨年以來の出版界の著しい傾向は宗教復興の波に乘つた佛教書の刊行と隨筆物の流行であると言ひ得よう。就中隨筆物の中には日頃新聞雜誌に寄稿された雜論漫文を手當り次第に書きあつめたといふ類が多く隨筆の名に値しないものが尠くはないやうである。

隨筆の體には樣々あつて一概に言ふことも出來ないが、著者の經驗なり、趣味なりが豐富であり、作者の圓熟せる人格が行間に彷彿としてあらはれ來るものがその最たるものゝやうである。この意味に於て春城翁の隨筆を現代隨筆の白眉とすることに對しては何人も異存はあるまい。

本書は書藝叢談、圖書漫渉の二項を以つて始められ、次いで山水游記、雜間錄、亡友錄、雜俎の諸項に分けられて居るが、何れも豐潤なる和酒を玩味するの思あらしむるものである。

多方面に亙り然も淡泊なる翁の蒐集趣味或は壯年政治運動に沒頭し、或は種々の新聞の主筆として又記者としての活躍、明治大正の文豪との交友談等汲めども盡きぬ話柄である。所謂功なり名遂げ文墨の間に悠々自適の餘生を送られつゝある翁の面目は躍如として全篇に漲つて居る。

（昭和一〇、八、一九　杉並區高圓寺六ノ六五九　翰墨同好會　四六判四一二頁　二・三〇）

家を出た。

○新潟市に二軒の親族がある。飯村と栗本とである。栗本の今から三代前の人は童三郎と云ひ自分の青年時代に病死した。其子の吏吉が自分を可愛がり、其子の文吉と云ふ人は其子の時代に文吉の家は私の親族の家から未だある。北浜にあるく自分が書き物をした親戚もたくさんあり、自分は三十三歳、栗本重三郎が七十一の歳の私と活つた記念撮影が書かれてゐる。其の我が家の巻の二を切り抜き、僅に三十銭の金を私の曾祖父から貰つて、それを以つて新潟を出発したのである。

かもとて後まで親類の交際家として付き合ひ、其の出発に当ては全く立志傳的である。北の浜一通りを栗本へ参した。多分父祖が郡市で官吏であるとの為めに、大切にされたと思ふ。

○佛蘭西の哲人、ルソーは著書に世界を正義の国を覆め、帝王を逐ひ、日本の国を清く美し、日本の国を七つの蓬莱と称した。

と云ふ美の歌をたたへ、此人が日本を童心の如く清らかなる天を称賛する似合はしいと云ふ感想もおもしろい。左程迄に清廉な国体の論議を観る所也。

日本の兒等に

曙の兒等よ、海原の兒等よ
花と焔との國、力と美との國の兒等よ
聽け、涯しなき海の諸々の波が
日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を
諸子の國に七つの榮譽あり
故にまた七つの大業あり
さらば聽け、其の七つの榮譽と七つの使命とを

一

獨り自由を失はざりし亞細亞の唯一の民よ
貴國こそ自由を亞細亞に與ふべきものなれ

二

曾て他國に隸屬せざりし世界の唯一の民よ
一切の世の隸屬の民のために起つは貴國の任なり

三

曾て滅びざりし唯一の民よ
一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴國の使命なり

四

新しき科學と舊き知慧と、歐羅巴の思想と亞細亞の思想
とを自己の裏に統一せる唯一の民よ
此等二つの世界、來るべき世の此等兩部を統合するは貴國の任
なり

五

流血の跡なき宗教を有てる唯一の民よ
一切の神々を統一して更に神聖なる眞理を發揮するは貴國なる
可し

六

建國以來、一系の天皇、永遠に亘る一人の天皇を奉戴せる唯一
の民よ
貴國は地上の萬國に向つて、人は皆な一天の子にして、天を永
遠の君主とする一個の帝國を建設すべきことを敎へんが爲に生
れたり

七

萬國に優りて統一ある民よ
貴國は來るべき一切の統一に貢獻せん爲に生れ
また貴國は戰士なれば、人類の平和を促さんが爲に生れたり
曙の兒等よ、海原の兒等よ
斯くの如きは、花と焔との國なる貴國の七つの榮譽と七つの大
業となり

大正六年五月

ポール・リシャール

日今い菊の盛り時である、秋の肅殺の氣に咲き出る菊
の豪華の菊である。全く秋香を專領してゐるこんが
我國の國華である。桐廷も觀菊の御宴があり、皇室
の御紋章も菊花である。昭憲皇太后の御歌にてみその
ふの菊をおきたれば大君の千代のかざしと思ひぬるかな
と仰せられ、又くんろの市旗に匂ふ菊の上
にはえの花もさきと仰せられもある、實に此花が最後の
花で唐人の詩にも此花開後更無花と云ひそのこと
く、雲に似る豪華と誉することもあること秋の盛
衰を彼の陽氣の花と云ひこんとめくらう。私は野生の菊
を最も愛する庭のつき山一杯に黄白入り亂れて一杯に咲
く野菊の味はひよ、離れ家の菊山よ。惡屋の菊よ

瓶に挿んだ花もよい。瓶もいろ〳〵の色を交ぜて挿むものを好む。花の色いろ〳〵の妖艶な雰囲気は洋花の似るものゝ如くなりぬ。まことに美しい。俗人の言ふ如くやうな、黄菊白菊美の外の名の無きものが多い。私の好まるゝのは人工栽培の菊花である。北海道の公園の花を見れば、大輪で形が整ひ色もよく葉もよいが、どうもうるさく感ずることが出来る。実に菊の人工栽培は一年の労苦を多く費す。根元から葉まで着くやうな仕方は止来るものである。矢張り自然の美である。一種芸術的の工作である。けれども、矢張り自然の美を保ちながら、他の人の意を満足させるものゝ、他の人工が加へられた人の愛翫を得るものが、一番が

藤原製

嬉々として寝て咲きこれけり名を「菊」と称したことく、地名を「菊」が傾の血いの菊で、えんが右心自然の性を世界に天真を投げるの菊である。菊屋を訪ねると、夫れ残りの菊が地植のまゝ咲くのである。菊に惚る人と媚び人為めに咲くのである。芭蕉が菊だけ咲くや石屋の石の間」と云ふ程に個性を所有する。野菊のまゝ自然の姿態を有することである。えんが人里に植へられるは世間りく所のまゝ本然の姿勢と美の人間の向かに向ひ断くする。元角まの俗化るくれる。人間の愛翫を得るのひとり菊のみ。（十一月十四日記）

随筆の編輯を作起に際し

自分の幾冊かの随筆を編輯するに、其編輯中いつも同じことを感ずる。最初は雑然たる記事を矢鱈に書きし集めし、長短精粗さまざまのものが集まる。漸やくそれに目次を作るに及び、を合ち次第を立て見ること、或は数の体を整ふること、或は数の数の数を体とすること、或は数の数の数を整ふることなどの如き、加除不満を感ずること、一冊の中心となるべきものが無かつたり、又全篇かくの如くにして、いつもつまらぬ興味を感ずること、記事が乏しかつたり

まることゞ、略と全体が纏つて、此為めの苦心ま
ることが始終あるる。苦心して書いたものや長
篇ものゝ如きも中心となる記事といふ
が、為め苦心したことを始め後の氣が濟まず、
自分ながらのよい、みゝ偏しての讀者の
俗風を生ずるから、添加取捨に苦心する必要
中抜閑を描くことゝ、七八分編
輯が出来ても、ニヽ十まいつもまごつく。元
来材料がある餘つて、その内から選擇する
のひまく、随筆に出る時の苦心
すさいて、特々随筆に一書を為めひざ

と筆も把るのゝ至いから、此點は普通の若
通と異さまる。首尾も中心も
さん相応のものを故に筆するのゝ、桜排ひ
其の次第と主たるものゝ比較特別の面倒がある。
但し随筆家も流儀があるし、手当り次
第書[illegible]何でも放り込むがある反動を意味
んでもよいとするものもあるが、いくら随時の筆のすさび
むも、その位の選擇はしたい。荒しさん卓紙
材料を選擇し、蒐集し、用意をもつて
どこうと云ふ、白紙の地を如き
その苦心のあることゝ云ふを待つ。

私の考へ隠居の御料と家屋の建築とに比べても見れば、ことの外、大小長短種々の材料を得合はせて、一冊の本とするものの、建築に似寄つても、なほ、隠居の性質としても材料が餘りに数多であつて、充てること所謂の棟梁の材を割いたり、建築上、其の材料の化に建築上、其の材料を割いたりする。但し建築とするものが揃いうつりする。但し建築の家屋のやうに小部屋の横のものがなく、トタン二葺の漫延家もちろんなく、殿堂大厦のことは、一概に比較されるものでもなく、殿堂大厦のことは、普通市式の家屋建築とはすることの数々

不倫ひ、寧ろ作庭と比する方が寧ろ適当と思ふ。作庭なる家屋の如く或る定数の材料を一定せぬ、棟梁などの巨材を要することもなく、松の一材もちんが出来ることなく庭のみが出来る。作庭なる家屋のやうに揃つた材を要しないから自在にもつて、何んびも役立つ、石なども庭に於ては必ずしも要きを要しないが、花卉草木の小材料は庭園にあり、どこまでも受け入れらんる。つまり四庭園にある全ての材料はどうしても作り得る所は隠居と一致する所があるから、作庭は隠居に近いと考へる。係し作庭を試めの不満なる思ひ出来ぬ

揚句

のハあをこと常盤木かるらしい、あをこ(に)ハ石が多つ
か無く(無)ハ花木が多くなるなり、花木ハ感ずることを美ん味
の(の)ハ不満を感ずる就て不満を感ずる所の点ハ追業する所も亦
がごとく(ごとく)ハ追業する所の点ハ追業する所も亦
ん難い(難い)ハ追業する所の点ハ追業する所も亦
い(い)ハ追業する所の点ハ追業する所も亦
い(い)ハ追業する所の点ハ追業する所も亦

○柳瀬の年が出版者を手古摺つたれ書者者見し漸やく
上版手入に達したれ。ゆうさま挿画うまく、殊と建築図も
起し図も図に乗り込うまくが多くあるのが出版者も困つた

藤原製

こ相違まい、自あらかじめ接人びえん吾吾を潜ても自分
からサツぱスト枕料ハ大抵ゆめもあるを自分の書者ハ
りゆんもあるを、西洋の書者の例も為ん取ることゆるを書
為ハ考く校ようもの敬ゴ、研究に値する興味ある問題び
自人が其建築物に自説を掲げたのハ十五六年前ごと
び、うんが後也人ゴ注意を惹いたなり。内田魯庵ハ私ハ
倣のもとと云ハず、世界の創造を多く掲げも長篇も旅
誌に載せられることがある。其の前後柳瀬ハ書者と共に旅
を為行した。此の初ようる余の説が載せられ、益郷自分も参
加し、こんまを著みられ人の書者図を起し給びあらしみる
ゆもに自味のうちがあるうれが、十ばかりと麻酒を供げた
柳瀬の今ものの為見ハ美華を集大成したものである。

書画と云ふものもずいぶんと流まれてゐるようにあるまいかと思ふ

書画を軽く思ひ出さうまく湖を位置して書きつく今い巡田文庫と云ふものがあり、十冊乃至二十冊の書画を箱に入れて或種が巡ぐり回覧するのであるが、書画類が移動書画があり得る楽しみ文人墨客が各地を漫歩した時分、各所で客寓する時、携帯品で最も便利なものは書画類である。呉昔は相違ない。今日は筆の軸を忘れてもカバンは出来に買てくれる体裁がよいが、自分が元禄の森春濤の文具の箱がいゝアレンヘ書画と云ふべきかと思ふ。こ

れは漢方醫の薬箱に似たものでまんなかに大きく、四段位に抽子があつて、其中に墨硯や印肉池が備へつけてあり、詩歌の詩稿用の、歌書用の巻紙書類などを入れてあつて、春濤は作詩の時、押韻の時、又くすりを拵へる時、又左右の置き、之れを貼掛けてもみた。常の真中の置いたものは先しからるものであつた。自分は其中を一切見たのであるが、日記の手紙用の人から寄せられた詩用の、歪の一つや二つ、折畳み の生来の机でも這入つてゐると思ふ。画家などでは絵の具皿が見られる多く入れてあるであらう。昔しの游歴人は旅に二年や三年を送るこの所あ

船を乗つて半月もかゝることもあるので、一時あるいは場所を借りの書斎とせねばならぬ。その間をも北の山荘のせまい書斎の後主のいとまを閑しくことが出来ない。或る書斎に酒茶の設備を閑しくことが出来ない。或る酒を温め具の飲み具つ後書物を見ることがある。自分の心を慰める為以つて天地の造化を考へることがある。自分の心を慰める為

僧侶は、うどん、山菜を粗末の鉢の汁中に浸め、

粗末の山菜おろし」ですつて、それを下飯とする酒を飲人はとゝのへ、主原来所は笠形の棚の酒肴を潜め、人空半ばに自分で酒を温め

書物を読む書画を書画をかけつゝ独り盤

賞まるが常であつたと云ふ。紅葉山人『わが深意』

以徐茶を感じ易へ[illegible]たものである

寺の書斎は主僧の居る方丈が概ね書斎

である。勿論主僧の級味に別まおもしろくおかしく

作へた書斎は、京都などの名刹もいくらもあ

るが、概して寺の書斎は清潔で心持からよい。仏像が

かさられてあるところは特に卿慶などを卿

つて飯を炊くこともある。弾き寺の庭園美が書

斎の風致を深くするのも此処

く感じさせる事が多い。

書斎のきたなくしく乱雑である例は変と板晴

こ直らへるとある。食をとゝのへる祝のときの山斎と明か

るくよくとの有つてある。居室の一隅を多く

古高と見て浸ることと、室の一方の箏がぬきく
生くなり、坐を迎るの礼が行列をしなりして石階
を上るに、松曙説ともに多を示む歌人で其の
若庵で熱海春嶺がおとづれられ此時礼
が坐を充てゐて厳秋も流れ閑口されたと云
ふことである、紀州の長浦家南方市橋の
林是樹の今津に一てどハ皆乱雑の書面迄
で書冊を開まれて僅に床を敷き或の机を
置き客が訪ふても坐をしる所がない位である、
今津でもの自坐席の壁を磨り切つて仕掛
つた、退却後其の壁を検する鼠兒を掘をみれ

私の坐の書面に光ますも前掲のぬきに乱雑のも
てく、赤土流を敷つたのでも敷出つたのもきてとこし
かれ術に気素がつなり、人をてもびかくすやうな
座表のるくるの心掘れば書生面に立の秘密の
宝もある。それを他人と迎えることを
がてるいてけびいてるのか、他人を迎えることと
考もすると術に気が生じて、一切一品の細と品も
思擇もする、酒和しとのあの一切を出して飾る
書出され珍重する第一の物を出して飾る
仕来の日を義くやうなことを特を陳列す
る、先から長坐の場合でも陽人れしの如く
きらいやうまくるやうの書面のみ多くの

閉つてゐる立派な自分の部屋を始まる。書
斎い矢張り、人まえやうい所まで心置なく寝
の為する所を選つて空家の部屋が最も好人本人
の性格の現はれである。
書斎の要具としては肝要なのは机、書架、書
類、筆箱、長椅子、小卓子、茶具其他
どこあるが、椅子と卓子が欲しい、自分の
座る方が楽つとが時々は椅子を寝ころ
ころ、坐ろうとは椅子で其他二種を
と差支ないやうにしたい。茶具の器物を酒器
を同様まもない裏時は煙草入の様くらいやうし
ないのベルを時々家人を呼ぶことい面

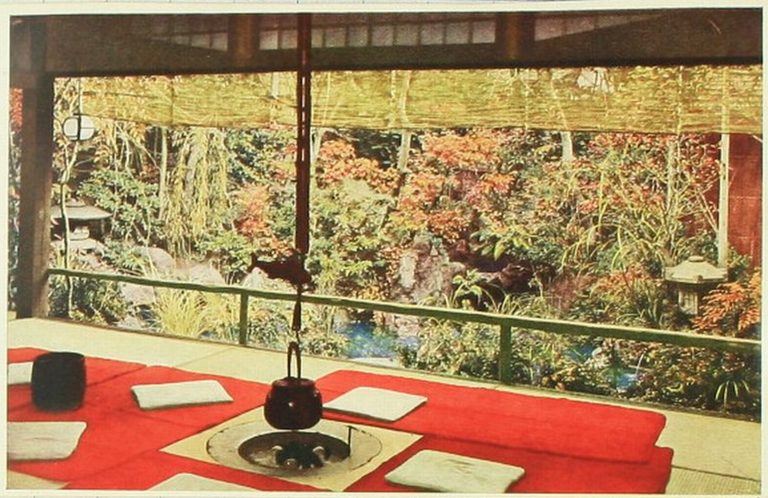
白くるこの成自分の部屋を悪つたり、庭を出て遊ぶことの出来るやう
にしたい。室内の日を悩ましたくもの欲
しい絵画の額や掛物が花が絵くらいやう
にしたい。室内の掃除は自分でやることにしたい。
反故紙の散供を御丁寧が孔
いの紙は伊東屋にあるボール紙の
箱を原稿を分類して置くことも一法である
二、スクラップブックを作る為
の切抜きを貼めて置く、書箱さしいを大形
を好む机も大きい方が清潔である。机は
飾る大きいのがぬきに、自分の書斎を就て

ひとをくいろ〳〵あるが自分の好みの書斎を作ること
とする。餘生い遠こゝまで考へ
土蔵の中の書斎は今の煉化家屋の中の書斎
と思へば大差のないやうなものだが実際は異つて
日光も不完全であり、四壁が堅く人を犯す氣味
もあり、心地のよい電燈もあり、そこで昔の家柏木
探古のやうな人が住んだのだ、茗渠居を大切にし
ようを火災で失いんことを恐れ故に茶室の所
のつかうもあるが、枠を組み立て茶室を造る流
内は狭く、廿枠の天井から後ろも左右も白
張りものあると、全く天地が変つて暖かい味を
つけるエ風もお

和な味も生じて来たもよい
心地とゝろ、ゝゝゝ客と
話して涙出た也ゝ比珠茶
を出して示ゝ、若き
ゝもし比の探古ひ
さんの一種変つた書斎
の部類であらう
厠を書斎とゝるのは古
ゝ時のやうなものもあるが現
物永叔の名文のゝ風
いゝく三上ゝと生ト比
ゝりん、上厠も三上の一で

花の茶屋

○御飯の美味なる方と催しに後生今日の旅行今日例の如く眠りつゝ、私の淡墨三村伊東も居りまみた。昨日は先に奈良に泊んで四会院の御物を拝観したことなつきいろ〳〵語つたが、自分がもとより感じた一番の感ふうの紙をとて其の終つた時の心持と御物を拝観した場を思ひ出で振りきつた時の心持とは全く同じであることが此玄の味を喫しつゝあつた終尚さ無沢の感が深くそんが待望の日であることも道理あることゝ思はれる。昨日の奈良かゝる嬉しき未つた書器を出して示さえたが天平古色で此つれものでは流石に大きい此程よりの物心と巧みであるゝ、ウワかりそうとセンロイド細工ものもあるかんそくるが手に取つてみると、平の細工で紅色を彩うん、天



霞蘭茶寮

あることを思ひあと、厠に机あるの上にそよの思考場である、時疾を持つ人などは厠に入ると一時間そこを去ることが出来ないので性々讀者をやる、見量などを与り付け除かるどもを待へと淡墨の俗を留ること実地を見ることもあるから、これも一往の書斎と見るべきであらう

十一月十五日記

五式の織物の為ヤ唐草の文様もあり、内部は蓋と底とも
身も金色燦然たる彫飾がしてある。面白い事京都の
骨董屋で買はれたとあるさうだが、俗に所謂「無絃」
とまをされた。これは自分の駄目のものであつた。無絃
の三味線は五弦で、本来は浮世ことばであるが、こんな善悪のよう
大形長尺で活業柱は巻が金部掛つて居るので珍
しく思つた。バラ〳〵とうるさいのが偉う
さ二三枚引出して見ると、一枚に十七字の字体でカンナ
屑のやうな物の落書かん、冷いやうなんと各枚の
一端に符号と番号が附してある。北の住い東海
れて居る蓋のある桶の入れんとあるが、見桶の極めて時代
のあることで、左住一尺一二寸のまで、一箱納住の極式

とでもうべきものと思はれた。徐ろに解きまつれば無住の法
華住が義でもあるとまうさうだが、断る迄器が附属しない
ので、回数只八文と珍しく思ひ近の研究の材料に供りう
約束があるとうだ
三村と伊原を相手に廿で就ていろ〳〵話した際一つ二つ
書きつけおくべき淡柄の觸れた伊原の様子の心得がある
るので利益の恩の柄物の功能を云ひ中す、どこまでも
る点があるが物のようが利益、此つた柄物は決して
を滴らすことがないと語つた。茶柄い気人と今でも大変良
かりまして五年巻産の頃に深い外国、輸出さ
るようになると云ふ、何人の外人を迎れを求めるかと問
ふと、鶏卵を撫き回いする調法だと云ふと求めること

き一笑を買しかは尚は仏の載後に就き伊藤の物ちことと
法つたに仏の根の墓をりを日ばくまで、墓つてい困ると
硫黄を根へると不思議な墓りを防止する、反覆し墓
うセるかるまい犯罪として猫の死体を埋めることも
ぬる神くとあれが始めて耳まする事だ。昨の話の機像
る箇の鑑定ものとうも及んだ、あ曰いまんも就き能と用
へる箇を出し女の鑑定の機微を一日と誤つた、紀南き
望を仏を刻つてえんとつとんいしたあることとなつ
たりあ面洗い塗つてあ曰ることも初めてなつた。尚
墓を出来たけれ、浦律を抜出あることが好る難いことと成
ーたの
鼓の皮は馬革だとうあることを初めて知へれが、甚だ〜用ひて

今いえんとえることの出来ない蹴鞠のことも後編にうつれば自
分の少年の頃は田舎の叮ることも言つてあつて、祝祭かも黄ら
つれことをを思い出したが、三村の話に昨夜事に奇島の
大本営に於てお拝殿の神り自ら蹴鞠を為)心さんは
深待徒武宮いり除地者)と仏人のもつる所もちいうえ(陸ひ
らやつて見ろとお殿があり、をこりしく別拝殿がなを
鞠い龍顔を打つたりも、高宗も恐縮し自宮まり
就つてみることと、森心見さんと更に
つれらどの法も出た。
度杉利用の法の面を三村が夢うて市河米毫が退業
を利用して火鉢の胴を作つたのを見れとこれは。大きな蔵
等を小箱、貫十貫本の間を置き、業の刻銀をあら

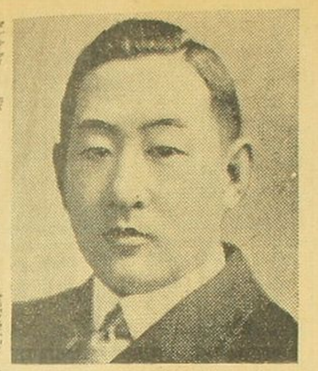
いしまが教師が火鉢の脚とうつてゐるのゝ趣味があつたが、
災で失せたと云ふた。多く退歩を痛めて歩くことを
ふが、えらくもコンナ利用法も面白ろい自分のめく退歩
をよく出すことゝ思ふべきかとも思ふのだ。伊豆の国或る人
名を忘れた。枝を集める癖があつて、さま〳〵の枝を所持し
成りの都度持ち帰へり、後ろ丸を一抜しを天井の宝の
枝を借りたが面白ろく思ひんだと語つた。

下手物の話しもいろ〳〵出たが、或る地方ひすりこ木を作る
上頭をでこと枝のある部分を二つ拔してゐるのを見た。
頭を北の異枝のスリコキの英べてあるのを見てあるし感
したと三打言あり、伊豆の云ふ面白ろい踏歩と云ふ大小色々ある
がもとい中を低屑と入れる為め側面を円形の孔があつ

た。今の北海道の板式も裏いつて、紙屑入を用のようなもの。今
だい昔しの跡歩を理解まるゝ、おかしなものが花
を活けたらどうかと、紙屑を投げ入れて、穴を花を挿し
たらあるを流つたのゝ自分の絵倒した。

枝の元物を乾をいろ〳〵の話が出た三寸の二個不ス孔
のあつてあるのゝ今い形式に壁ちたが、あんの棒ける時を
を差入れる為めだと説明するものあり、切り出しのやう
な花鋏を切りあの下を置くの丸を切れる所を伏
せて置くべきこの逆を置くと不用意を吐中を走り
ようとすると怪我をする。眼鏡を人多く外してがうスの高
を下ろして置くから丸い鏡面を接するから、逆を置
くべきこの北と云ふ法を出た。

三井宗家の相續稅
二千百五十余萬圓
稅務署の財産調べが三年
やつと決定書を送達



三井高公男爵

三井王國の宗家、男爵三井高公氏の家督相續財産の申告が所轄麹町稅務署に提出されたのは昭和八年四月、先代の三井八郎右衛門男の隱居によつて高公氏が家督を相續してからのことで、申告の期限は「相續開始後三ヶ月」となつてゐるが、二ヶ月や三ヶ月では流石の三井王國でも財産調べが出來ず、稅務當局から再三催促されてから申告をしたのであつたが、同稅務署では名だたる富豪だけにどこから手を出したらよいか見當がつかないほどであつた、そこで東京稅務監督局の應援を得て足かけ三年かゝつて調べあげた結果、このほどやうやく課稅價額が決定、數日前小菅幸橋稅務署長から三井家に右決定書が送達された、課稅價額は稅務當局は勿論、三井家でも絶秘にして他にもれないやうかたく申し合せたほどであるが、相續課稅價額は一億六千六百四十余萬圓、その相續稅額は實に二千百五十余萬圓である

百分の四十七まで、遺産稅は百分の三から百分の四十六・八、贈與稅は百分の三乃至四十八（藤正意氏「稅の話」による）

相續稅の日本新記錄
新稅法のため 住友男の二倍

稅務當局が最も苦慮したのは高公男の財産を調べるには高公男所有の美術、工藝品、骨董品はもとより三井合名の全部にわたつて調査しなければならないことだつた、三井合名の資産となると銀行、社、銀行をはじめ土地、建物、有價證券など全世界にわたる綜合關係を調べなければならないが、三井物産の株などは取引市場には上場されてゐないためこれを評價するには配當などを參考にして類推しなければならぬし、いゆる暖簾代といふものも考慮に入れる必要があつた、去る大正十五年西の横綱住友吉左衛門男が死去して當主吉左衛門男が相續した時の課稅價額は一億六千余萬圓、相續稅が約一千余萬圓でこれでさへ「相續稅法」制定以來はじめての稅額と驚かれたものであるが、これは舊稅法によつたためこのくらゐで止まつたので、今回の三井男の相續稅は大正十五年改正の新稅法によつたためその資産はほゝおなじでもその稅額は倍額に達した譯で、これこそ相續稅の日本新記錄である

年に三百萬圓宛
七年間に分納
一日八千余圓の計算

住友男は舊稅法で五ヶ年に分納分納したが如何に三井宗家でも二千百五十何萬圓を一回に納めるといふ譯には行かないらしく稅務署から無利子で分納の願書を提出した、稅務當局は決定書の通達をうけると同時に分納の規程によつて分納限度が七ヶ年でも異存のあらう筈なく擔保をとり

さて三井王國の總資産はといふことになるが三井家は宗家の高公男家をはじめ全部で十一家で、その總財産の四分の一は宗家三井高公男所有と見るのが妥當だといふから十一家では七億余圓となりこれが稅務當局から見た三井王國の公的財産といふことになる

十一家總財産 七億圓
稅務署の推定

千圓乃至三千圓までは十五圓、千圓乃至五千圓までは廿五圓、五千圓を超えると累進率一パーセント乃至四〇パーセントとなつてをり、二千萬圓以上は一律に四〇パーセントとなつてゐる

米國 遺産稅として十萬圓以下百分の一から二千萬圓以上百分の二十までの累進稅率を課す

ドイツ 財産取得稅として取得人の親疎により第一級は百分の二から十五まで第五級は百分の十四までとし五級に分たれてゐる

佛國 「遺産取得稅」と「遺産稅」と外に「贈與稅」があり、遺産取得稅々率は第一級百分の廿五から百分の十二半（四百萬圓を超ゆるもの）第九階級は百分の廿七から

外國の相續稅

英國 遺産稅（遺産總額に對して課せられるもの）と遺産取得稅（現實に取得べき遺産に對して課せられるもの）とに分れ、前者

○自分の最も得意とする料理人の目は鋭上達術を
聊か吉いてみたが、鋭上達術の現れんとする時の目は
也遊ぶ子のの、料理の目は彩りもある、鋭うまうまと
多くのまを取り合ったさまくの目色の彩を完
から絵を見ることくるあしらふことい全く料理人の
頭脳の働きに料理人の心一種の面影がある。彼等は
盛り物の美色彩の調和を図るのみひとく、膳部
又は茶の用途の意匠を凝らし、黒具の色彩をも籍
り心持のよい色どりを苦し、又膳部のうまを混合し
てもよく調和するやうな意匠を凝らすることい
大の下図の就て見ればうるおけるが、大図い想像(図)
ちどころく、花の葉尾の実地の料理は当たらない

る。料理の味を主とするとはいひながら、五味の調和を得ねばならんことは勿論なれど、眼も食欲を助けるゝ少からず。膳部や附帯の料理を味はふに掬くもなくてはならぬ。膳部や附帯の料理を味はふに掬くも一賛を快風を送るべきものあれども、生こ入つた料理とまを得ざるべし。料理人が腕の奮ふべきを示すは此点にある。上図のものは伊勢の料理屋が料理を鉢に盛つたものにして、えんを奏前に出すに就ては矢張色彩美の高遠かるべからざるぬるべし。料理はえり合はせもおろかに陰ることもやうなるが出来るのみ、自分は日本風のサラダを酒の下物とする味はひが、〜〜「志賀原」で之んを喫する。こんも大鉢の盛り物であるのもさう〜段味の色彩をえり合はせもある。一品毫もない海老の刺身を中心として●にもを出したれば赤い

海老の殻が装飾となつており海老の身が向うにいかに赤い色と映ずるとして美しである。高級魚の身が淡くへぐるもあり、又鯉魚のべき身が浮かんでこゝろもがあり、ほるの酢もあらふまれて鯉魚のべき身をつかつた美かうまかつた。個様な盛り物の例とするに二三種のやうなものの野菜が添いて、其の盛り方と一種の風景をなす。ちや黄の色で色彩美も調り、咬めば相南のうまい味もある。西洋料理のサラドも色彩美相応の点もあるが、日本のものは一層高い味がある。

○塩の白さ(色)は双林寺の白さ(色)の寂寞と比して北の寺の一隅の色の寂寞とを思ひ出すべきは北京とそつくりの

で、妻等は浜辺に海藻寺の再建を宣言し、四人とも
と寄附金をもらいに寺域を廻って歩いんことを提議
した。其の清ふかく美しい寺名を書いてやったが、美が
石こ刻さんも寺の入口に立つてゐる。墓碑銘
の墓は飯味和こ汪芝さん。自分も満足した。
さて残さんとした工事は丘陵の一面即ち墓のある山の
脚部に樹石を置き、墓と納和を保つ工事で、
こんの所の接任であつたが、今は金と工を費つた
で、其の報告を兼ね墓碑の除幕を行
ふことゝなつた。生徒百
人と共に拝礼した。
天ひあつたが、墓の建つた頃一切忘れきりの自
分は、崖側がれの任を早く一掃した

く、而を積んで、其出来上つた松石の拝礼をした。
海湯を志した。えんの花と浮き海藻寺の
ばを美化した。池と浮きこゝもある。もとから池崖の
池水をつたが、死水を活かしたとも言へるが、今は
所の側から金魚が多つて、美の一部に墓を副ふ
手洗鉢を入れ一部の流れを北池中に蓮を植めて
活水を得るようにした。私の尤も嬉しかつた
で、塔の未完成なる就て地蔵を造ると、未完成に
日ひも相起さる必要を朝夕の前に墓参して一抔の
水を献ずることが毎日の務で、故人の活水を飲むこと
も好んでいから、其の水は何寄りも大切であることゝ
思はれる。
早稲田方面拝の清水ひとのあるが、此海所の活水をもとして

天賦ノ藝術的才分ト非凡ノ學識トニ配スルニ、豊富ナル情熱ト拔群ノ鋭氣トヲ以テシ、之ヲ統ブルニ高潔ナル人格ヲ以テシテ、生レナガラ文壇ノ木鐸タリ。一代ノ師表タル範ヲ示セル者是レ我坪内逍遙先生ニアラズヤ。

明治大正昭和ノ三代ニ亘リ、日本文化ニ貢献シタル先生ノ功績ハ燦トシテ永久ニ輝ク、先生ハ名古屋藩士坪内平之進ノ第十子ナリ、安政六年父ノ任地美濃國太田ニ生レ、明治十六年東京大學卒業ノ後、早稲田大學文學科ヲ創設シテ育英ノ業ニ盡瘁シ、又數多著名ノ創作評論飜譯等ニヨリテ、一般文藝、就中國劇ノ進歩ノ爲メ終生發憤精勵ノ功ヲ積ミタルモノ是レ先生ノ一代ナリ。先生夙ニ熱海ノ地ヲ愛シ、晩年双柿舎ヲ營ミテ、爰ニ起臥シ、昭和十年二月廿八日、七十七歳ヲ以テ逝去セラル。熱海町ノ有志、先生ノ德ヲ追慕シ、相謀リテ此ノ碑ヲ建ツルモノナリ。

昭和十年十月

門下　文學博士　金子馬治　撰

君は羸弱の人で腸胃も脆弱なればよく気をつけられたく
麦飯とどちらが大好物であつたのか、滞欧の折いはれた時
自分は意思であれども、小宮君の行かるゝ先々へとても
と麦飯を供すべきことを注意し、小宮夫人は来られれば
ことを思ひ出すが、東洋館書店の奥の部屋にて
話をしたところ、居おそくまで居られた頃のならす
ひるすぎ菓子のしまであつた。パン三切位とバタと
牛肉を薄く切つたのを一二片、之を自から据て
これに載せて焼いて食させしが例であつた。酒は
絶對に口にされなかつたやうだ。併し食味に好尚があ
つたやうである。洋行中の話しに日本の鰻の蒲焼を無性
に喜んで啖す法があるまいかといろいろ工夫されたこと

を覚へられることがある。鰻の蒲焼を好まれたと自分は想
像してゐる。小宮さんは洋行中日本の醤油をあこが
れたと云ふ話されたが、帰朝の日何は差し置き醤油
をかけて味はれた。其の香氣は實に馥郁として
何んとも云へないものであつたと云はれた。こんな點から
小宮さんも公道であつた片鱗が窺はれる。小宮さんが
椅子に坐られた時、吾々隣席へ今運ばれた晩餐の馳走を
を受けたことが數次あるが、今は格別記憶に残つて
ゐるのは、唯だ一つ残つてゐるのは小宮さんの手料理であ
る。先の今も忘れ難いものである。鰹魚或は鮪魚を
小さく割いて、其の生肉をあつ湯しの上で聊か炙ぶ
り、之を焚きたての飯の上に載せて、やゝ濃厚なかう

味噌の汁をかけて食ふのであるが、下手料理でいやなるが実のうまいものである。

の中央公論社で現代編纂してある文藝辞典と大隈重信の一項とを取ってみると、主任者吉江喬松氏は私を名指して一病を托して来た。偏奇館の一室で、自分も終生誤解が偉かれ四面楚歌と大戦の後の文化像を書くのは、あまり六つかしい二面性を持つて、漸々と出来たのは、新しい上出来だと言へば日限が来たから、新進の新人大隈侯は一般の経歴をもつてゐる人だが、人生文化像を始めて書いたものと、日本の文化を通じて生れて来た、問断なく日

本文化の為めに奉仕し。日本文化と終始して来たことを、誤解の為めに、ないかつく、ないかつく、ないかつくことであるが、解かれようとあることと感じたのは特に文化像を書いたことがないからである。文化はあの人の性命である故味である。永慰楽である。実のない言葉は、ないようなものだと尊い故味はないのである。日本の国運と一世紀を経さすまでも世界と歩調を揃へるまでもなく、明治初年論衆多の人の力を借りるのであるが、維新政変出の折、文化輸入に困難の時代が大手腕を揮つた功績と、再来侯が強制の歩調を受け矢張の位地と振りうるが、強制文化誘掖に努力して、苦つて一日も怠ることの無つたことを考へると、日本の功

巨七ツくらいが、此頃は新規角を樹てゝ、みな親分あるを恐れ、人もこれを[illegible]ことが出来ないと今更[illegible]感ずるの外、[illegible]以来の政説家が文化神[illegible]功勲のあるものゝ[illegible]いくらもあるが、自分ら文化の為りて社会を興したるものゝ[illegible]文化運動を[illegible]と唱ひ、四方の有志に説いて[illegible]文化研鑽の心を潜めて[illegible]多[illegible]人は一北北地位を有すると、一身一家のことを事とし、自家の心操を徹底するの勢力[illegible]化するあい[illegible]の[illegible]在りとも云へるべく、俗に日本文化の権化とも云い得ることゝ[illegible]。

（十一月廿日記）

○寿司屋に美伝古と云ふ屋号の[illegible]。美伝古は[illegible]の名で、北海道の海産を

梱つて嗜みとせば、これを[illegible]穴を掘くて自家の食料とするハビットがあるゝ、口中の唾液を誘出する[illegible]味を生じ腐敗しないと云ふのである、人間が死んでゝ死肉を失敬することもあるが、うまいと云ひんとある、[illegible]こんハ云ひ一種の[illegible]鮎ひあるゝ。美伝古ハ優しくゆゝしきへる名でいまゝやうふさハしい名だ。

年間に、大阪の狂言作者西澤一鳳が五十三次の名物土産の披露をした、その品書を参考にして今もあるものは◎印をつける。

○江戸　お定りの役者花燈錦絵◎品川　寒製の淺草海苔○川崎　大森細工麥藁の手遊◎神奈川　あさり貝のめざし○程が谷　金澤八景の絵圓◎戸塚　鎌倉七里濱の小貝◎藤澤　江の島鮑の粕漬○平塚　珠數玉の繩すだれ◎大磯　小ゆるぎのさゞれ石◎小田原　湯本細工のがらゝ箱○箱根　湖水の赤はら魚○三島　河四輪の早茄子○沼津　千本松の串團子◎原　富士見山川の白酒○吉原　岩淵の栗の子餅○蒲原　三保の羽衣せんべい○由井　倉澤鮑の貝焼○沖津　興津海苔のさし身○江尻　小吉田の長門鮓◎府中　阿部川の芦久保茶◎鞠子　自然薯のとろゝ汁○岡部　宇都の谷峠の十團子○藤澤　種ぬきの紫蘇巻梅○島田　瀬戸の染飯○金谷　小夜の中山の飴の餅◎日坂　新の蕨餅◎掛川　秋葉の生椎茸◎袋井　生干のかます○見附　見附臺のふの焼◎濱松　神明町の羊羹◎舞坂　氣賀の煮氷鮒◎荒井　鰻のかば焼◎白菅　濱名納豆○鷲川　猿が番場の柏餅○吉田　國分のあま酒◎御油　女郎おじやれゆゑ買はず◎赤坂　右同斷よん所なし○藤川　法藏寺麻糊袋○岡崎　矢矧の橋得不求◎池鯉鮒　常滑焼の急須◎鳴見　有町絞の手拭◎宮　名古屋の一口番◎桑名　時雨蛤◎四日市　日永の團扇◎石薬師　薬師様は賣らず○庄野　俵入の焼米◎鈴鹿山　西の町亀の齢○關　鳥居前の火縄○坂の下　峠掘山の鮎◎土山　あけぼのゝ煎茶◎水口　葛籠細工の釜敷○石部　お半長右衛門買つて詮なし◎草津　別製の姥が餅◎大津　大津繪の扇子◎大阪　生魚と伊丹酒

誰やらが京は砂糖漬のやうだといつたが、下戸の建る藏は京の菓子屋に、虎屋の饅頭、道喜の粽、駿河屋の羊羹、龜清の洲濱、聖護院の八つ橋、船橋屋の五色餅、今宮のあぶり餅、北野の長五郎餅、東寺の蕨、竹濱の眞盛豆、御靈の唐板、東山の大佛餅、北野の粟餅、松吉の益壽糖、上田の味噌松風、長久堂のきぬた、鹽瀬の最中、三條の月餅、尾張屋の蕎麥まんぢう、鶴屋の柚餅、井筒屋のけし松葉、若狹屋の調布、鎰屋の黄粱、それに近頃賣出した祇園のおけら餅、智恩院の忘れ傘、大原屋の釜風呂、三十六峰、一力飴に與市兵衛などゝこれだけ書いても胸が閊へる。それから上加茂の二葉餅、下加茂の御手洗團子、愛宕のしんこ、嵯峨の花より團子、宇治の茶團子と、洛中洛外

しかし上戸向にもまた如才がない、八百三の柚味噌、大德寺納豆、鷺しらす、鱈の甘酢漬、柴漬、千枚漬、すぐき、鶉味噌京湯葉、生麩、京味噌と數へ出してはいくらもある。さて料亭では朝の茶漬から、名物の朝粥といづれも一流どころでお客を待つてゐる。まづ茶懷石の瓢亭、わらじ家、有職の樹の枝、中村樓、左阿彌、祇園料理の鳥居本、いもぼうの平野家、岡崎のつるや、東洋花壇、御池の松清、鳥水だきの新三浦、鳥の鳥岩、鳥彌三、菊水、鳥長、ちもと、錦の湖月、丹榮、魚清、鮒鶴、白水園、さがのほとゝぎす、山端の平八、さがみや、鯖すしのいづう、精肉の三島亭、村瀨、翁亭、川魚料理の美の吉、懷石の美の幸、洋食の萬養軒、菊水、八百政、開陽亭、支那料理の一品香、ハマムラ、すつぽんの大市、鰻の美の庄、鰻の神田川御茶漬の十二段家、普茶の黄檗白雲庵、高臺寺の一休庵などはまづ特色のあるもの。

榛原製

[illegible]

[illegible]

ます。安めるを羞恥の情があることが恐怖の情ともなるので、陰々たる座雰を生じ動もすると全身を緊張させることもある。敢て新婦が新郎を忘れ物をするのでもいうまでも斯の事が起り、新婦が寄後病的ともやうなことが出て、或い新婦が新郎を忘れものをしたることを疑ふことがあり、新婦がヒステリーとなつて離婚となるやうなこともある。日本の習慣では、斯る事と倚くる者の内の花婦がつき添ふ人、里帰りと唱へて一旦の実家へ戻つて休養するやうなこともある。こんな如き数の女子の[illegible]さん[illegible]花さんは新婦が四方郎が其の性慰の旺盛に乗じ、花房の[illegible]を置げ、新婦が深くうつ寝るを[illegible]

るを[illegible]北上のうの残置でありつて、或もすると北苦病が一生の禍となることが陥ることあるべし、早婚の場合を招てい最も注意すべきことのであるから、新婚の印度男子の成熟を待することの必要を要すると思ふ

○行るも越すんば人間業を新んで神又るを云い得る、丸の内どん附近が毎年入るるに、蕎麦屋の仕用人が四日蕎麦屋の蕎麦の一箱を運ばせまして、いつも停立して入るが、一枚の盛り三十箱程の蕎麦を載せて上に汁の徳利を五つ六つ並べて載き、意も花けるくとと運ばせます。正に一種の曲芸術である。年寄言葉の喫屋屋で入て蕎麦心しの、皿洗ひの娘来び且つ巧みなることである。五六枚の二ヒー皿を湯から

元り出しを笑と一緒に持て挿み吸次に布を丸び拭き
清らめることの早さ、看るく二三十枚の皿を高く重ね
拭き終つた此、汚穢の中村屋の家
がある。大きな蛇のやうに伸べた飴をとんく柳
庭下で切ることの早さ、おのつからく柏子があつて、手中
さ尺度があるかのやうに、切つた飴を大小同かうに。曾
つて此酒屋のビール会社を訪ふた時、非凡の女がゐれの
を設るこれことがある、立方本千本のかう瓶を一束と
集めて、此女が石油の臭気のするビンを嗅きてゐる
のであつたが、主ちろん目らの指先もて〳〵竿で
こんなのを拭すのを他の女がこれを除くのであるんだ、史
のそれ程を過ぎないことの今社ひの舞踊りとも

ゐる位で、これの女のお白粉の臭を詩名が呼人びゐた。粉
を振ることも好る巧拭かあつて、飛りかたくてもしく
やてりびもまつく、且つ無みがらくんので、此の振
りを熟まるこは相角の俳業を寄まると云ふが、こんな
天才があつて、某藝者の少年の非凡の手腕があると
云のんとゐる。これハ三原橋の壽司屋の小僧び後生
拭るべしと人(面)に云ふもゐる、金(面)の云く魅い氣び
振つて氣び公ふこのび呼吸日拭の呼吸があると云
ふとゐる。

隨想隨筆

現代 十二月號

秋の花

市島春城
（早大名譽理事）

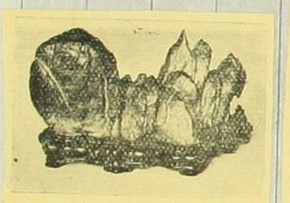
春紅は濕ひ秋紅は乾く、とある詩人が形容したやうに、春の花は豪華で、秋の花は蕭洒である。春の花は色氣たつぷりで、秋の花は禪味がある。前者は花魁の如く、後者は尼の如くである、前者は人に驕るの趣があつて、後者は謙抑の致がある。全體多花疎葉を好むのは西洋趣味で俗である。疎花密葉は茶人が敎へた日本趣味で清楚の風韻がある。秋の花は茶人的趣味のものである。

毎年の事であるが自分は秋に入つて庭園を歩るき氣のつくのは、茶の花がいつの間にかコツソリ、宛がら人に覺られないやうに、時を過たず咲いてゐることだ、此の茶は小さく葉に隱れてゐるから、ウツカリすると目につかないが、花は純白で梅花に比して寧ろ優るの趣がある、俳味があつて隱逸で人に驕らない所に賞すべき雅趣がある。ひとり茶の花のみでない、山茶花にせよ他の七草にせよ皆な同じワビた趣がある。

此頃散策の序に或るデパートに入り、某氏製作の竹の花籠の陳列を見たが、竹器は尙古齋亞流の作で、すべてに時好の秋草が生けてあつたが、自分は竹器よりも秋草に見取れた。秋の植物には何とも云へぬ一種のさびしみがある。敗荷だの蘆葦の赤サビのあるのが何んとも云へない風味があつた、枯れかゝつた柿の葉それには蟲喰の痕跡の存したまゝ生けてあつたが、花でも葉でも春時の豪華の色はなく、人間で云へば大年增の褪色した滋味がある所に却つて一種の味がある。西洋人などに云はしたら、それは病葉だ、臨終の忌はしい色だとケチをつけるかも知らんが、幽玄の味は寧ろこゝに在つて、秋の蕭殺の氣と共に其の衰れさを味ふべきであらう。

加賀の千代の句に『枯梗の花咲くときポント言さうな』とあるのは穿つた句で、如何にもポンと聲を發しさうである。蓮の花も開く時ポンと聲を發すると久しく信ぜられ、自分なども斯く信じてゐた。然るに專門家達はそれを否定し、其の聲は水中の魚の喰喞の音であらうと云はれたが、矢張りこれも枯梗のやうに咲くときポンと言ひさうだと云ふ錯覺から來たものかも知れぬ。

秋の花で豪華なのは、朝貝であらうが、秋が深くなると謝して、最早花を見せぬ。加賀の千代の句に『朝貝やまだ燈火の影もあり』とあるやうに、夜が明けるか明けぬに花を開いて、人に早起きを奬勵してゐる。『朝貝や蚊屋の内から障子あけ』（杉風の句）朝寢坊も流石に寢室から花を見る、此花の朝咲いて夕べまで保たない短かい運命であるのに、何故毎朝欣然として開くのであらうか。槿花一朝の榮で果敢ないことだが、其の豪華の花を發するさまは、一茶の所謂『慾面の朝貝たんと咲きにけり』と形容され、其の處構はず咲き亂るゝさまは『朝貝やおのが蔓かと鳶に咲く』（千代）とあるやうに、如何にも無心である所を私は愛する。此の植物は朝の仕事が終れば、ドンどん凋落してゆく、譬ふれば毎朝の新聞紙と一般、それを讀み畢れば廢紙となつて葬られる、運命は如何にも短かいが、務はチヤンと缺かさない所に、新聞紙と同じく賞すべき所がある。



盆石方改

□古屋石はいつ頃から出たか、それは未だ確かな記錄は見當りませぬが、小堀遠州公の書中に見える西本願寺珍藏の名物石「末の松山」が古屋石である事から見て德川の初期以前既に掘出、世に愛玩されてゐたものと見えます。そうして寛政七年に藩主の「御止メ山」として一般人民の採掘を禁じ、藩に盆石方を設けて、石の採掘その他の支配をなさしめた、上掲の烙印はその當時石方が使用したものである

（原寸大 鑄鐵印）

石たゝみ手ふれぬ石のいかにして
かくさまざまの姿みせけむ

千種有功 郷

○拘共霊を得ることは拘共自身の任合である。甲の手元に在つてどんなものであつたかしや何の物とも成果の孫重さんなることがある。自分の任験ひも聊かコンナことが無いでもない。今は十数年の昔となつたが義左義堅の同学数名と田中一右衛門と西浦と熊吉の人であつたが共の人々の仏前に線香を上げたのだ。ある時自分から桐江の遺墨の巻物を貰つた。共の祖先が田中桐江であることを知つたのだ。

茅書（共の人の方々に義理あるならば少々（以下書き一紙を家に伝いらるものとなるから共一枚上げるとあると言ひたいまを言ひたい共

共は郷里で教育をつとめてゐる兄の一寧さんが去る人びと礼を云ふてきたから、そんなれば孫として先祖の一紙の遺墨を頂つたら、さぞ嬉しと、

賜つてくれ、亦桐江が「陽の遺」を頂戴と頂戴の時桐江が世世を新つて亡命した時大坂の近在を隠れ、そこを惟を無んを続を新くした遺跡が今も有りてゐるのだ。一寧は共を尋ねて出うは此評判の記るや感想を言ひて来たことも有る。自分の茶中で在つてどうでもよいとが分らくも書いんるものかと自分はいろ〳〵感じ旦の臨終の遺言ことが有る。今言も略々以上やうことがある。

共氏の行方田の共典を類焼の危に罹かつた者

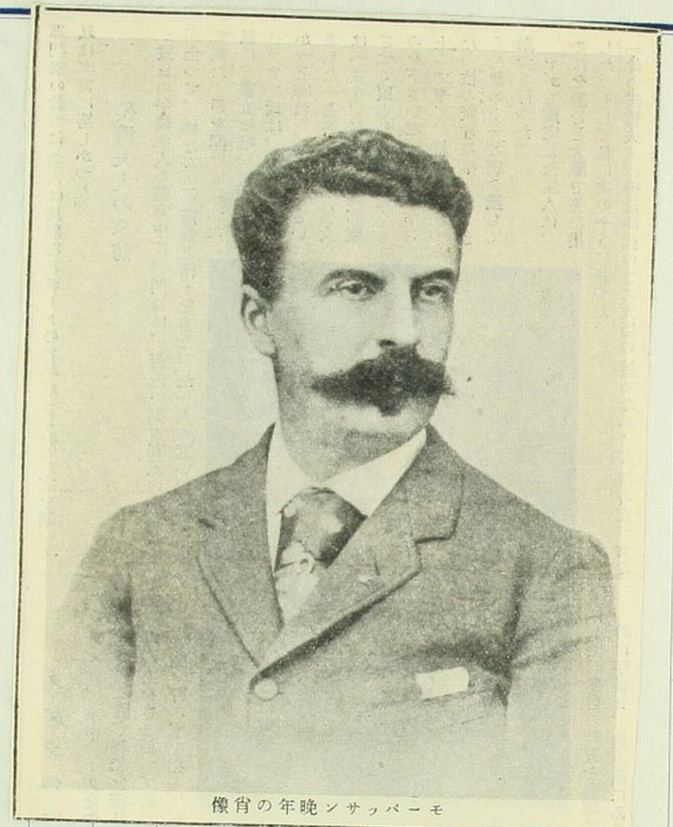
昭和九年九月一日病床に於て「死面」が士博遙道内坪時るたへ
の代り に廷れ贈に氏田生てと 」な像座るれ
像身半しれら
（筆自士博遙道は字文の部上眞寫）

[illegible]
さる一端なんぞ七月のべし

○手紙 野村のこと 小野梓君の胸像除幕式を行ふ
[illegible] 此の小野君の長男 [illegible] 自京都 [illegible]
[illegible] 又一を付して来る 京の四十[illegible] 子 坂本等と大隈今
[illegible] 今をひらき 橋の渡る [illegible] 梓君の
[illegible] 時 偉なん二大字 [illegible] 父の勝の山 [illegible]
也 生涯 [illegible] 祝を [illegible] 開 [illegible]
[illegible] 祝の業を [illegible] 京都 [illegible] 隠居 [illegible] 養子 [illegible]
の成業を [illegible] 又一も医業を [illegible] 京都の
医科大学 [illegible] 北の未完 [illegible] 多きも
[illegible] 平福四郎 関係 [illegible] 京山 関係の人と

[illegible] 小野君 [illegible] 実三十五人 [illegible] 八十五
大隈侯 [illegible] 年と同じ 但し [illegible] 梓 [illegible]
[illegible] 人 [illegible] 手等の流石に [illegible]
四とせと数 [illegible]

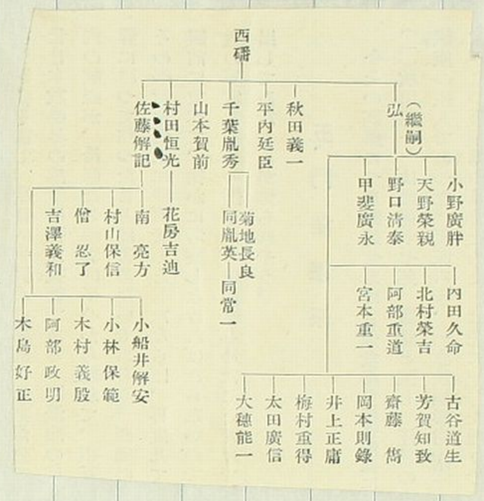
○私の郷里で [illegible] 筆者 [illegible] 山口坊山と云ふ人
江戸の [illegible] 長谷川西 [illegible] 川人と云ふ人
が西 [illegible] [illegible] 特に [illegible] 知り [illegible]
[illegible] 伝記 [illegible] 旅 [illegible] 陸 [illegible] 人の墓の
[illegible] 侍 [illegible]
[illegible] 山口坊山が [illegible] 坊山の門人 [illegible]
伝 [illegible] 記 (山谷の人) が [illegible]
譯か



モーパッサン晩年の肖像

ごあるのでは文家が得意のものであろうか、

此人関係の大家日下誠の一人である、此人は日下門流から陸名されたことを聞くこと多かつた師匠の用理を要する点に到し如し如と云ふ

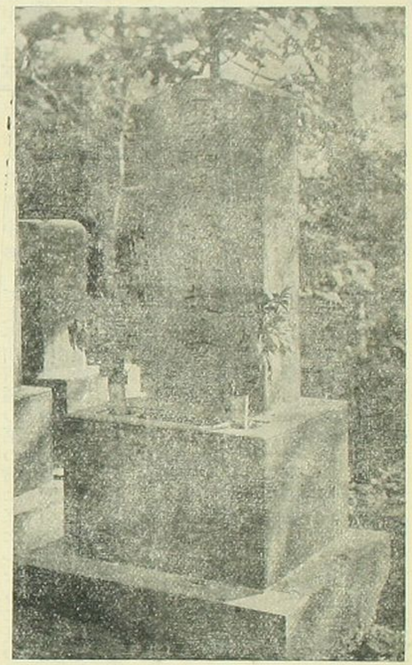


尚は墓は今も麻布の瑞龍寺にあり、同寺の如くであるが、刻文は隆興寺となるべく、瑞龍寺と同寺

太功記十段目の作者

繪本太功記十段目、尼ヶ崎の段の作者近松柳は院本が有名な割に少しも知られなかつたが此頃偶然其の墓が發見された。

柳は作者名を並木柳から柳太郎作、それから近松柳と改名し、最初の名により歌舞伎畑の作者から當時の若太夫豐竹座へ轉向したものらしいとだけしか判らなかつたが、今度の墓碑發見に由り其の本名はほゞ銚屋忠兵衛と名乘つた事も判つた。發見者は文藝研究家の木谷蓬吟氏で本年九月下旬大阪天王寺區生玉町大寶寺の入口に掲げられた「無緣佛整理」の立札に何氣なく立寄り見廻したところ、正面に「近松やなぎ法名柳巖泰敬信士靈」側面に「享和三年亥正月初三日四十二歳而病死」とある墓石が發見し、更に同寺の過去帳を調べたところ果して「銚屋忠兵衛、近松柳こと四十二歳」とあつたもので、柳が意外に早世し、作者としての眞價を充分發揮せずして終つた事も明になつた。



長谷川西磯墓碑（東京麻布瑠璃光寺所在）

「先生姓長谷川氏諱寛字子栗號西磯稱善左衛門晩年薙髮號極翁江戸人精算法嘗立算學道場廣敎授子弟近時門下之盛都下無比蓋自關夫子以算術爲一派開祖六傳至於先生先生更闢極形術以究點竄妙用其簡捷便利無以尙之實可謂關派中興名人矣惜哉年五十七天保九年戊戌十一月二十日以病卒無子門人相議葬于麻布龍興寺佛氏授戒名曰極翁樂安居士

門人秋田義一平内廷臣等誌」

複原製

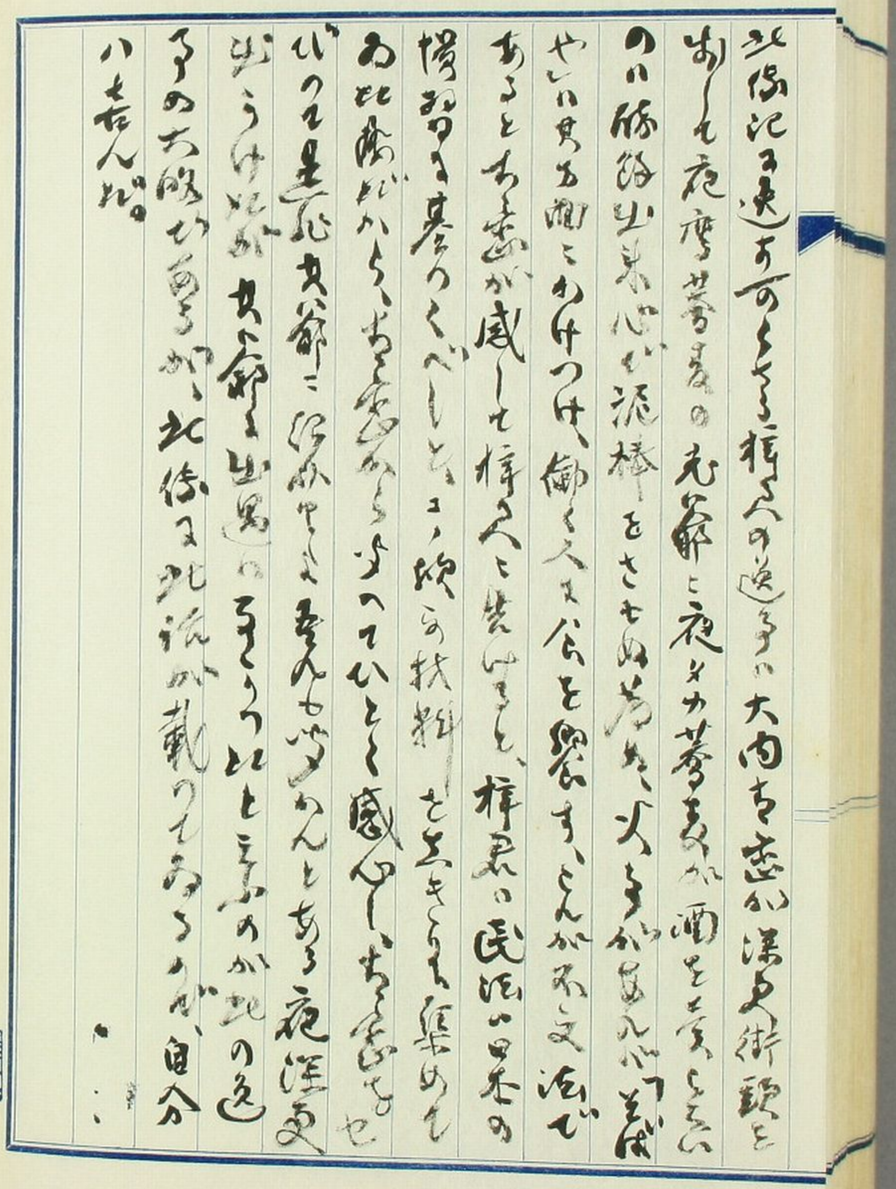
思ハれるの小野君の胸係陰暴の日々元の妻）墨を流列し
ルのと一緒にした。皆まミナ嘗次の書ハ時ゝ迄来ても
ル自分のまゝに見ゝも依以上の年輩がまゝ別居元々
及ぶまゝ、知七年大師流を習ひたことをもつてゐるが、そう
筆跡いまゝ、何んかを山流風である。君の業れい
最も優んとあれ自分へ所う君の業れこ私淑したとい
事実である。志んてゐれことゞ此侍を淡み思い出しと時々
き出したことが一二度。立等が小宅君をこ訪ひと大ていの
刻とるので晩飯を喫ふ、ある時どうしたこと
かロかゝまんを飯のあつけらいのでロと宝腹を抑
へてゐるうちもうこれ、其後山田一郎が何う言い出した
太白を飲ませて祝ましきゞと言ひ出したのが初め

藤原製

で繁かつき晩めしを賛侍さん見時に酒まで飲ませたと
とがある。五人六人一緒二三回位君の居を訪ねて来ては
帰かつれとうと想像することを思ふと君の宅も可なり賑
前島から長崎を西山の婦とし比いと、其の親族と頼ま
れたのを来さうつれ（比のゝ）西山の別こ婦を定めれた。前島
ハこんを見て心平かゝらず、西山を後ろと西山に一向小宅
何ずの相談も受けずと云ひたれ、小野君の慈愛いま
つたことがあるを、西山の妻かつて自分を隠さんれ
を言回こ世話ることをこれ、実が今の高田夫人である。
俗中此ますか厭るが出てゐる、此業と云ふ前島の
とて居る。小野君の任意した東洋投書会の出資者い義

共産義勇兵で出資額の二萬円であることもあつた時田楳
雨政後坂本が高山彦を記すること、出資を義兵に活
動した時義兵に集まつてゐるものを遂に二万円出資
するものもあつたが、坂本の名ゆゑに坂本の自白
であつた。楳雨の何名龍馬一（テツイチ）と云ふことを今
龍を如何にしつたか。龍を四つに合はせると初めて現れ
そこを「テツ」と訓ずることも初めて知つた。楳雨の父も
あ家臣であつたと云ふ。楳雨は三の男の子があつた
のが時々田舎で失敗した。楳雨の妻の義の妻と
するのは此一寸しかない。楳雨生前中妻等四人平金の
都合の出来たもの、高山一人あるのみ。高山は弁護士をやつて既
に相当の収入があつた。楳雨死後の困つて高山が

歌道しかも色々しかしこれは日誌の書かれたものの
今迄知らなかつた。
此後記を始めるに当つて共産同盟の残金を辻政次氏
が保管した。長く利の利を持つて居いくらあつたか（二千三百
四十三）其の大部分は高山に帰属するかよかつ
たことであつた。大部分を高山とお俊とした。自分が早大の現在学びあつ
た時辻氏から流れがあつた。其時辻氏は如何に高山大禁氏
に面して貰らいたいとあつた。高山は其以前京都大学の
法科を卒業した。自分は京都に出発した。高山は辻氏に大内
氏の妻を訪ねた。故郷に帰つて高山が早大の法科に入つたのは
高山が金を使つてしまつたのは其ゆえであつた。



隨想隨筆

旅の思出

市島春城

自分は學生時代に一友人と東海道、中仙道、甲州街道を四十日間膝栗毛で旅行したことがある、此旅行には種々のことがあつて、追憶すると多少の興を感する、此時分は鐵道は京濱間の外には無つた今日と違つて隨分不便な旅行で、肩にかける小さな行李の中に、折りたゝみの出來る提燈や鰹節を忍ばせて、夜行や山中食物を得ない時の用意までした位で、場合に依つては野宿もせねばならんとの覺悟もあつた。此頃の旅行は所謂る愛する兒には旅をさせよの一件で可なりツライこともあつたが、それだけ後になると思ひ出が深い。今日のやうに汽車に身を托すと、疾風の如く直ちに目的地に達するやうでは、便利には相違ないが沿道の山河も幾んと眼界に入らず、何等印象が頭に殘らぬ、不便時代の旅行は、汗を流しながら幾里の道を草鞋で丁寧に踏んで歩くのだから經過の地一木一石を見のがすことが無く、默々として歩く間に、風物に就て多少感ずることもあり、意外の事に出遇つて、失敗したり滑稽を演じたりすることもあつて、他日の語り草が生れ、モノトナスの旅に變化を生じた。

夏時の旅行は早發に限る。拂曉の新鮮の空氣を吸ひながら歩くのはよい心持であつた。七時前に三里踏破したこともある、豫定の里程を可成早く歩いて旅舍へ投するのが吾等の約束であつた。早く旅舍に投ずれば、旅舍に混雜もなく知人のある處なれば其人を訪ふことも出來る。亦其地の見學も出來る、日誌や紀行を書くだけの時間もある。併し此の約束を破つて夜中數里を歩いたこともあつた、夜分は涼味もあり物淋しい夜景もまたよくないが好んでなすべきことでなく、斯る場合には木賃宿に泊らねばならないやうな事が起り、事實そんな事もあつた。

箱根の湖水を小舸で横切り、姥子の温泉に泊つた時に、温泉宿が原始的で何の設備もなく、一夜蚊と蟲に苦められ一睡も得ず、天明を待つて早く發したが、御殿場まで行く途中、身を沒する程の葦の原があつて遂に道を失ひ、御殿場に辿りつくに多くの時を費し、御殿場の茶屋に達した時身體が疲れて綿の如くなつた。疲れ直しに酒を飲んで一睡夜前の不眠を補つたが、富士の麓須走に達したのは夕景であつた。須走には泊らず夜を冒して富士の中食場迄漕附けたのも此時であつた。

東海道を經て關ヶ原に達すると

こゝに面倒な事が起つた。此歳は京坂に虎列刺病が發して、京坂から來るものは關ケ原に喰ひ止め、三日間の滞在を命ずる制規となつてゐた。吾等は京坂を避けて木曾地に入らんとしたのだが、京坂の地を踏ない吾等を抑留せんとするから吾等は宿も定めず、郡役所を訪ふて殆んど夜を徹して談判をした。幸ひに一新講社の宿帖に經過地の宿屋が判を捺してゐるので、それが證明となつて、三日間の滞在を免かれた。もう一ツ椿事の起つたのは養老の瀧であつた。吾等は瀧に浴して徐ろに費食を取らんと荷物を或る樹に托して瀧に行き歸つて來ると、命じもしない料理が坐敷一杯に並べられ、山河の八珍悉く備はると云ふ豪華に一驚を喫したがあとから聞けば内務太輔杯友幸が來る豫定が狂つて其の爲めの料理のやり所に窮し、吾等が行つたので、吾等に宛てがつたのだと分つたが、三日分の旅費をこゝに失つたので、長居は無用と、匆々立去つたのは行中の一災難であつた。

木曾街道を數日股にかけたのも可なり難儀であつた、一帶の流れと檜林の外には目に映ずるものがなく、細久手と云ふあたりは最も僻地で、疲れ足を引ずつて、やつと宿屋に辿りつくと、此宿は何故か酒を出さないのに困つた。酒が欲しければ自身で買ひに行けと云ふ見幕に、他の泊り客も同じく困つて酒を買ひに行つてくれたのはよかつたが、一[illegible]トテモロにすることの出來ない惡酒であつた。木曾では義仲の興つた洗馬邊の風景や、浦島太郎の傳説のある寢覺の里などは今も忘れられない趣がある、御嶽にも登つたが、同社連に蹂躙されて俗了してゐた。

木曾路から甲州路にぬける境界に、二日路程どの荒凉の地があつて、幾里歩いても憩ふ茶店もたく實に困つた僅かに一軒宿屋があつたが、宿屋と云ふても實は農家で草茸き屋根で、家の周圍には肥料や馬草が積み重ねられ、露天に風呂が設けられ、廣くもない一室に十數の客が、煎餅蒲團にくるまつて雜居すると云ふ有樣で、客室に隣つて馬屋があり、夜中馬の嘶で目を覺されるやうな不愉快に、まんじりともせず一夜を過したが、此の界隈に宿する所は之れを措いて他に何もないので、吾等も據ところなく、こゝに宿したが泥棒や掏賊も交つて居るであらうと思ふと、牢屋に寢るよりも不安を感じた。

ゴルフの面白味

仲摩照久

私は若い時代には相當酒も飲ん

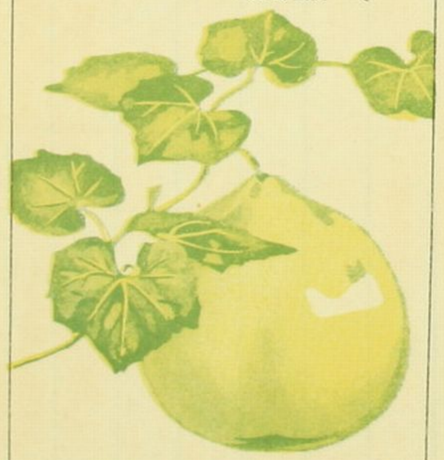
朝鮮瓠（バカヂ）に就て

朝鮮の代表的ローカルカラーを云へば何と云つても「バカヂ」に如くものはない。爽はすものと云へば何と云つて爽かな秋天朝鮮の屋根の上に靡つてゐる「バカヂ」、全鮮到る所の市場に或は各家庭に行人の目を惹く「バカヂ」、鮮人間の度量衡の重要な役目を果す「バカヂ」、之を歴史的に微しても濟州島卸先にからまる神話、新樣文化を語る「バカヂ」とは離るゝことの出來ない存在でもある。

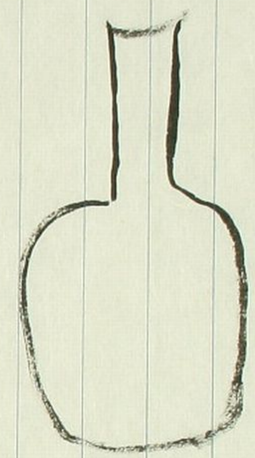
國語の「ゆふがほ」「丸ゆふがほ」「ふくべ」内地に於ける夕顔細工、干瓢等に關する名産はあるにはあるが朝鮮の「バカヂ」とは同日に語ることの出來ないものである。

殊に朝鮮に古くより行はれた螺鈿漆器及び當工業所案出に係る切込樣を此の「バカヂ」に應用して錦上更に花を添へたものである。

我がバカヂ工業が趣味と實益の上に於て朝鮮に於ける代表的のものであり一般から白熱的の歡迎を受けつゝあるも偶然ではない。



朝鮮バカヂ工業所



而して、賀田直次から頒ち与へられた、大明左の如き形ひ表裏黒漆ひ粘巧と塗られ、中央螺鈿の絵模様があり、柄つきの蒔絵がかゝれ、柄の中央に朝鮮人が時々持ち来り渡したるものなり。

三位殿様のものなり。

○朝鮮人が時々持ち来る其都度薬を持ち来り渡したるが例となりてあり、朝鮮の薬を高麗人参と称し、咸鏡北道産の人参の薬は、元来法もよいと云はれ、心附いた者あり、その薬は日本のものよりも良いものがあり、為に各法を問ひて見んと思ひ、朝鮮の古法が新鮮なる故に出した。其の製法の次の如くなるものなりと思はれ、其きものを用い、其の用途は短い毛を排列し、外側に長い毛を排列し、其中央の長き毛に糊着し、絡くて結とくくること、其の末端を漆ひ固め、円錐形となりたるものを動かさしむ。右のものを用ひいるのは、力の中央ひあるから、穂の心と良管の長い毛あるも、形を整ふる上に使用に耐久力あるくしたる為めなる。其ひ其の周囲に短い毛を排列

まるの墨をふくませやすく為める形をよくする為めの
必要であつて、此側の赤い色を圓徳まるのを、全体
整正形の上の必要で全く合理的であると感じた。
○獨逸が世界大戦で敗戦の結果課せられた賠償
金は千三百二十億金マルクであつたが、それが五ヘサイ二
條約を定められたのである。千億ポンドと云ふ金は実際ばう
スプの出来ないやうな大金である。世界各国もマサカ
此賠償金が全部取れようとは思つてもみなかつたであ
らう、獨乙自身も之を拂い得ようとは思はなかつた。
であるから伯爾伯林最初の七ヶ年間は即千九百
二十年から千九百二十七年までは非常に努力して支拂
つた。其の金はいくらだつたかと云ふと、八十六億七千萬

金マルクで百億を満たない。而は残金は元利合計
千百三十九億金マルクが残つてゐる。此金が為て
莫大な額であるから、或る種類の任務者は云く、獨乙
獨乙の十マルクの金は、一銭の価値と云ふ。一銭時分
の一銭の価値もない。全部が殆んど使つて了ふと、一銭時分
の一銭の価値もない。全部を殆んど使つて了ふ。一日の九分の
ない三百七十八年間かゝつてもみな、所の賠償金の
支拂を終くるのは実に無理難題だと云い得よう。
誰人も不可能と思ふとなると、茲の獨逸が何か理窟
をつけて賠償金支拂の義務を逃れて仕まふことは
の為に、ヒットラーハ昨年拒絶した。拒絶すれば
賠償違反になるけれども戦争を再起しても之を

を考へることが出来ない世界の情勢に面するので、猶ほ平氣な顔で二三世紀前と共同も保つて居た日本を蔑視して強手をやり、一文も拂つて居る獨乙の野心とのみ責むさい無理でないかと強手を熱を吐いてゐる。利害今後の大戦と巨大な償金を深する事とい考察を要する疑問とも云ひあらう。

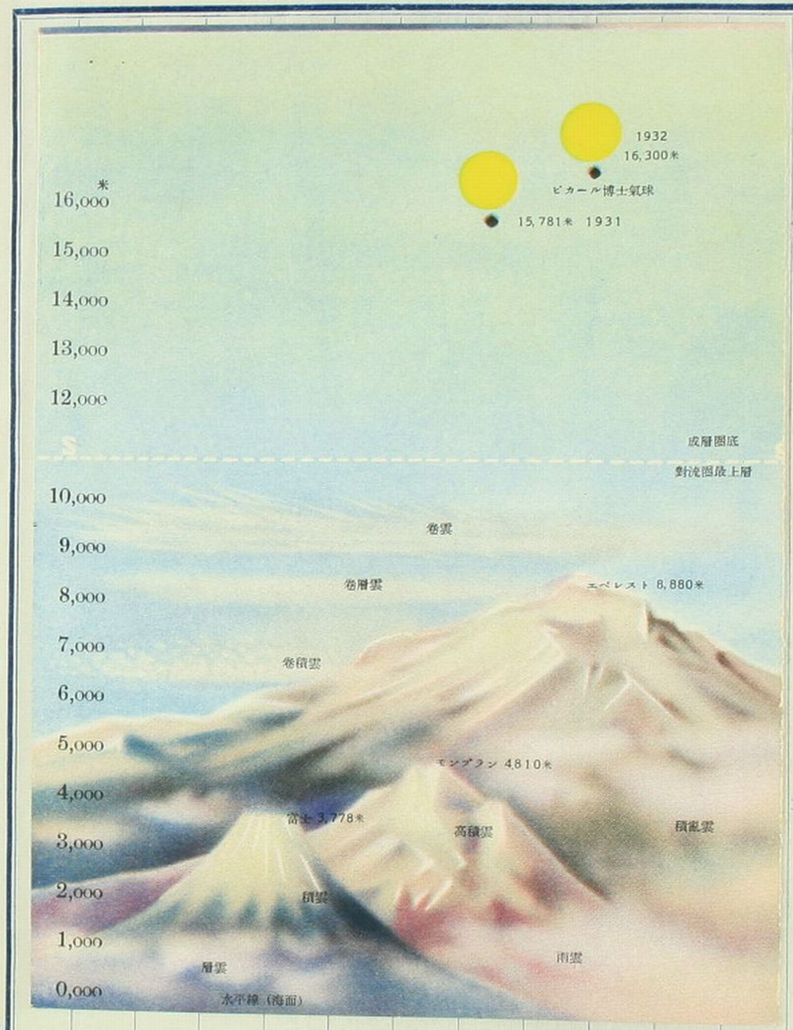
何んでも強ふことが強つ世の中だ、平和渤海の一個のヒットラー美が威張んだ、世界はどうすることも出来ない。伊太利がエチオピヤを征する無理ひいあるが、えむかの問題でどうすることも出来ない。日本が滿洲政府を擁立した。の就て世界は後の是非如何を憂慮してゐるが、これも矢張力の問題だ。利害未開國いかなる

開化の刺戟の下る立ちさる事を得ない、開化の言ひ分は未開化を刺戟するのは美しを開化の強ずめんとするのだ。美の表面の口實で、未開國の遺利が多いから美を掠めんとするのだ。未開國は金利が貴いから資本家のもこの事業を起さんとする。利害世界の開化國は人口過多等でどこか、流出を強ひられて行き法り狀態を長るから、殖民地を得る者ある今後の戰爭の起こるといい止むを得ない。東洋は土壤も廣く未開で遺利が多いから、世界の強國が強の方面を獲利し来ることは勿論で今後の壹き為る事である。東洋未一の強つて居る我邦は共國と幸いて世界を相手とする覚悟が無くてはならぬ。

○閑に乗じて短詩百則を録す、四語三語多きも七語を出でず、簡潔最も一変を得るを即語と為す、書家の好んで書く常套語の如き余之れを好まず、

（昭和十年十一月廿七日記）

一清烟外
一帆風順
青山雲一片
和敬清寂
碧沈香脚碎
香浸氣花狂
虛心是今河
至人不留行



松無古今色
竹有上下節
一燈獨守寒窗
清風三歎空
松涼健人
步步是道場
心無事即稼
終年無下人
無不有時福
閒情時時醉
杯中能影
清風匝地

成事不說
深藏如客
風氣何清古
山嵐飛如舞
冷雨紅豆月
逢花駐馬
江抱屋如浮
歸鳥山欲浮
遠帆無遠意
水翻雲欲活
舟傍月同行
此身除竹外與鄉

細泉水底咽
劍氣吐長虹
白露青秋
得秋黃實成
千秋風雅
淡然自守
寬然自放
雲中鷄犬
松聲玉響船
百能媒一忙
風柳露疎星
螺鬟水雲

漢江掃葉多閑僧
拾花未放雲先香
風柳牧牛
江鄉雪雲
半江疎雨
楊柳古灣
酒因燒多
雨色天青
平橋綠一望
乾坤容我豪
漢彩長虹古
清風明月屏人

以湖且作溪山梦

乾坤一笑金

人以之湖

心閑物自閑

冷月無聲

寄塵風塵

一枕邯鄲別有天

一池明月屬蛙聲

乾坤一草亭

楚畹清芬

騷壇清供

永春無古今

一馬來秋雨載

寒天玩鶴

心安閒放

閒是寶

靜者安

竹吟石默

兩岸柳汀烟樹

巧者拙之奴

大地無寸土

世短意常多

還奏春風山嘉

疾行無善迹

無心人似梅花
熱心士同楊柳
話深燈火入灰微
窓疎眉語度
紗輕眼笑來
孔丘盜跖俱塵埃
國可滅史不可滅
忘是後之適也
忘熱時之意也
如蕊不出烈士骨格
溪邊鷺忘死
葉里丸不大

棋如子無多
微名身後酒生前
詩無到人愛愛工
放言長
天許我作閑人
五內清涼
蹙花愁葉
紅情綠意
紅瘦綠肥
柳闌花明
酒前茶後
醉處夢中家

痛飲真平生
醉臥因吟處
最難忘吟之喜而
一四笑六根靜
笑與海鷗親
蓼陽茨室
人與綠移俱處
一笑白鷗前
倚樹聽流泉
放浪泉石
守拙歸園田
一塢白雲三間茅屋

樣原製

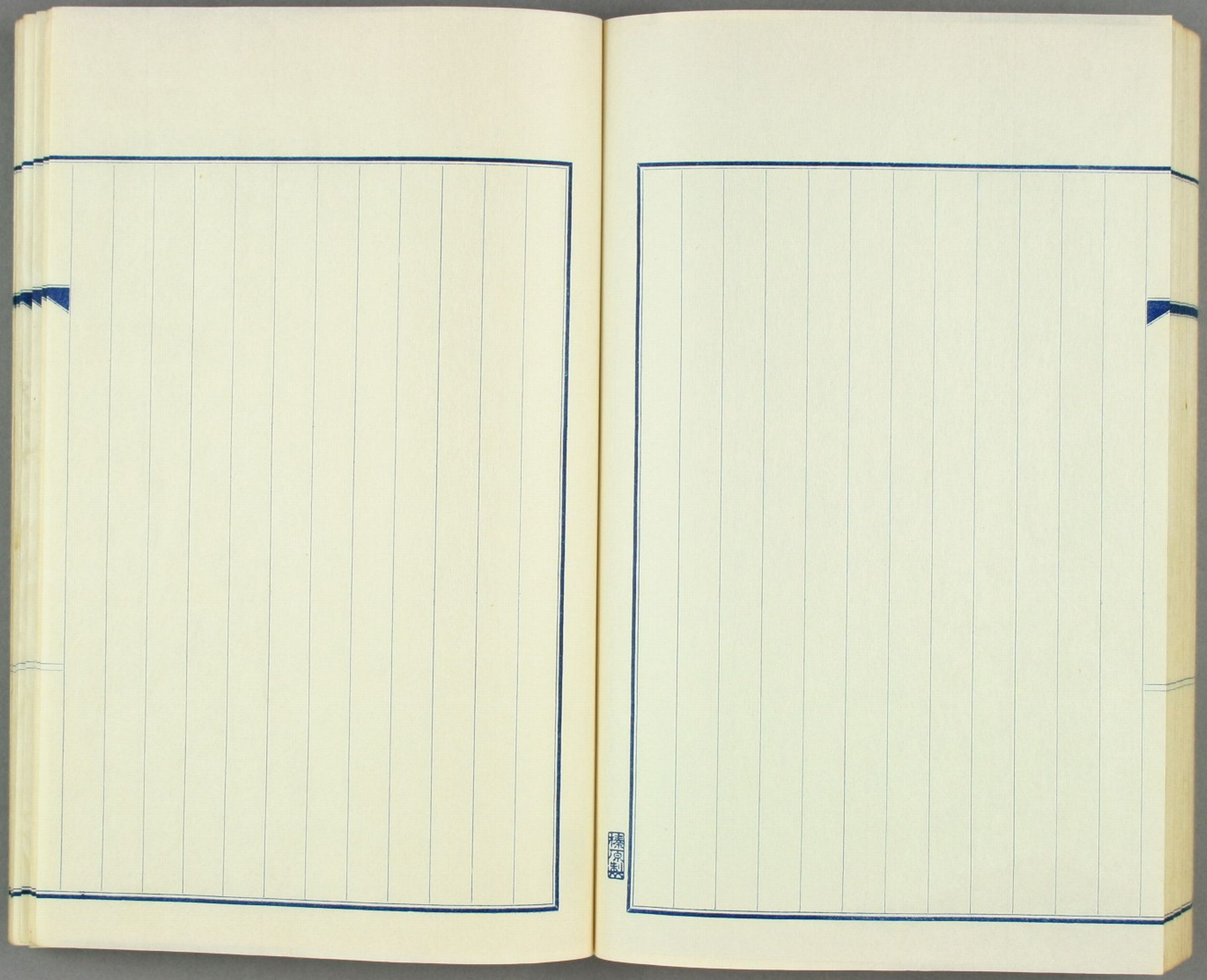
夢和香冷
夢紅情載綠衣
微涼入畫屏
世情高枕遠
浩平自得
髮冷一梳風
壯思雲起
清白自守
蘿軒夜月潤
沈靜味古
淡然神解
和而不流

白沙翠竹江村
亂葉翻鴉
江雨霏霏江草齊
天地一蓑烟雨任
釣石閒看
大夢一場
雨蓑雪蓬
樹燈花影裏
蓬影等參
清嘯坐忘機
陵烟陳柳一蓑春
宮嵐殿雨

忘機一釣竿
碎波風皺水
荻月蘆風
把酒祝桑麻
剪燈話蕎雨
隱淚皆如
雨中無有柳
夕陽紅半橋
殘花如雪
柳汀蓬浦
一蓑雨
西宏一榻芭蕉雨

半面生烟霞
郷庭又暮春
悠悠烟霞
枇杷落花一溪雲
芳衣菊仙
一笑百憂忘
湯眼是相忘
階庭横六合
不因人熟
閑紅深雲
翠千毛四天垂
而今雪古

余い人と需めるも往々一本二十数枚の原稿を養すること多く、其陰往々在後を得さらう困しむ、後に其人其時其事に座ヒさうを得す、墨坊必携を如し方今漢学廃り難解の語を書くことを避けまるを得ず、余は時々在後を今まんば手帳に録しおくべし其の録する所古語さまざまに茫乎として時々迷ひ手帳を携へ書物の二手帳をもて揮毫し、上録を如くに記あるも懶し、北内在後わかく記れあるも余の郷国一の語を繰り返して書くを好まず尚ほ多くの語を選び(至)て思ふを笑ふ



以下
6丁
白紙

「隨筆早稲田」

泗川にて　覆面記者

近く隨筆、文藝論を公にして世に問はれ母國讀書界に風の如きセンセーションを捲き起こさしめてゐると傳へられるわが市島春城老先生は毫端未だ乾かざるにまた「隨筆早稲田」を出された

老先生の隨筆物何時も〳〵縱橫・闊脫百出であるとして評判物こんどの隨筆にしても讀書界の歡兒たらんことは疑ひなきところの紙數も頗合ひの三三四頁定價も一七〇錢

發行所は東京杉並區高圓寺六の六五九番地同好會と・南有書院との共同刊行となつてゐる

○

著者の春城老先生には嘗て隨筆

二

著の貴重文獻としての價値が存するとする卷頭にかゝぐる著者自らの小引を拜讀してみてもだ世に出ないが、私は不束ながら、覽より始める趣向で、早稲田大學が五十周年を迎へた時、試みに大學の今昔に就て、亦大學に寄與した師友で、既に故人となつた百近くの人々に就て思ひ出を綴し、當時の早稲田學報に連載したことがあるが、此等の記憶では消憶が書き足らないので、其後も追々書き足して大だ十分とは思つてゐない

こんな風に書かれ即ち著者はこの著をもつて早稲田繁昌記として世に問はれてゐるわけだが、此にこの著は早稲田繁昌記であり早稲田史でもあり早稲田發達史でもある――續く――

早稲田繁昌記であるこの著「隨筆早稲田」早稲田史・早稲田發達史としての推奬價値があるとしたいのであるが只漠然たる紹介で賈ふてみ給へ、讀んでみ給へとお奬めするわけではなく備へ置くべく讀んでみるべきだとしての內容價値それの檢討を進める

○

新聞記事にしても只或る事柄の內容が報道される、それだけにてはニュース價値が十分に發揮されず讀んでみてもさまでの興味を覺えない、だがその記事に人間が織り込まれて行くところに初めてニュース價値が持たせられ讀者にも多大の興味を與へる隨筆の記文にして例へばこの著にしても先づ第一番に著者が引きつけられて耽讀させられたのは學園物故師友錄でこの項には物故師友大隈老公を始めとして坪內老博士まで八十八人の人間が織り込まれてあり人間臭がぷん〳〵としてゐる人間臭があつたからである讀んで行くうち、

に偶ま四師・盟友の記文に出會はす切々綿々たまらない情緒・感情の動きを覺えるものであれだけ感たるところでの感じをいふてみやうならば創立者大隈侯には偉大性に打たれて景仰の念を新にしたるが如き感じがされ南部英麿氏の項では肩目秀麗、壯軍で沈着であつた貴公子そのまゝの風貌が想ひ起

こされ男爵前島密氏では男爵が嘗て遞信次官の時記者は學校を出たがまだ漠々落托の境遇知人が男のところへ食客をしてをつたのでその居候の居候となり一夕火鉢の上へ滿腦熱情を演じて火事を出さうとした失態など思ひ出して爆然縮ふ田原泰氏は東京專門學校の幹事時代に世話になつたのであつたが一日外人教師が寄校眼を病んで欠勤の節りをいふてみたそれに對して滿腦の同情を寄せ紹めてゐられた態度は今尙眼底に在り田原氏は蕉

こんな風に隨筆の人間臭い

記文には興味の盡きざるものが存する

三宅雪嶺博士の弟兄三宅恒德先生、雪嶺博士も變つてゐるが弟兄の恒德先生は更に變つて居て超世俗、一種人間離れのしたといつたやうな風骨を有せられてをりその面影がゲーテの容貌に酷似してゐたことが今でも記憶にあり堀山和夫博士、校長時代の堀山博士にはたいした印象も持たせられてゐないが議會に於いての雄辯天下堀山博士としては莊重の辯舌耳朶に殘つてをり天下之記者としての山田一郎氏は磊落不羈、飄々無礙何時かの逐鹿戰に三條、小千谷、六日町あたりまでお伴したことが思ひ浮べられるのだし內田銀藏博士は一學の士として嘱目された青年で千住のあたりから青い眼鏡をはいて

頼山陽の高著が存するこの著一度び出づるや絕大の好讀を博し洛陽の紙價のために貴しの歎ひで今もなほ愛讀されてゐるのであるが一代の文豪頼山陽をとらへ來つて隨筆の題材に擇んだこの點が如何にも卓拔な隨筆の題材としての頼山陽は好適無倫だとも思つてゐるそして山陽研究については人一倍・只ならざる興味を有してゐる老先生が筆者となられたには絕好の相應しさを見る如何にも適材適所、白砂に配するに青松をもつてする以上の好適さが知られる〳〵

こんどの「隨筆早稲田」――早稲田を同じく隨筆の題材に承據したには隨筆頼山陽と同巧同曲、奇

拔さも面白さも絕頂だ、隨筆の題材としての早稲田は如何にも陳つてゐる早稲田の名は今では世界的になつてゐる早稲田の道は世界に通ずまでいはれたものだ、が、そは早稲田が偉人故の大隈老公と私學の權威早稲田大學とを有してゐたからのことで早稲田の大も、偉さもこの二つのものを考へることとなしにはいひ能はざる次第でそれだけ早稲田は隨筆の題材としても絕好の好題目であるし讀るべき多くのもの〳〵存する面白い的標だともしたいのだ

隨筆の題材としての早稲田がこんな風に絕好の好題目であるその上に筆者がわが春城老先生であられたのをこれ亦適材適所、好箇無倫の相應しさであるとするなならばだ故大隈老公とわが春城老先生天下知己の感があるといふのはおそらくこの兩者の間柄をいふものなるべく大隈老公におけるわが春城老先生は形影相弔とでも申すべきか日夕面晤、老公の旅行にはなくてならない行列者の一人とされてゐたもので常時側近者の筆頭であられたのだし早稲田大學とわが春城老先生にしても、人は早稲

田の三長老として高田、天野、坪內の三博士をうぞへたものであるがかくれたる經營者、裏面の建設者半世紀の長き大學のために奉仕貢献せずしることの少なくなかつたわが春城老先生を忘るべからずで大學と老先生との關には線の大、寸學の深きものがあるだこの二つの條件からいふても筆者に老先

生の當たられたのを相應しさの絕頂であるとして絕讃したい

○

こんどの著「隨筆早稲田」あつてもなくてもい〳〵讀んでも讀まなくてもい〳〵といつたやうない〳〵かげんのものではなく早稲田に緣故を有するものは勿論のことさらでない稀門無關係の方々にしたつて必備必讀の早稲田を纏つての貴重文獻であるのだ內容目次を檢討すれば只徒かに早稲田大學の今昔、學園漫歩、學園物故師友錄、回顧餘話、双柿舍物語、大隈侯旅行追隨記の六項六篇に過ないが、すべては精彩奕奕々、生々血の滴るやうな生きた歷史でかねて大隈老公の面目風格坪內博士の天分、人格までが文字の間に躍んでゐる點にこの

早稲田へ通ひ英學に堪能であつた、ところからその紙の講師をして苦を捻かせたことなども覺えてゐるのだし小手川豐次郎氏、アメリカ歸りの經濟學者で不具蓬髪、一寸坊といつた變樣な風采で、然も雄辯、むしろ怪辯に近き快辯の持主で講義をしてくれたのも思ひ出はあるしその他中野武營、田尻稻次郎、奥田義人、樋井時冬諸君についても思ひ出で話はあり男爵澁澤榮一翁などになるとこは學校時代でなく晩年記者が長岡入をしてからのことであるが飛鳥山の邸を訪ひ新年號用として論語のうちの一句を色紙に揮毫方を嘱、快諾を得て二三度飛鳥山通ひをさせられて終に書いてくれられなかつたその人を食つたやうな書り方に大に癪にさはつた印象が今でもこびりついて殘されてをり竊相を最後に死んで行つた早速整爾君には、記者が高田から松山の新聞へ買はれて行つた時廣島で同君を訪ね一夕菜飯亭で大變な歓待をうけ整朝旅費に窮して金十圓也、を借用に及んで今もつて返却なし得ずにあるなどの恐縮氣分にひたされることもあつて感慨一入たびたしめ

回顧餘録

から大新聞記者としての大隈侯、早稲田から新聞記者の多く出た理由、圖書館長の早替はり、校友會幹事の捧頌、實業方面の出身者、早稲田出身者の捧頌、實業方面の出身者、教育方面の出身者、早稲田學家、大隈侯から聽く會と侯に聽かせる會、大隈侯チ刀自、大隈侯の國民葬、大隈侯國民葬、寄贈感激、侯を長からしめた記文は大隈侯國民葬の一項だけは記者自身この葬儀に干與させてもらつてゐるためである

巨星墜つ、としての老公の凶訃が早稲田から全國へ飛ぶやガアーンと一巨彈を頭顱にうけたる驚きと感じで急早上京、早稲田に駆けつけたのは記者であつた當時侯の國民葬は著者のわが春城老先生が委員長として一切の儀務を幹してられたところから記者亦編輯委員の一人に推されお通夜から葬儀事務の一端に携はるの面目を與へらるるそんな關係からこの記文に一段と興味を覺える

この國民葬儀について今でも記者の脳印象を喚起、印象を新たらしくしてゐるものに後藤新平の雄波幹事が大隈邸で大先輩たる記者に對し面で何かを書けと命じたのを小躰なほどかり叱咤抗總した時の狀と後藤く音羽護國寺の墳墓に老公の遺骸を納むる儀に列し天幕内に加藤高明伯の弔辭を見たのと今一つ延州の變人田淵君が看護婦から雇用の葡萄酒一瓶をアップし場所柄をも顧みずそれを傾けて大隈侯氣焔を揚げたこの三つである

早稲田長老のうもでわが春城老先生と善かつたものに高田半峰博士があるさらに善かつたものに坪内逍遥老博士がある坪内老博士と春城老先生莫逆の金、忘年の間柄親しさを持つてをられた果して老博士を讃つてゐる双柿舎物語は全篇、全文字そのすべてが友情の傾倒で一讀感傷、涙ぐませらるゝことのみであるのもまこそといへたい

全篇二七頁、三〇頁にも滿たざる短篇ながら老博士の面目、風格、德性までがよく描寫され卷中彷彿坪内老先生の浮び出でゐるのが見らるゝの感じがさるわが春城老先生の坪内老博士を見らるる翁に就て語れは必ず劇の事に渉る、劇を離れて翁と翁を語ることが出來ない、翁と劇とは實に一心同體の如くである、翁は常に曰く、人世は大なる戲場であると、天地は大なる劇であり、然り翁は此見解をもつて劇に終始し劇のためには何物をも犠牲に供して惜む所がなかつた、實をいへば翁の一生も劇であつた、翁ならでは脚色し得ない大なる劇であつた、殊に翁の最期

は壮烈で雷霆を泣かしめた、翁は發熱と闘つて沙翁譯を征服し罪るや自ら不起を覺り、勇猛心を鼓舞し死前十日早く絶食を絶ち、絶對に注射を辭し盛者をして手を下すに由なからしめ、遂に大往生をとげた、觀て來れば翁の最後も劇的であつた

こんな風に書かれ天下知己あるの感を深からしめてゐる

坪内老博士は人格の人であつた德性の人でもあつた正義觀念の強く、責任意識の大なる人でもあつた坪内老博士と赤富觀八氏との握はしき關係は恰の如き老博士の性格と赤富氏の義氣とを識るものがあるがすべて原本に讃る

○

大隈老公の旅は大名行列と呼ばれて有名であつた

併し其眞相は知れて居らぬ、只侯が旅行の度ごとに、多數の随伴者があつて如何にも賑やかである外形を見て大名行列と云つたに過ぎない、實は侯の旅行の内容はなか〳〵複雜で、到る處侯が豪奢を極めたのが大名行列の内容であるかの如く思ふのは眞相を知らない皮相の觀察でなかつたが、これまで侯の旅行の内容を如實に書いたものがない

四　泗川にて

大隈老公は世人のすべてが知つてゐるが如くに豪快濶達の天分でケチなこと、シミツタレなことが大嫌ひの英雄型の偉人豪傑でその旅をさる〳〵につけても隨伴者の多き、すべてが大掛であること春城老先生の所謂成金的や、俗的のものではないにしても大名行列たるには恥ぢざる豪壯さがあつたチツプ、某代の一事にしても春城老先生の書いてをらるゝところでは老侯がどこの宿に泊つても二百圓、三百圓の茶代を撒ぎらるゝのが例だ（中略）、侯は全く其の譯を異にして思ひ遣りが深かつたそして夫人が同伴であるために決してその邊にぬけ目がなく、どこに行つても大もてであつた侯は人に拐かれた序に藝者などが來ると、それにも顧慮を

聖竟侯に隨伴して侯の動靜を仔細に知る者でなければ書けないからで、勝片的には多少の記がないでもないが、較々圓つたものはない

よつて乃公これを試みんとばかりに書き出されてゐる大隈侯逸聞記にも未知、未見の新事を見出だすことが少なくない――續く――

奥へる入であつた、金澤に行つて一泊された時、侯は自分に云はるゝのに、先頭井上が來て一遇間もこゝに泊つた筈だが、茶代をいくら置いたか調べてくれとあつたので、調べた所井上侯は百五十圓置かれたのを随伴の早川千吉郎氏が内々それを二倍にして置いたことを知り、其事を侯に告げると、侯は笑つて他れは一泊だから三百圓でよからうと云はれた、侯はぬけ目のない人だが、夫人は常に氣にされて、夫人同伴でない時は、東京へ私が歸へると、大隈は一人で出ると兎角ケチで困りますと云はれたことがある、如何さま侯の各地の寺宮に參拜されると廿五圓を納められたが、夫人同伴なら其二倍であつたと思はれるこんな風でこの記文を讃んでゐるとツイ釣り込まれて大隈老公と行を一にでもしてゐる感になり自分が一夕の茶代二百圓、三百圓を與へた氣持ちにもなつて頗る愉快さを覺える

○

それから養育の早稲田大學の今昔、こは勝たる東京專門學校の當時から私學の權威早稲田大學に至るまでの半世紀、五十年に亘つての苦心經營、年と倶に擴大されて行つた經程を叙せる大學の成長記でまた早稲田が見渡す限り菅々たる一面の若苗畑であつたのが今日街道の美をなした滄桑の變珍上のテンポの仕方を嫁せる早稲田經營記の主文であるともいふべく殊に多年の努力が酬いられて大學と改稱感激に充ちた大學の開校式の一項を讃んでは稲門關係の記者らに涙なきを得ない感じのされるのはむしろ當然だとしたい大學記念の式典の記文を拜讀するに

此の大學の開校式には大隈侯が主人關で演說されたことは言ふまでもない、文部大臣として菊池大麓氏、日本銀行總裁として山本達雄氏、官學を代表して帝國大學の舊總理加藤弘之氏、政界の大立物として伊藤博文氏が何れも演說を試みられた、式場でこれほど人物の揃つたことはない、そして私をして最感激せしめたのは伊藤、加藤の兩氏が、式壇に立たれたことであつた、此兩氏は實に珍客であつた本校は創立後長い間、政府の誤解を受け其鉄壁的なとなつてゐたもので、動もすると叛逆人の製造所の如く宣傳せられ、大隈侯の政治上の敵手たる伊藤公、官學の代表たる加藤男の如き、割合に重に理解のある人達も、自然一種の色眼鏡を以て本校を

見てゐたのである、勿論二十年の久しき一たびも本校へ足を入れたことのない岡氏が、突々式壇に立つて祝辭を陳べるに若かでなかつた、その演說を聽いて十數年間の事を思ひ較べると此等は眞に今昔の感に堪へなかつた、時勢の推移は實に驚くべきである尙私の今尙忘れない一事は、伊藤公がその演說中これ迄外貿が曾て氣附かないことに言及された事である、公は本校を評して私學は多く營業的であるが此學校はそれとは選を異にしてゐると頌し、私學の尤も困難とするは經濟の料理である、よくも百難を凌いでこゝ迄至つた卑寬經濟の料理宜しきを得たからで、これは官學の及びもつかぬ事で、よろしく學ぶべき事だと喝破された、流石に伊藤公は慧眼で、學校の經營系が最も困難み、言つて置ひたいと思ふ所へ言ひ及んだ、私などは此演說を聽いて欣寞の情を禁じ得なかつた

かくの如くして大學開校の記念式を終り大學の獨立が完うされた時わが春城先生と高田早苗博士とは眞に心から感激、兩者手を把つて泣いたとある

○

この著の內容はこんな風に書かれてあるので從來も稻門に學問を有する方々は勿論のこと江湖一般の讀書子に對しても早稻田を知るためにもとしてお奬めしたい殊に記者の愚論として主張したいのは早稻田關係の貴重文獻の意味から少なくとも地方校友會にはこの著一册は備へ置かしめたい——一〇一〇・三〇—

○著らはにる般をか

書物展望十二月號

擁爐漫錄

市島春城

ビスマークとヒツトラー

獨逸の學生が宿醉に困しむと、强烈なる鰻の酢漬を好んで食らふが、此の酢のものをビスマーク・ヘリングと呼んでゐるのは、酸味の强烈を、ビスマークの辛辣に比するのである。今は此の酢の物をヒツトラー・ヘリングと呼ぶことになつたと、獨逸歸りの人から聞いたことがあるが、如何さまヒツトラーの辛辣味も先輩ビスマークのそれと似寄つてゐる。獨逸にビスマーク型の辛辣宰相が時々出るのも興味のあることだ。ビスマークの起つた頃は、獨逸の國勢が振はず墺國の壓迫下に在つて、バラ〳〵のプロシヤ聯邦でしまりのない弱國であつたのを、ビスマークが起つて其の辛辣の手腕を以つて聯邦を統一して、墺國の羈絆を脱し、普佛の戰爭には佛國を征服して、奈破崙三世をして城下の盟をなさしめた。ビスマークの廿八年に亘る長い宰相時機に於て獨逸は旭日の如く世界に輝やいた。英雄一人の力は如何にも偉大なものである。ビスマーク起身の頃の獨逸は譬へば、宿醉に困んで睡眠を貪つてゐるやうの狀態であつた。それを呼び覺ましそれを鞭撻したので獨逸は興隆した。ビスマーク、ヘリングは解醉劑であり又興奮劑ともなつたのだ。ビスマークが宰相を辭してから、幼帝のカイザルは外交を誤まり、遂に世界を敵として戰つて終に敗れた。其の當面の敵は

ビスマークの時に膝を屈せしめた佛國で、今度は佛國にしてやられて戰敗後七苦八苦の窮境に陷り、鐵血老宰相を思ふ時が來たが、老宰相は既に地下の人となつて呼べども起きず、現はれ出たのが、今のヒットラー總統である。此人の鐵血宰相と辣味を同ふする英雄肌で、どことなく鐵血宰相と似寄りがあり、其の立場も略々同じでビスマークの起つた時より國の困憊は幾層甚しく之れを治療することは容易でない。今日までのヒットラーの成績は見るべきものがあるが、知らず益益頽勢を挽回して舊時へ復することが出來る乎。ビスマークの長所の外交に在つて、あの傲嚴不屈の、あの直情徑行の、あの無遠慮な我儘な、あの無骨な性格であり、誠に不似合に外交に於ては餘地があり、謙遜があり、愛嬌があり、忍耐があつて、與ふべきは與へもした、退くべき時は退きもした。あの專制的の人不似合に外交に於て圓轉滑脫の妙があつたので、歐洲列國を操縱し得たのであるが、ヒットラー總統に果して斯る外交術があるかどうか。獨逸の學生は曰く、ヒットラー・ヘリングはビスマーク・ヘリングに較べると味彩[illegible]ある[illegible]。

ら言ふ可らざるうま味があつたとすれば、それは外交の妙であつたに相違ない。

ゴルデン・パツト

煙草專賣局で製する煙草で何が一番大衆向で賣行がよいかと云ふとゴルデン・パツトである。昭和九年度中、內地で消費したパツトは約百九十二億二千萬本、之れを一本に延長すると、百三十四萬五千四百粁となり、地球の周りを三十四回繞る長さである。卷煙草全體の消費量は約三百六十四億九千萬本と云ふから、パツトは其半數以上を占めてゐる。これが近年一層賣れると云ふ。其原因はと云ふと妙なことに愛國運動の爲めだと云ふ。其譯は此の煙草の包紙が錫紙で、之れを多く蒐めれば飛行機が出來ると云ふので、錫紙蒐集が到る處に行はれ、煙草を喫するならパツトに限るとされ、遊廓などでも娼婦達は錫紙の蒐集競爭をやつてゐる始末で、客にも口付の卷煙草を買はせない結果として、大抵の小賣屋では外の煙草があまり、パツトのみが品切れとなる勢であると云ふ。愛國運動は妙な所に影響がある[illegible]。

人間の慾

人間と云ふ奴は餘程の慾張りものである。肉體的に强烈の慾があることは勿論だが、此の慾を達成すればそれで滿足するかと云ふと、そうではなく、想像と云ふ一種肉體慾に味をつけるものがあつて、その想像のごとくならんことを求める慾が熱烈である。それが爲めに此の精神慾と肉體慾が戰つて兎もすると肉體慾を制することがある。例へば途上で麗人を見て、恍惚として、何んとかして手に入れたいと、種々想像に想像を重ねて、應じなければ斯くせんなど案じつゝ追躡して行くと、嬶がて二三歩の距離に近づく。と麗人は突然振り向いて、艶然一笑直ちに許さんとする態度を示したので、全く胸中の工作を裏切られ、餘りのアツケなさに失望し、興味も全く去つて、すげなく別れたと云ふのがジユマの『椿姫』にある趣向であるが、精神慾の肉體慾に勝つた一例である。

汽車中の珍景

モーパツサンの短篇集の內に、出稼の一婦人が汽車中乳が溢れて乳房が張りきり、胸苦しさに耐り兼ねて乘り合はせた一男子、これも出稼に行く大工職と、自然懇意となり、その男に賴んで乳を吸つて貰ふことが描かれてある。婦人が乳汁の多いのに困ることはどこにも有り觸れた事實だが、それを採つて短篇小說に書いたのは、自分は初めて之れをモーパツサンに見る。車中乳の溢るゝに困り他人の兒女に乳を吸はせることはよくある例だが、血氣の男子を小兒の如く引きつけて乳を吸はせる光景は想像しても奇である。左に要略を摘記する。

女が午頃携帶の辨當を食し畢ると、胸邊のボタンを外したりして寬ろぎ始めたが、堪へ難い苦悶で男に白狀したのは、餘りに乳汁が多量に出るので胸苦しくて耐まらない、誰れか吸ふてくれるものがあらば、どんなに仕合であらうと。之れを聞いた男は、自分に吸はせるなら吸ひましようと云ふので、女は喜こび、乳をさらけ出して、宛ら小兒を引つけて乳首を授けるやうにして男を抱き寄せ、男も亦小兒の如く乳首に取付いて滿喫し、一方の乳から他方の乳に移り、飽まで貪り吸ふたので、女も漸やく胸邊の緊張が解け、男に感謝すると、男は自分よりこそ感謝すべきだ、實は朝から一食も取らず、饑渴してゐたと白狀した。

幕末の名醫

淺田宗伯

松尾蘥天

宗伯は幼名を直民と云ひ識二と字したが、長じて名を惟常と改め字を識此と云ふた。栗園と號し宗伯は天保九年七月幕府の醫官本康宗圓から貰つた名で、此時始めて剃髪したのである。

文化十二年五月二十三日、信濃國筑摩郡奈良井川畔の栗林村に呱々の聲を揚げた。由來信州人と云ふたら、其强情我慢と云ふ點で世に知られ、仲々の負け嫌いである。夫れが大缺點であるが、又一美點とも爲る。宗伯も其點では代表的人物で、これは戮々たる山脈や奔湍の馳驅する中に育つ關係もあらう、要するに頑固な處があるだけ、普通の人の爲し得ぬ處をやつて拔ける勇氣もあつた。

翁の家は源氏で多田滿仲の孫、乙葉三郎賴季が祖である。其孫長政（內藏助）は木曾義仲に仕へ、筑摩郡塩尻鄕淺田城を領し、此時から淺田の姓を稱した。其子石見守長時は頼朝に仕へ、其後幾變遷あつて後小笠原家に仕へたが天文年間栗林村に退て再び仕へず。

正喜號を東齋と云ひ初めて醫を學び、開業の傍ら村童等に漢書を講じ經濟數理の學を敎へて居つた。其子を濟庵と稱し即ち宗伯の父である。產科の技術では當時及ぶ者のない名人と稱せられた、江戸に出で業を開かうとしたが四圍の關係で其機なく爲に宗伯を江戸に出す事となつたのである。

翁は幼時家に在つて父に學んで居つたが、豪邁豪傑を以て自ら任じ、然も容貌魁偉氣魄絶倫で再び武門に還らんの志もあつたのだが、當時の社會組織は武士となつても、天下に

事を行ふべき地位などは與へて呉れぬ。そこで宰相となりて天下生民の塗炭を救濟せずんば大醫となりて天下病夫の疾患を救濟せんと、十八歳の時伊那高遠に學び、又京都に至り中西深齊の家に入り傷寒論から讀み始めた。傍ら詩文を猪飼敬所、史學を頼山陽に學び、大阪では篠崎小竹の紹介で大鹽平八郎の塾に入つたが、彼の陰謀事件を察知したので言を設けて退いた。其山陽に學んだ頃、山陽が大丈夫天下に無かるべからざる人と爲る事が出來ねば、天下になかるべからざる書を著すべしと云はれ、これから宗伯も著書に專念する樣になつたといふ。

皇朝名醫傳は山陽の激勵を受け、拮据二十年遂に刊行するに至つた、が翁の家は決して有福ではなかつた。遊學の際父から父祖傳來の一刀と僅かな金を貰つて出たきりで、中々學費を自辨する事は出來ぬ、窮苦の餘り念佛堂とか辻などで說法を始め、其賽錢で露命をつなぎ筆墨の料としたと云ふのだから隨分困つたもので、其爲に般若心經位は暗誦して居つた。

江戸へ出たのは天保四年の冬、即ち二十二歳の時で、始め喜多村栲窓に就て學び、小島學古、多紀暹庭、田口江村、黑田素行等と交り儒者の方では安井息軒盧谷宕陰、芳野金陵等と交友があつた。

始めて開業したのは天保七年五月であるが、患者はなし、從つて收入もない、自叙傳に依ると、此年四月から日々雨降り、五月に至つて霖雨止む時なく菜蔬生ぜず、七月十八日、八月朔日には大風雨あり屋宇を破り草木を倒し、川流涌溢し五穀價高く、翌八年に至つて米價は益々沸騰して從來白米一石は銀三十錢から七八十錢位であつたのが急に三百八十錢になり百文で米二合五勺、酒一升が銀十五錢になつたと云ふ。道路には餓莩多く幕府は佐久間町に貧院を設けて窮民を救助したが其數二萬餘人であつた。此不景氣の爲もあつたらうが此年の總收入は金十五兩一分銀一匁錢二百文とある。是れで生活して藥の原料代を支拂つてはとても遣り切れなかつたらう。金一兩と三兩二口を詩人連名で借金して居る。此古詩文が家寶で、以來一回も借金した事なく、非常な壓縮生活を實行し、夫れが一生の信條ともなつたのである。

天保九年四月日本橋の通三丁目に移轉したが、間もなく父危篤の報あり其月十三日江戸を發して歸省、十七日着いたが、父は其前日死去、留守宅は十七日小田原町から出た火災の爲に全燒する、大概の者なら茲で挫折して在鄕醫師となる處であるが、翁の勇猛心はこれが爲に反て振起し、葬送が終ると母や弟妹を親戚に托して再び東上、今度は通三丁目の横

町へ開業したが餘り繁昌もしなかつた。此時幕府の奥醫師法眼本康宗圓に就て學び、剃髮して宗伯と爲つた。宗圓は宗伯の非凡な技術と博學を賞揚したとか、彼は暇さへあれば必ず讀書し、古法漢法の書で讀破せぬものはない程であつた。開業匆々餘り繁昌せぬのが、力を養ふ爲には幸福であつた。同十一年宗圓死去の時其二男を宗伯に托したのを見ても奈何に信用して居つたかゞ知れ樣。此年は前年より多少收入も增加して金二十八兩三朱と三百八十文あつた。追々世に知られるに至つた爲だらう。然し此年も盛夏蚊帳がなくて深夜眠る事が出來ぬと云ふ次第だつた。

天保十一年十月初めて高遠藩主內藤駿河守の出入醫師と云ふ樣な者となり、毎月金一兩を受け是からやつと順調な生活に入る事が出來た。然し壓縮生活を信條とせる翁は決して奢る樣な事なく餘財一切を國の母に送り、數年の後には父が典して置いた田地も取戻したといふから、相當困難と戰かつたものであらう。

由來翁の家は古法即ち和醫法で、漢法は使つて居らなかつた。京都で師とした中西深齋も又古法家、隨つて江戸に來ても古法を行つて居た。橘黃年譜嘉永元年の條に

余從來古方を私淑し、治療たゞ隋證后之を旨とす、頃日開居諸詩話を讀み發明することあり、果門徐增子熊父曰余二十年論レ詩祇識ニ得一法字ニ近來識ニ得一脫字ニ諸蓋有レ法離レ他不レ得却又即レ他不レ得離則傷僧、即則傷レ氣故作レ詩者先從レ法入、後從レ法出、能以ニ無法ニ爲ニ有法ニ斯之謂レ脫也醫たる者尤此域に至らずんば、工手と稱すべからず。

と、これが古法に漢法を和し、新生面を開拓した悟入の道である。これから其名聲は四方に聞え、嘉永元年には患者一千五十人、安政五年には二千九百九十三人に達したとか、

文久元年二月江戸町奉行池田播磨守から老中奉書即ち老中久世大和守（廣周）の命として登城の通知があり、登城した處醫業出精に付拜謁を允さる、とて御納戸園にて拜謁布衣の列に加へられた。これが幕府に召出された初である。

文久二年には患者四千五百九十一人、謝禮二千三百餘兩とある。天保八年の十五兩一分とは、實に莫大な相違ではないか、其困苦の內に在つて、猶且研究を怠らず、收入に囚れず入るに從つての生活が此大成を爲したのである。これからが翁の得意時代とも稱すべきか。

慶應元年八月、橫濱駐在佛國公使ロセス（ロッシュ）が神經痛の樣な痛みの爲執務する事も叶はぬ、洋醫數人の診療を受けたが更に快方に向はぬ。そこで幕府へ醫師拜借を願出たの

である。幕府でも重大な意義を有する此治療には、尤も慎重な詮議が行はれた結果、翁と鍼醫官和田春徹に出張を命ぜられた。

佛公使は最も有力な幕府の支持者であり、外交問題などで、他國と事面倒になつた場合もよく仲裁の勞をも執り、長州征伐の時など兵力を貸さうと申出たと云ふ位の佐幕黨である。だから幕府も彼には非常に好意をもつて居る。夫れだけ宗伯の責任も重大で、老中水野忠精から此命を受けるや直に横濱に赴いた、其時の筆記に

慶應元年乙丑秋八月廿日、閣老山形侯、惟常及鍼醫官和田春徹に命して曰、佛蘭斯國公使姓シュウレー、名レヲンロセスと云者病あり甚困む、汝等往て速に之を療せよと、即日治裝して翌日未牌横濱港税館に着す、山口駿河守、栗本瀬兵衛二君接伴して閣老の命を傳へ公使の寓に於て之を診察せしむ、通譯官カーシュンと云者レヲンロセスの病狀を審に語て曰、公使今玆年四十九、數年脊腰に疼痛あり、然れとも未た起居に害あらす、日本行後已來其痛益劇動靜爲レ之自由ならす、神色爲レ之樂ます、飲食爲レ之甘からす、殆公使の職掌を廢するに至る。西醫妬は以風濕とし、外は蒸藥を施し、内に舍利別を用ゆ不レ愈一醫曰風濕漸浸淫し變して中風となる、溫泉にあらされば効なしと、因て熱海の溫泉に浴す、痛稍緩を覺ゆ、歸來痛反て甚、且終夜脊腰冷如レ滯レ氷眠ること能はす、神氣益委頓すと、惟常之を診して曰、公使の病風濕にあらず、亦中風にあらす、何となれは、風は發熱脉浮を主とし、濕は關節に流る今脉遲緩にして更に熱候なく、脊腰の痛定處あつて、關節遊走の痛にあらす、其濕邪にあらざる詳なり、又中風の如きは、脉左右偏勝して手足麻痺或癱瘓言語塞澁す、今脉左右診を同くし、且麻痺癱瘓の證なく、言語爽利又中風にあらざるを知るなり、但腹中奠弱、四肢倦惰動搖自由ならす、左足の跌陽少陰濇脉をあらはすものは、必左脉邊脊の際、筋絡損傷する處ありて氣血順利すること能はす、既に盛年を過きて氣血益衰弱元陽不レ能レ振故に腰冷疼痛甚に至るなり、試に問壯年の間打撲折傷、或は金瘡 疽、大亡血を患ふことありや、公使答て曰、余去歳迄凡二十年の間、陸軍の大將たり（シャノラーと唱候由）（實は亞弗利加遠征軍の通譯官にて騎兵少尉）戰鬪數度、就中十八年前大戰爭を爲し、一晝夜に三度落馬をなす、第二の時は大炮の丸馬首を貫き瞬息地上に墜ち、偃臥し馬は背上に倒れて死せり、其時勇氣勃々、更に痛楚を知らす後一月許を經て今の痛を發す、醫以爲霧瘴の地に於

て晝夜必戰す故風濕の致す所なりと、之を療して稍差、惟常曰、雨後寒暑の交或霖雨急冷の時疼痛を發することありや、答曰有レ之急冷の時尤甚とす、日本は吾國に比すれは寒帶に屬す故に痛なを難レ堪を覺ゆ、惟常曰、是風濕にあらす、死血ある故なり、請其痛所を詳にせん、乃寢所に入、裸體にして之を視るに脊髓大骨第十四より十五の骨碎て陷沒したり、左邊十四の脇章門の穴より左臀肉まて刀にて削たる如く羸瘦す惟常曰、此恐らくは馬足或は馬肩の爲に壓せられ、大骨陷沒し、左邊の督脉之が爲に傷損して營すること能はす、故に、疼痛固冷するなり、然れとも數十年の痛一朝に復すべきに非す、溫療順利の藥を服する時は、徐々に治すべしと、云公使唯諾して藥を乞ふ、因て桂枝加朮答附湯を與へ、其醫接を書して本國に送る、服藥及び鍼療一週にして腰溫り痛漸く減す、後虎脛骨丸を服して痛益安し、幾もなふして軍艦を裝して攝海に赴くと云ふ。當時投じたる藥方は左の如し

桂枝　氣を運らし筋骨を强壯にするものなり
芍藥　血を和して痛をゆるむる物なり
蒼朮　身體の濁濕を去りて關節を分利するものなり
茯苓　小便を通利して氣血を順にするものなり
附子　身内の陽氣を扶けて腰脊の痛を去るものなり
甘草　腹を和して諸藥を導くものなり
大棗　生薑　此二品は以上六品の藥性を混和し、胃中の容受よろしからしめ藥力を身體に分布するものなり

以上を書して之を栗本瀬兵衛に渡したるに、瀬兵衛通譯官カーシュンをして佛文に譯せしめて公使に示し後本國皇帝に送りしと云ふ

其廿二日通譯官カーシュン公使の別館に於て宗伯等を饗應した。一人前十五兩の費を要したとか。廿四日公使も追々快方に向つたので別れを告げた時公使は翁の手を握り、宿患過半は癒えたり喜に堪へす、其謝は本國王より贈るべし、余は此恩を謝せん爲治驗を新聞紙に掲載して日本に名醫あることを弘布致すべしと、謝詞を述べた。幕府は之を賞して銀二十枚を與へ佛國からも時計二箇と哆囉呢三卷を贈つた想なが、夫れは幕吏に横取されて翁の手には入らなかつたと云ふ。其時横濱から家へ送つた手紙に

一筆申入候陳は昨日八ツ時道中無故障神奈川表え着いたし申候同時より直樣横濱運上所へ罷越大目付山口駿河守殿制鐵所掛り栗本瀬平殿面會に而、フランスミニステール病氣容儒委細承り栗本氏同道に而ミニステール館え罷越診脉い

たし候處痼疾には有之候へ共拙生存寄も有之候故醫按委細申述候處カシユンと申異人能日本語を解し、ミニストルえ申聞候得は一々感服いたし、是非共療治受度旨相賴候ニ付諸役人よりも精々骨折療治之樣被申談候依而無據今日より治療に相掛申候付而ハ一廻りも相詰居不レ申候而ハ藥効も相見申間敷被存候故七八日滯留之上ニ而申立引立可レ申心得に御座候宿元も右の心得に而精々病家相勤候樣賴入候尤劃證有レ之候節ハ今村、柴田等相賴加勢之樣可然存候　一虎脛骨丸並渓附子蒼朮早々横濱飛脚え相賴御遣可レ被レ下候一此一封川路（左衞門尉宅）家え御届可被下候

右川路申入度早々如此御座候已上

かな川宮下新佐野屋と申宿ニ而

八月廿三日曉天認　　宗伯

於三千との

宗　叔との

此おみちは夫人で宗叔は養子の事である。

宗伯は非常な西洋嫌い、從つて蘭醫も嫌いであつた。夫れが天保十年十二月に幕府で蘭醫を抱へられ、嘉永二年三月には「御醫師中ハ蘭方相用候儀御制禁仰出され候旨其意を得、堅相守らるべく候但し外科眼科等外治の儀は蘭方參用いたし苦しからず候」と云ふ布達があり、外科にはドシ〳〵蘭醫が抱えられ、安政五年將軍家定の病に罹るや、戸塚靜海、遠田澄庵伊東玄朴青木春岱等を奥醫師に任命し、伊藤貫齋竹内玄同が奥醫師から執七になるや直に舊令を廢して「當時萬國の所置を探討するの間、醫術も亦西洋を兼學すべし。」と云ふ樣な令を出した。愈學問か專學する者も多い時である。以來幕府でも蘭醫が尤も巾を利かせた。其の中に漢方の宗伯が登用され然かも今度西醫の治療が効なく宗伯がロツシユを診療して効があつたのだから其得意や思ふべしである。

慶應二年七月將軍家茂大阪城に病むや、多紀養春院、高島祐庵、大膳亮弘玄院等と共に大阪行を命ぜられた。海路急行十六日大阪城に登城するや老中板倉伊賀守は直に宗伯を召し奥醫師御執七を命じて診斷を許し、醫按を密封して奉れと命じた宗伯は「脚氣にして衝心の徵候悉く具ふ恐らくは不日不測の變あらん」と上申したが、洋醫は心臟慢性痲痺なりと云ひ大抗論があつた。十八日から衝攻激しく、二十日薨去された。近侍の諸侯等少し宗伯の着が早かつたら、と何れも惜まれたと云ふ、家茂の柩と共に江戸に歸つて以來幕府の大奥即天璋院や和宮の御病氣の時はいつも宗伯が召されたと云ふ。此前にも諸侯から宗伯に治療を依賴して來た者も多かつ

たが、以來一層其數が多く、幕府の老中や若年寄の大部分は翁の客である。

慶應四年即ち明治元年は二百五十年の政權を朝廷に返上し鳥羽伏見の變があり、官軍は有栖川宮を大總督として發向靜岡に達せられた時、先軍は既に品川に迫つた。此時翁は和宮及天璋院の德川家名存續の嘆願書を持して川崎に赴き、薩州の隊長相良治部に會して其書を渡し、又參謀の西鄕隆盛に逢つて一書を附つて居る。

與西鄕參謀書

亡國微臣淺田惟常昧死再拜謹奉ニ書　大總督參謀西鄕君執事一伏惟皇上御宇如ニ日中一天擧ニ千載失墜之政典一修ニ萬邦協和之禮儀一將レ富レ國强レ兵以冠ニ於坤輿一荷居ニ王土一食ニ王粟一者皆可レ不ニ欣々然奉ニ戴此盛事一也哉特恠六師東征之日浮浪或抗其先鋒侯伯或矯ニ其　勅旨一薄海震驚戰爭無ニ止時一死傷載レ塗田野荒廢民疲レ於ニ奔命一加之天下金穀糜爛人牧不能疵其臣子臣甚恐一朝有事何以得奉ニ萬乘於ニ富嶽之安一鎭鑾醜於滄海之濱焉哉是固雖廟堂諸賢之所定議劃策而非草莽淺識之所覬測竊察其所由吾邦上古無爲垂拱而治此爲不言之世降至レ於ニ中古一禮文漸開自レ簡而繁自レ文而華眞率他爲虛飾質直變爲詐僞從是天下多端遂爲戰國政權移ニ于公卿一歸レ于ニ武將一王宮不絕如レ縷歟後眞人一出尊ニ崇　王室一匡ニ合諸侯一雖偃レ武修レ文奏廓清之功猶不失馬上得天下之風是以政刑簡易爲近上古垂拱之治ニ而昇平二百餘年政權煩雜尾大不掉加之以外夷之實際而中外紛錯墜綱紊紀宣乎神兵天降電戈一指而人情波駭大勢挫衂都城失レ守諸侯丸解以至レ於ニ今日一也雖然其君非有桀紂之暴其臣非レ有ニ莽卓之惡一其勢自然而然止、執事顧察ニ其自然之勢一省ニ先聖速成之箴一行政次德化民以仁則不刑而自威不戰而自勝是所謂王政之上乘兵略之本計也若夫征愈戰橫雜荼毒者枕藉遍野懸首盈竿天下無寧日一四民生怨嗟ニ則雖レ有ニ百善政一豈得ニ能行一哉孟子曰不レ嗜レ殺レ人者能一レ之兵志曰國雖レ大好レ戰必亡謂ニ此也夫王者父レ天母レ地子萬民歲終錄大辟囚惻然爲レ之素服減レ膳徹レ樂豈亦忍窮兵黷武棄億萬生靈於ニ鋒鏑之中一乎今執事振ニ非常之材一處ニ有用之時一挾ニ得レ爲之勢一宜レ奈古今政權之變態與民心之情實而不レ悖レ於ニ萬邦公平之法一六師振旅以行ニ王道一興ニ太平一則天下沐ニ皇澤一萬民歌ニ康衢一　皇基安如ニ盤石一可ニ引領而望一焉嗚呼聖世難レ逢盛典尤不レ易覩臣大欣ニ王政之復興一亦深慨ニ生靈之死亡一區々之情不レ能レ已レ於レ懷爰冒ニ瀆斧鉞之罪一以聞ニ執事一冀諒焉惟常昧死再拜敬白

宗伯は德川の祿を食んだのは少く、又王政復古にも勿論異存

はないただ、多くの生靈を戰爭と云ふ名目で失ふのを惜んだのだ。西郷に贈書すると共に三家の一たる田安、にも贈つて居る。田安龜之助は後に本家を相續した德川家達公である。又後年島津久光にも明治七年に人材登用の建白書を出して居る。明治四年迄靜岡藩士として德川家に仕へたが、此年辭して牛込寺所に閉居したが患者は益々增加し仲々隱居所でなく、支那朝鮮の公使等は皆翁の診療を求むる有樣。毎日二百數十人を診察する。これでは早速庫が建つであらう。然し庫を建てる樣では凡醫、普通の醫者である。先づ其家規を見よ、

家　規

一華族新に請診之向ハ大抵謝絶すべし、何となれば近來皆西洋に心醉し、其餘唾を舐るもの多ければ也

但從來依賴の邸は此限に非ず

一藥價を問ふ者あらば拒絶すべし、夫醫者仁術を旨とす、葯價を貪り診料を掠る者は商賈に劣るが故也

但し病者志を以て謝儀を致す者は敢て拒むに非ず

一塾生洋書を讀み洋服を着する者は速に放逐すべし當家數十年周の職を奉じ漢の術を行ふ也他書生と雖洋癖ある者は出入を許さず

但其職にありて洋服を着する者は此限に非ず

此家規にある通り、西洋嫌いと著財無用論は實に徹底したもので、死に就く迄、漢法保存と醫術試驗に漢方の特科を從く事を運動して居つた。又自己の身を持する事、實に謹嚴で、毎朝必ず冷水で身を清め、八十の老齢と爲つても診察の際は決して座布團を用ひず、門弟等が勸めても、吾は健康である。病人が布團もなくて居るに、吾が布團を用ゆる事があるかと一切聞入れず、全く利欲を離れて投藥して居つた。

明治十二年早蕨典侍が姙娠されたので、其診察を翁に命ぜられた。其八月三十一日皇男子御出生明宮と申上げた。即ち大正天皇の御事である。即ち宗伯を明宮の尙藥に任ぜられ年俸千圓と絹四疋を賜つた。後花松典侍が滋宮內親王を御生み申上げ一年隔て增宮內親王を御生み申したが共に宗伯に尙藥を命ぜられた。兩內親王共御早世であつた爲責を負ふて辭表を呈したが聽されず、尙明宮の御用を勤めて居つたが明治十七年「明宮に違例あらば宜しく侍醫と相謀り以て其治方を盡すべし」と云ふ命があつた。處が當時侍醫は全部洋醫であつたから、彼は大に不快であつたと共に非常に自尊心を傷けられ、直に辭表を奉呈して野に下つた。（例の淺田飴は此當時嚴下方に差上げた藥用飴である）若し官界游泳術の巧な人間なら、

何とか折合位階勳等否或は華族にもなれたかも知れぬ。然し夫れは翁の本意ではなかつたのである。明治二十一年從五位に叙し終身年金千圓の命があつた。

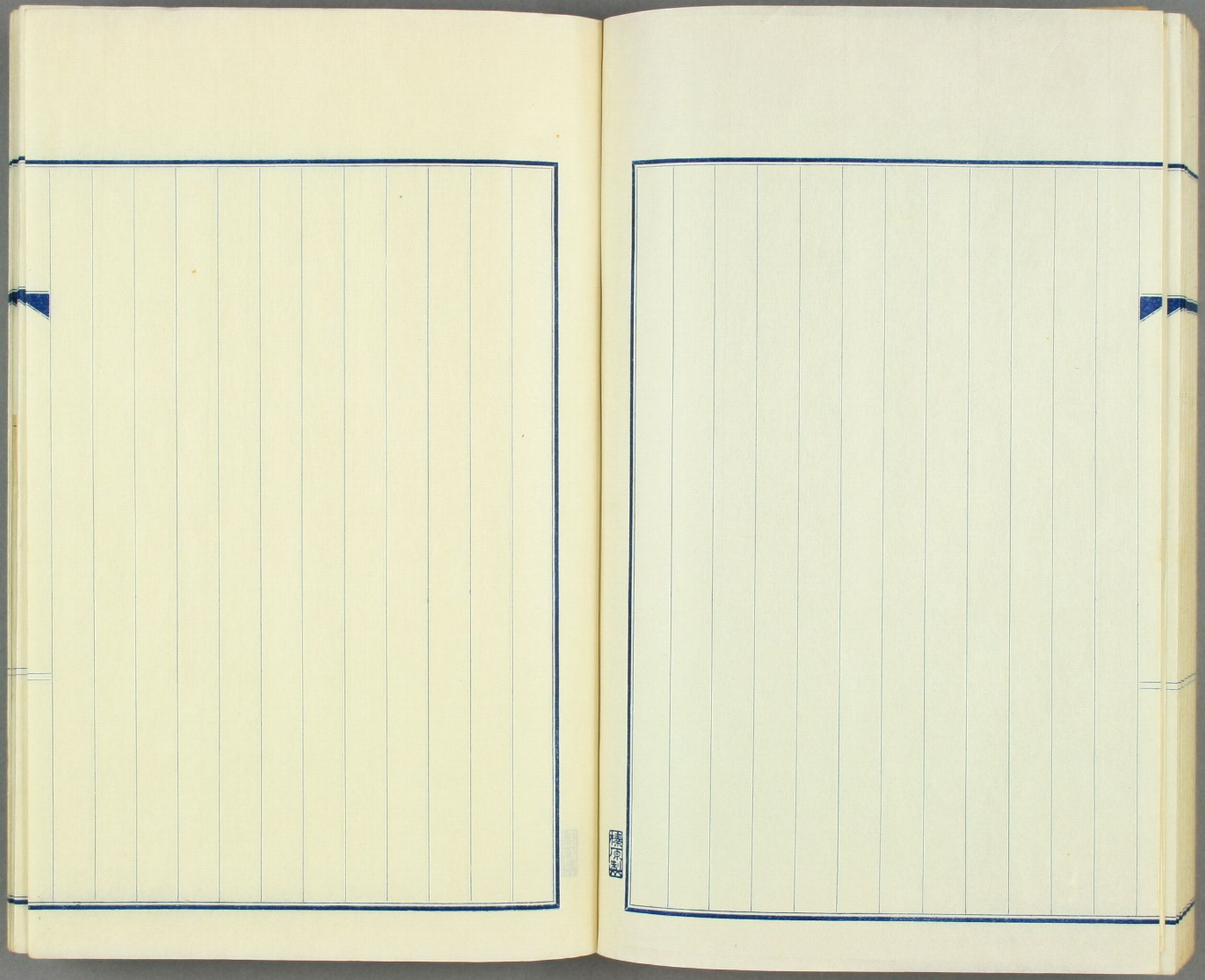
斯くて星霜八十一年、明治二十七年三月十六日永眠した。其病に臥すや既に死期を悟り藥を飲まない。養子の恭悅が孝道の爲だからと勸めるので仕方なく飲んだと云ふ程で、逝去の報天聽に達するや金二百圓を下賜せられ、東宮殿下からも百圓を賜つた。其葬列が實に盛んなもので、會葬者七千餘人、上は貴顯より下野人に至ると云ふ風で一切の階級を集めた觀があつたとか。尤も其筈、信濃の山奥から出で町醫となり將軍の執匕となり、東宮殿下の尙藥と爲る、其範圍の廣いこと恐らく翁の如きは他にないであらう。然も死に就く迄施療は止めなかつた。

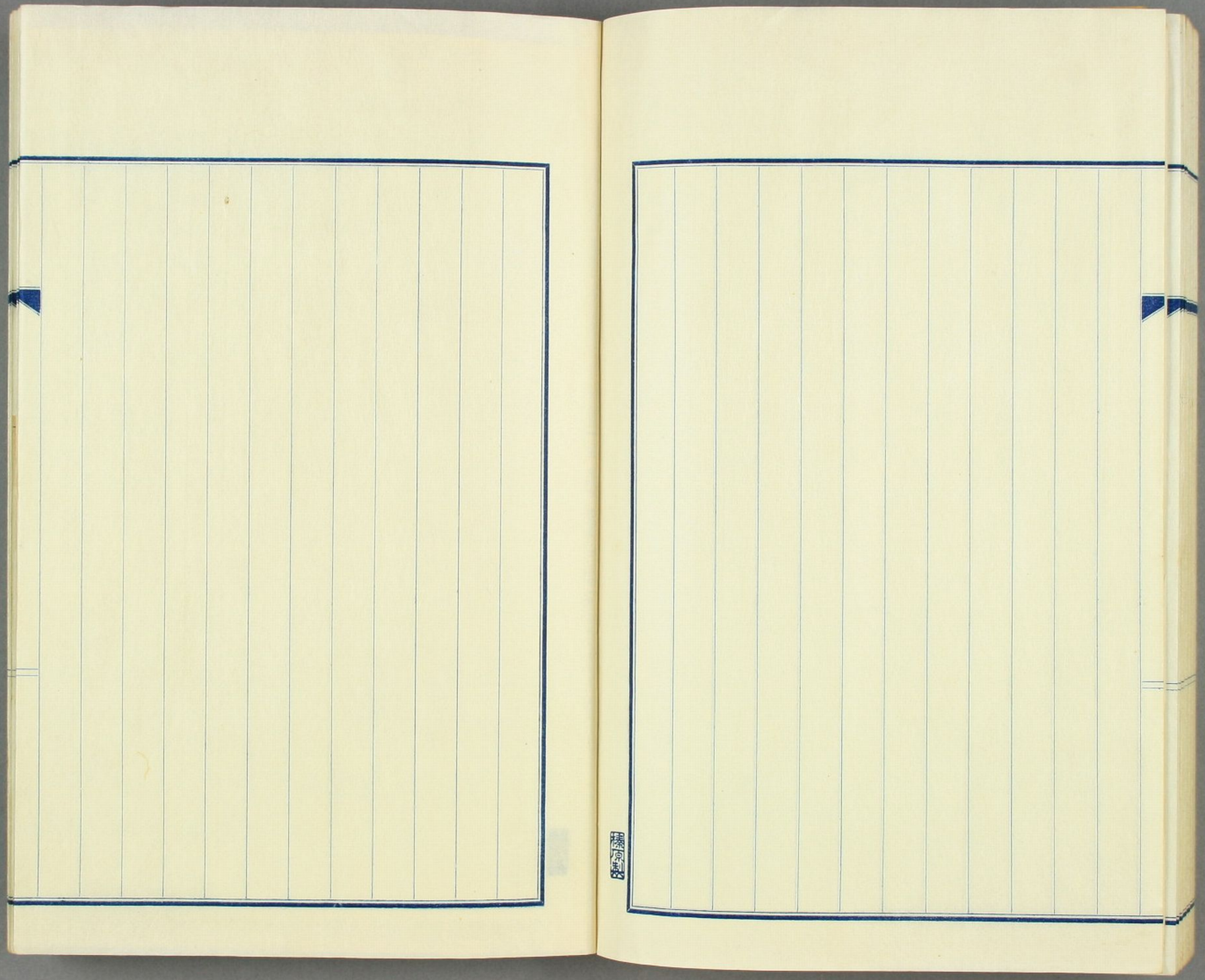
又翁の奇行として諸人の注目したのは駕で、明治の聖代馬車あり人力車ありで、更に不自由はないのだが、例の癖で昔が忘れられず駕を走らして居つた。又坊主頭も一生其まゝであつた想な。

著書も中々多く

脉法私言　一卷　　傷寒辨要　一卷

雜病辨要　三卷　　傷寒雜病辯證　三卷





中島謙吉 様

昭和

拝啓愈々御清穆之段奉賀候陳者御述著

御問候申差リ通ノ記下料稿原御

對スル

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價
蟹の泡	自 10年 9月 至 年 月	0		
大阪後一言	自 〃 年 月 至 年 月	2	230	
蘇苑一夕話上	自 〃 年 月 至 年 月	94	特価 80	
〃 下	自 〃 年 月 至 年 月	31	特 80	
輯山陽	自 〃 年 月 至 年 月	5	300	
春坊隨筆	自 〃 年 月 至 年 月	74	特 100	
〃 六種	自 〃 年 月 至 年 月	102	特 50	
〃 筆語	自 〃 年 月 至 年 月	100	特 50	
〃 漫筆	自 〃 年 月 至 年 月	45	特 100	
	自 年 月 至 年 月			
	自 年 月 至 年 月			
	自 年 月 至 年 月			
	自 年 月 至 年 月			
	自 年 月 至 年 月			
合計				

苦學生の場合

人の命の助け舟——"血の若さ"を賣る

生れ出た突飛な組合

學生輸血組合事務所

十一月はじめ、赤坂區溜池町五に「學生輸血組合事務所」といふ風變りな看板が掲げられた。帝大醫學部三年中郷定彦君が理事長、慈恵醫大本科二年大日方美代里君、日本醫科大學三年中山章君を理事とし、帝大醫學部慈恵醫大、日本醫科大學、日本大學醫科、東京醫專、早大、明大の學生に東京女子醫專、帝國女子醫專、日本女子大學、中央工學校の女學生十七名までこれに參加し、合計七十名の自治組織で顧問には醫學博士山田尚允、病理細菌檢査所長中山千人の兩氏を推戴してゐる。

（苦）

學生にとつての金策や家庭教師の口が殆ど塞つてゐるので、醫學專攻の學生達で、「血を賣らう」といふ突飛にも勇敢な提案をしたものがあり、「われ等は若い」の一條件を頼みにして、いよ〳〵新商賣の看板を高らかに掲げることになつたものだ。

組合員は、何れも帝大、慶大、南付屬病院、病理細菌檢査所、山田病院等で嚴重な體格檢査（血液型檢査、レントゲン檢査、健康診斷、梅毒反應）に合格したもので、なほ血色素八〇パーセント以上を有することを資格の條件としてゐる。

事務所では慎重入りの「給血者證明書」を備付けておき、男女共にA、B、O、AB（NMN式）のすべての血液型所有者と常に連絡して待機せしめ、電話一本で「證明書」をもつて輸血現場に駆けつけ得る敏活な手筈をとつてゐる。今日までの商賣繁昌振りを聞くと、滅死の重病人へ若々しい青春の血を輸血し、その代價を學資の一部にするといふ凡そ尖端的な苦學生の新しいグループが結成された、そして、この「血を賣りませう」組合は、すばらしい實績をあげつゝ、わが臨床醫學界に大きな話題を投げかけてゐる（カットは事務所の看板）

（血）

ム、一〇グラムにつき七十錢の割合の報酬をとつてゐるが、そのほか組合員中で健康が勝れず收入がない月には他の組合員一名の保證で月謝に限り組合積立金を貸與したり、組合の剩余金が多い場合には互に拂戻をするなどの行届いた相互扶助の規定を設け、美しい友情のうちに朗かな學生生活を送つてゐるのだ、理事大日方美代里君は語る。

職業的な輸血組合は東京に三つほどありますが、學生だけの組合は初めてでせう、醫學關係の學生が大多數で、先生や先輩の紹介により一日平均三件ばかりあります。人の生命を數ひつゝ學資の一部を稼ぐのですから、みんな至つてほがらかです。

月に卅圓ほどの收入があるといふから大したものだ。

液量は最高五百グラ

「拒取がない」の二條件を頼みにして、いよ〳〵新商賣の看板を高らかに掲げることになつたものだ。

組合員は、何れも帝大、慶大、南付屬病院、病理細菌檢査所、山田病院等で嚴重な體格檢査（血液型檢査、レントゲン檢査、健康診斷、梅毒反應）に合格したもので、なほ血色素八〇パーセント以上を有することを資格の條件としてゐる。

事務所では慎重入りの「給血者證明書」を備付けておき、男女共にA、B、O、AB（NMN式）のすべての血液型所有者と常に連絡して待機せしめ、電話一本で「證明書」をもつて輸血現場に駆けつけ得る敏活な手筈をとつてゐる。今日までの商賣繁昌振りを聞くと、月に卅圓ほどの收入があるといふから大したものだ。

液量は最高五百グラム、一〇グラムにつき七十錢の割合の報酬をとつてゐるが、そのほか組合員中で健康が勝れず收入がない月には他の組合員一名の保證で月謝に限り組合積立金を貸與したり、組合の剩余金が多い場合には互に拂戻をするなどの行届いた相互扶助の規定を設け、美しい友情のうちに朗かな學生生活を送つてゐるのだ、理事大日方美代里君は語る。

職業的な輸血組合は東京に三つほどありますが、學生だけの組合は初めてでせう、醫學關係の學生が大多數で、先生や先輩の紹介により一日平均三件ばかりあります。人の生命を數ひつゝ學資の一部を稼ぐのですから、みんな至つてほがらかです。

人の命の助け舟—“血の若さ”を賣る

生れ出た突飛な組合

苦學生の場合

十一月はじめ、赤坂區溜池町五に「學生輸血組合事務所」といふ風變りな看板が掲げられた

帝大醫學部三年中郷定彦君が理事長、慈恵醫大本科二年大日方美代里君、日本醫科大學三年中山章君を理事とし、帝大醫學部慈恵醫大、日本醫科大學、日本大學醫科、東京醫專、早大、明大の學生に東京女子醫專、帝國女子醫專、日本女子大學、中央工學校の女學生十七名までこれに參加し、合計七十名の自治組織で顧問には醫學博士山田尚允、病理細菌檢査所長中山千人の兩氏を推戴してゐる

（苦）

學生にとつての金銭や家庭教師の口が殆ど塞つてゐるので、醫學專攻の學生達で、「血を賣らう」といふ突飛にも勇敢な提案をしたものがあり郷も衆議一決、「われ等は若い」

「掬取がない」の二條件を頼みにして、いよ〳〵新商賣の看板を高らかに掲げることになつたものだ

組合員は、何れも帝大、慶大兩付屬病院、病理細菌檢査所、山田病院等で嚴重な體格檢査（血液型檢査、レントゲン檢査、健康診斷、梅毒反應）に合格したもので、なほ血色素八〇パーセント以上を有することを資格の條件としてゐる

事務所では爲眞入りの「給血者證明書」を備付けておき、男女共にA、B、O、AB（NMN式）のすべての血液型所有者と常に連絡して

待機せしめ、電話一本で「證明書」をもつて輸血現場に駆けつけ得る敏活な手管をとゝのへてゐる、今日までの商賣は當振りを聞くと、

（血）

液量は最高五百グラム、一〇グラムにつき七十錢の割合の報酬をとつてゐるが、そのほか組合員中で健康が勝れず收入がない月には他の組合員一名の保證で月額に限り組合積立金を貸與したり、組合の剩余金が多い場合には互に拂戻をするなどの行屆いた相互扶助の規定を設け、美しい友情のうちに朗かな學生々活を送つてゐるのだ、理事大日方美代里君は語る

職業的な輸血組合は東京に三つほどありますが、學生だけの組合は初めてですせう、醫學關係の學生が大多數で、先生や先輩の紹介により一日平均三件ばかり

月に卅圓ほどの收入があるといふから大したものだ

人の生命を救ひつゝ學資の一部を稼ぐのですから、みんな至つてほがらかです

學生輸血組合事務所

ブが結成された、そして、この「血を賣りませう」組合は、すばらしい實績をあげつゝ、わが臨床醫學界に大きな話題を投げかけてゐる（カットは事務所の看板）

溺死の重病人へ若々しい青春の血を輸血し、その代價を學資の一部にするといふ凡そ尖端的な苦學生の新しいグルー

中島謙吉 様　　昭和10年11月　日

拝啓愈々御清穆之段奉賀候陳者御著述之書籍賣上部數ニ對スル御原稿料下記ノ通リ差出申候間御査收被成度候

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印税割合	印税合計
蟹の絶	自至 10年5月	0				
大陽傳一之上	自至 〃 年 月	2	230	460	12	55.2
蘇苑一之上	自至 〃 年 月	94	特価 80	7520	12	902.4
〃 下	自至 〃 年 月	31	特 80	2480	12	297.6
輹山陽	自至 〃 年 月	5	300	1500	12	180
春城随筆	自至 〃 年 月	74	特 100	7400	12	888
〃 六稜	自至 〃 年 月	102	特 50	5100	12	612
〃 筆禍	自至 〃 年 月	100	特 50	5000	12	600
〃 彈薬	自至 〃 年 月	45	特 100	4500	12	540
	自至 年 月					
	自至 年 月					
	自至 年 月					
	自至 年 月					
	自至 年 月					
	自至 年 月					
合計						4076

備考　特価（創業五十周年記念特売）

印税計算月 自十月至三月 賣上ニ對シテハ五月ニ支拂 自四月至九月 賣上ニ對シテハ十一月支拂

追テ初版又ハ大訂正ノ場合ニ限リ壹百部ヲ新聞社雜誌社 其他ニ賣弘メノ爲メ贈呈用トシテ製本高ノ中ヨリ差引キ計算候ニ付 右御了承願上候

苦學生の場合

人の命の助け舟—"血の若さ"を賣る

生れ出た突飛な組合

十一月はじめ、赤坂豆腐池町五に「學生輸血組合事務所」といふ風變りな看板が掲げられた

帝大醫學部三年中郷定彦君が理事長、慈恵醫大本科二年大日方美代里君、日本醫科大學三年中山章君を理事とし、帝大醫學部慈恵醫大、日本醫科大學、日本大學醫科、東京醫專、早大、明大の學生に東京女子醫專、帝國女子醫專、日本女子大學、中央工學校の女學生十七名までこれに參加し、合計七十名の自治組織で顧問には醫學博士山田尚允、病理細菌檢査所長中山千人の兩氏を推戴してゐる

學生輸血組合事務所

プが結成された、そして、この「血を賣りませう」組合は、すばらしい實績をあげつゝ、わが臨床醫學界に大きな話題を投げかけてゐる（カットは事務所の看板）

（苦）

學生にとつての重荷や家庭教師の口が殆ど塞つてゐるので、醫學專攻の學生達で、「血を賣らう」といふ突飛にも勇敢な提案をしたものがあり忽ち衆議一決、「われ等は若い」「搾取がない」の二條件を顧みにして、いよ〳〵新商賣の看板を高らかに掲げることになつたものだ

組合員は、何れも帝大、慶大兩付屬病院、病理細菌檢査所、山田病院等で嚴重な體格檢査（血液型檢査、レントゲン檢査、健康診斷、黴毒反應）に合格したもので、なほ血色素八〇パーセント以上を有することを資格の條件としてゐる

事務所では學員入りの「給血者證明書」を備付けておき、男女共にA、B、O、AB、NM式のすべての血液型所有者を常に連絡して待機せしめ、電話一本で「證明書」をもつて輸血現場に駆けつけ得る敏活な手筈をとゝのへてゐる、今日までの商賣繁昌振りを聞くと、月に卅圓ほどの收入があるといふから大したものだ

（血）

液量は最高五百グラム、一〇グラムにつき七十錢の割合の報酬をとつてゐるが、そのほか組合員中で健康が勝れず收入がない月には他の組合員一名の保證で月謝に限り組合積立金を貸與したり、組合の餘金が多い場合には互に援助をするなどの行屆いた相互扶助の規定を設け、美しい友情のうちに朗かな學生々活を送つてゐるのだ、理事大日方美代里君は語る

職業的な輸血組合は東京に三つほどありますが、學生だけの組合は初めてでせう、醫學關係の學生が大多數で、先生や先輩の紹介により一日平均三件ばかりあります　人の生命を救ひつゝ學資の一部を稼ぐのですから、みんな至つてほがらかです

拝啓愈々御清穆之段奉賀候陳者御若述之書籍賣上部數ニ對スル御原稿料下記ノ通リ差出申候間御査收被成度候

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印税割合	印税合計
蟹の絶	自 10年9月 至 年 月	0				
大陽傳一之巻	自 〃 年 月 至 〃 年 月	2	230	460	12	552
春苑一之巻上	自 〃 年 月 至 〃 年 月	94	特価 80	7520	12	902.4
〃 下	自 〃 年 月 至 〃 年 月	31	特 80	2480	12	297.6
輪山陽	自 7 年 月 至 7 年 月	5	300	1500	12	180
春埴稲筆	自 〃 年 月 至 〃 年 月	74	特 100	7400	12	888
〃 六種	自 〃 年 月 至 〃 年 月	102	特 50	5100	12	612
〃 筆禍	自 〃 年 月 至 〃 年 月	100	特 50	5000	12	600
〃 獄筆	自 〃 年 月 至 〃 年 月	45	特 100	4500	12	540
	自 年 月 至 年 月					
	自 年 月 至 年 月					
	自 年 月 至 年 月					
	自 年 月 至 年 月					
	自 年 月 至 年 月					
合計						4076

備考　特価（創業五十周年記念特売）

印税計算月 自十月至三月 賣上ニ對シテハ五月ニ支拂 自四月至九月 賣上ニ對シテハ十一月支拂

追テ初版又ハ大訂正ノ場合ニ限リ壹百部ヲ新聞社雜誌社 其他ニ賣弘メノ爲メ贈呈用トシテ製本高ノ中ヨリ差引キ計算候ニ付 右御了承願上候

早稲田大學出版部

8. 3. 2.000

鑛山の會計さんが一念〝不朽〟の力作

珍重！『紺紙金泥書萬葉集』

帝室博物館を飾る

萬葉は書寫本の一部とこの作者中山さん

太宰帥大伴卿梅歌一首
吾岳に盛開有梅花遠有雪乎乱鶴鴨
南朝臣原雪梅歌
梅花所落開有梅花居之許遠有與曾倍互芳可聞
安倍朝臣奥道雪歌一首
棚霧合雪毛零奴可梅花不開之代滝曾倍而谷将見

荒つぽい鑛山で會計係としてお金の勘定をする傍ら、萬葉集を一日一千余字づつ一年間足らずに三十八萬二千三百二十四字を紺紙に金泥で書き上げた人があるとは、上野の帝室博物館

く受け入れた、この人は秋田縣小坂鑛山の一會計係、中山興作氏（四）である

その背戸信省貯金局にゐた頃からの無名の歌人で、數年前萬葉の歌八枚、これに使つた金粉廿匁、更に萬葉に關係ある

皇室

御系圖、藤原、大伴兩家の系圖、萬葉の分析表まで揃へた、この分析表も珍しいもので

長歌の數二六五、短歌四、一八七、施頭歌六二、佛足跡の歌一、無審二〇合計四、五三五の計算は別として句數が二九、一九二

漢字一八四、六七八、假名字一、八〇、六八九、數番號の數字一、六、九五七、字總數三八二、三二四といふ結果だつた

『清い心の努力』

感嘆する佐佐木博士

佐佐木信綱博士も中山氏の異常な努力と輝かしい出來榮えに感歎して杉帝室博物館總長に紹介し同館では溝口美術課長、矢島事務官等が審査の結果これを受入れたもので、同氏はこれを六曲二双の屏風に仕立てて近く披めることとなつたが佐佐木信綱博士は讃

中山さんは竹柏會同人で西本願寺本萬葉集の出版を見て愛誦され、三百廿六日の間に三十八萬二千數百字を寫されたのです、乏しい中を二千圓もつ

に完成した

三尺幅に長さ六尺の紺紙で百六十枚、これに使つた金粉廿匁、更

書き

十日

それからは好きな晩酌もプツツリやめ、うるさい子供が五、六人もゐるので、朝は未明の三時から六時頃まで、夜は子供達が寢鎮まつてからと一日平均五時間づつ平均千數百字づつ金泥の細筆をコツ〳〵と根氣よく進めて行つた、勿論會社の方とて一日も休まない、その功報いられて、初めの豫定では三、四年はかゝる筆情でゐたが一年ならずして去る九月一日を

に完成した

三尺幅に長さ六尺の紺紙で百六十枚、これに使つた金粉廿匁、更に萬葉に關係ある

皇室

御系圖、藤原、大伴兩家の系圖、萬葉の分析表まで揃へた、この分析表も珍しいもので

長歌の數二六五、短歌四、一八七、施頭歌六二、佛足跡の歌一、無審二〇合計四、五三五の計算は別として句數が二九、一九二

ひ自分の勤めは毎日欠かさず勤みながら涙ぐましいばかりの努力の賜物で、人間やらうと思へばどんなことでも出來ると私も感歎してしまひました、萬葉の紺紙金泥細字の書寫本はこれが初めてで永久に遺るものと思ひます、博物館に保存されゝば子孫が見たいと思へば入場料を出せば見られるからといふ外には何ら求める所のない清い心に、博物館でも快く受入れたと承つてゐます

子孫へ形見

中山興作氏は朴訥な口調で謙遜しながら語る

お恥かしいもので、新聞に發表されるのは見合して頂きたいのですが、これを書き始めた動機は友人がだん〳〵亡くなるにつけ、人間死んでも子孫が自分の

先祖がかういふものを殘したとみてくれるものを一つ作りたい——

と發願したことからです

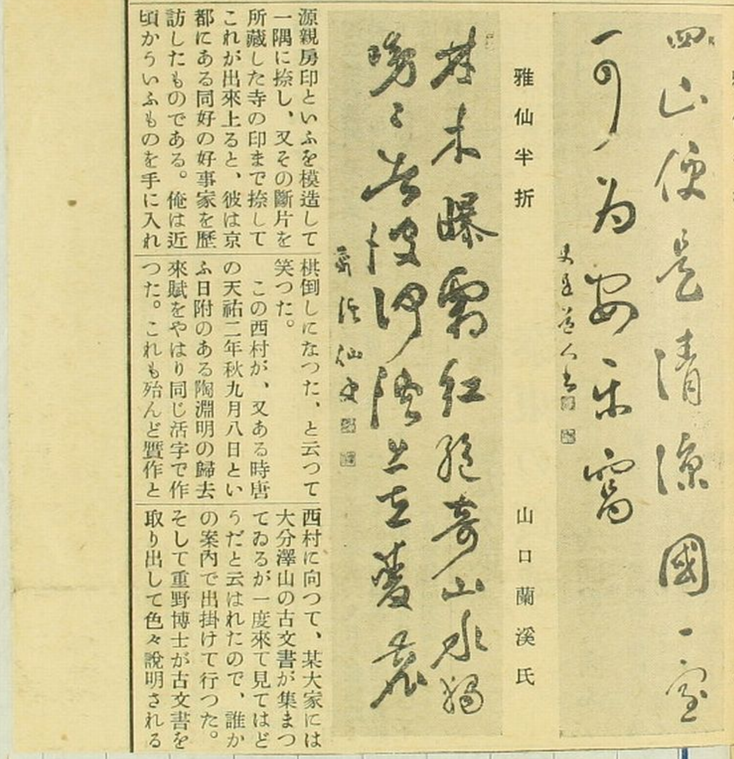
西村兼文の話

市島春城

先年、私の友人が「書畫贋物語」といふ本を出版した。面白い本ではあるが、私はこれを見た時、なぜ贋作家列傳を終りに添えなかつたかといふた。人は贋作家というと一概に賤しめるが、併し中には相當の藝術家もあり仲々面白い人物もある。西村兼文がその一人である。

この人は、徳川末期より明治にかけての人であるが此の人の作つたものが正しいものと受取られて、現に多くの方面に愛藏されてゐる。僧良辨の書いた紺紙金泥の心經は貴重のものであるが、西村の贋作が三千圓といふ値で某侯爵家の珍藏に歸してゐる。自分はその同じものを、その千分の一の値で買つたことがある。それは如何にも巧みに出來たもので、紙質でも書體でも、容易に眞贋の鑑定の出來ぬ位に作られてゐる。此の人は全く贋作の天才であつた。

ある時、古い活字を何處からか探し出し、同時に古代の紙やうのものを探し求めて、延喜十三年二月五日といふ年號までその活字で捺し、文選の斷片を作つたことがある。是は五六枚同時に印刷したが、どう見ても古色蒼然たるもので、贋作などとは思ひもよらぬ。更に尤もらしく見せる爲、源親房印といふを模造して一隅に捺し、又その斷片を所藏した寺の印まで捺してこれが出來上ると、彼は京都にある同好の好事家を歴訪したものである。俺は近頃かういふものを手に入れた。君の事だから、もし欲しければ買つた値段で據つてやらうといふので、好事家達も驚いた。延喜の朝にかゝる活字版などのあらうとは思はれぬのに、どう見ても正しいものであるから何れも喜んで云はれる代償で手に入れた。扨て手に入れた人々は、友人に誇らん として甲乙を訪ねて見ると實は俺も同じものを買つたといふ。更に丙丁も同じである。さては西村に一杯喰はされたかと、地たんだを踏んで口惜しがつた。本人の西村は頗る洒落な男で、俺は自分の細工がバレるのをおそれて、一日の中に皆駈けずり廻はつて買はせたが、俺には非常な苦勞であつた。その爲扨は御等は御存知の通人もこれには一杯喰はされた。當時日本へ來てゐた支那の公使黎庶昌は有名な古書通であつたが、これを見て大いに驚嘆し、流石に日本は古い國である、斯樣なものが殘つてゐるとは實に驚き入ると云つて、長い跋文を添へて版に附した。斯樣にひとり日本人のみならず、支那の通人さへ欺かれたのを見ても、如何に西村の技倆がすぐれてゐたかが察せられる。



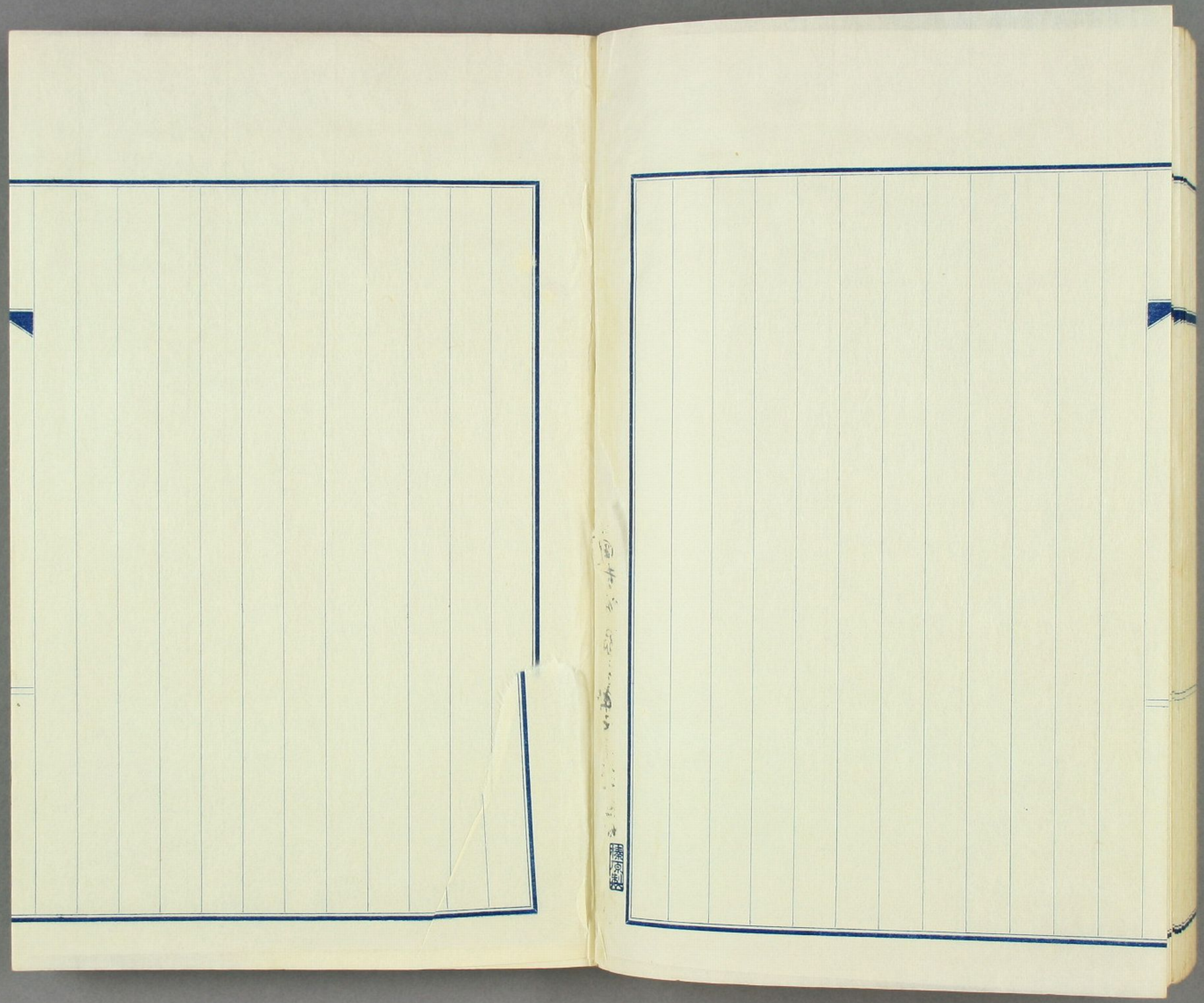
雅仙半折　山口蘭溪氏

雅仙半折　辻本史邑氏

西村に向つて、某大家には大分澤山の古文書が集まつてゐるが一度來て見てはどうだと云はれたので、誰かの案内で出掛けて行つた。そして重野博士が古文書を取り出して色々說明されるのを、西村は默々として感心した態度で聞いてゐた。廳て御馳走になつて門を出ると、その案内した人に向つて云ふには、重野さんも案外與し易い人だ、あの中には、少なくも二十通位は自分の作つたものがある、と云つて笑つた。

この人など、先づ近世贋作家中の名人であつて、その列傳の最後を飾るべき人であらう。この人、もとより名利の爲にそんな苦勞をしたのではない。斯うして人々をあツと驚かせるのが愉快であつたのであらう。又一個の藝術家たるを失はぬ。こんな事から考へてみると、私の知れる範圍はともかくとして、今の世の中には、この西村のいたづら品を初めとして、その他の贋作大中諸家が心血を注いだ作品が、色々の所の秘庫に、本物らしいつらだましひをしてうんと收つてゐるかも知れぬ。時移つては、自らそのけじめも解らなくなつてしまつたものも多からうと思はれる。

江戸の草分
御料筆司
筆匠 慶雲堂
（御巾越次第目録呈上可仕候）
東京・深川・高橋一ノ三
電話本所六三二三番
振替東京 三三二九番



全國うまいもの番附

横綱	東京	鯨さし蒲焼
大関	同	鮪さしみ
同	房州	鰹松葉焼
関脇	同	鱒天ぷら
同	沼津	鱒さしみ
小結	鎌倉	海老さしみ
前頭	秋田	しょっつる鍋
同	千葉	蛤酒むし
同	石狩	新巻鮭
同	陸中	南部凍鮭
同	函館	烏賊さしみ
同	同	はたハ館漬
同	羽前	米沢牛肉鍋
同	東京	青柳
同	青森	帆立貝柱附焼
前頭	福島	なめこ味噌汁
同	房州	鰹松葉焼
同	陸中	宮古焼かぜ
同	山形	最上川新巻鮭
同	南部	鮭紅葉漬
同	羽前	いりなめこ
同	常陸	助川海老鰹焼
同	北海道	三平汁
同	陸奥	鮫港鱈うしほ
同	北海道	厚岸牡蠣
同	羽後	横手壽司漬鮭
同	北海道	赤蕪千枚漬
同	同	大沼鮒雀焼
同	同	石川狩燻製焼
前頭	越後	柏崎鯛子鹽辛
同	南部	猿ケ石川鮎
同	相模	山北鮎すし
同	芙蓉	霞浦焼公魚
同	信州	佐久鯉こく
同	相馬	北寄貝鹽焼
同	信州	松川蕎麥
同	石狩	定山渓鰍附焼
同	越後	村上鮭川煮
同	陸前	石巻牡蠣飴
同	佐渡	鮎石焼
同	秩父	やまめ石焼
同	遠江	氣賀蒲鉾
同	同	濱名納豆
同	武州	川越甘藷
同	千葉	印旛沼蓴菜
同	房州	燻製秋刀魚
同	北海道	馬鈴薯
同	同	三州岡崎味噌
前頭	越後	年寄興津甘鯛味噌漬
同	猿ケ石川	小田原烏賊麹鹽辛
同	同	藁巻鰤
同	相模	山北鮎すし
同	芙蓉	霞浦焼公魚
同	信州	佐久鯉こく
同	相馬	北寄貝鹽焼
同	信州	松川蕎麥
同	石狩	定山渓鰍附焼
同	越後	村上鮭川煮
同	陸前	石巻牡蠣飴
同	佐渡	鮎石焼
同	秩父	やまめ石焼
同	遠江	氣賀蒲鉾
同	同	濱名納豆
同	武州	川越甘藷
同	千葉	印旛沼蓴菜
同	房州	燻製秋刀魚
同	北海道	馬鈴薯
同	同	三州岡崎味噌
前頭	越後	柏崎鯛子鹽辛
同	南部	猿ケ石川鮎
同	相模	山北鮎すし
同	芙蓉	霞浦焼公魚
同	信州	佐久鯉こく
同	相馬	北寄貝鹽焼
同	信州	松川蕎麥
同	石狩	定山渓鰍附焼
同	越後	村上鮭川煮
同	陸前	石巻牡蠣飴
同	佐渡	鮎石焼
同	秩父	やまめ石焼
同	遠江	氣賀蒲鉾
同	同	濱名納豆
同	武州	川越甘藷
同	千葉	印旛沼蓴菜
同	房州	燻製秋刀魚
同	北海道	馬鈴薯
同	同	三州岡崎味噌
横綱	京都	松茸料理
大関	播州	明石鯛刺身
関脇	大阪	かさき船
小結	備前	鱚さしみ
前頭	備中	櫻鯛蒸むし
同	同	豚料理
同	同	牡蠣
同	安芸	廣島牡蠣
同	備後	尾ノ道鹽鯛
同	肥前	からすみ
同	播州	明石蛸櫻煮
同	備前	岡山ばらずし
同	摂津	神戸牛肉
同	肥前	鯨鍋
若狭		鯖肉鹽むし
前頭	土佐	金澤ごり味噌
同	伊豫	鯉たゝき
同	紀州	竹輪丹ろく
同	京都	雲蒲鉾
同	白藤	鯉
同	小倉	鯛千枚漬
同	肥前	金澤日出汁
同	佐賀	蛸雀ずし
同	同	蟹そ
前頭	越前	雲丹鹽から
同	岐阜	長良川鮎
同	近江	大津鮒すし
同	同	ひがひ附焼
同	松江	鯉生づくり
同	越前	霞がこ甘露煮
同	尾張	きしめん
同	肥前	むつごろ浦焼
同	美濃	養老鯉こく
同	播州	明石牡蠣
同	伊勢	桑名浦焼
同	肥前	給蒲漬
同	山城	宇治鰻蒲焼
同	肥後	水前寺海苔
同	薩摩	鰹せんじ
前頭	土佐	鰹たゝき
同	伊豫	鯛丹ろく
同	紀州	竹輪
同	京都	雲蒲鉾
同	白藤	鯉
同	小倉	鯛千枚漬
同	肥前	金澤日出汁
同	佐賀	蛸雀ずし
同	同	蟹そ
前頭	越後	柏崎鯛子鹽辛
同	南部	猿ケ石川鮎
同	相模	山北鮎すし
同	芙蓉	霞浦焼公魚
同	信州	佐久鯉こく
同	相馬	北寄貝鹽焼
同	信州	松川蕎麥
同	石狩	定山渓鰍附焼
同	越後	村上鮭川煮
同	陸前	石巻牡蠣飴
同	佐渡	鮎石焼
同	秩父	やまめ石焼
同	遠江	氣賀蒲鉾
同	同	濱名納豆
同	武州	川越甘藷
同	千葉	印旛沼蓴菜
同	房州	燻製秋刀魚
同	北海道	馬鈴薯
同	同	三州岡崎味噌

司行

大京相小
阪都州田
洛鎌原
北倉蒸
酢ハ
ぐム
蒲鉾

締取

大東東
阪京京
箱握
すす
し

勸進元

大東東
阪京京
う細浅そ
工草
ど昆海ば
布苔
ん

本山荻舟氏編

寄贈
閲覧
禁帯出

三絃の銘 千重浪

あま色の研ぎの三絃に銘付